

その時分、蒲團と夜着とを新調しなければならなかつた。もともと絹布が一組あつたけれど、母親が嫁に來た時に持つて來たといふ夜着と、父親の家の没落した時にわづかに残したといふ蒲團とがあつたけれど、それはところ／＼切れて、繼などがあつてゐて、枕を置くあたりは地が薄く／＼、すくやうになつてゐた。それに柄や模様も舊式で、綿も何遍か打返されて固くなつてゐた。一組拵へなければ仕方がないと母親も娘も言つてゐた。で、一昨年冬の初め頃に、近所の知人から裁縫の出來る婆さんを一人頼んで來て、呉服屋から柄の好い銘仙を買つて、一週間の間もかゝつて、一組の寢道具を拵へた。二階には綿や綿の屑や糸屑などが一杯に散ばつた。備つた婆さんは仕事は丁寧だが、針の運びが遅かつた。半日かゝつて一枚の敷蒲團のかはを縫ふことが出來なかつた。氣の勝つた母親は、「本當にぐづだよ、三日かゝつて、まだ綿が入るやうにならないんだから、」などと言つた。ある日は、世話になつてゐる人が其處へやつて來た。坐るところもないやうに、二階には一杯に綿が散らばつてゐた。娘は、「好いでせう。柄が好いでせう。何うしてもね、もう一組なくつちや不便ですからね。敷蒲團も少し長く拵へたのよ。これなら、いくら脊が高くつても、足が出ることはないでせう、」などと言つて笑つた。娘はその時、旨く言つて、その世話になつてゐる人からいくらか金を出して貰つたりした。折角寢道具が出來ても、それを入れる押入がないなどと言つて、大工を一日頼んで、奥の長三疊の上につくりつけの大きな戸棚をつくつて貰つたりなどした。年の暮近く、男が旅から歸つて來た時の夜のことなどがつゞいて娘の頭に縊

返された。

いつとなく眠くなつたと見えて、娘は目をふさいだ。やがて妹は姉の呼吸の秩序正しい微かなリズムをなして行つてゐるのを聞いた。

今まで狭い庭のこま／＼した鉢物から棚の上のしたみに赫と照りわたつてゐた暑い日は、やうやくかへつて、さつき父親が尻端折をして、バケツに水を汲んで、一二杯そこにぶちまけて行つた餘滴は、未だに鉢物の葉の上に残つて、夕立にでも逢つたやうに、濃いかけつた空氣の中に涼しく見えてゐた。隣の窓にかけた簾の向うには、風鈴の微かに鳴る音がした。

隣との間に、幅二間ほどの長方形の空地があつて、石で出來た下水の溝が長くそれを横に貫いてゐた。草の繁つた中にはたる草などが雜つて咲いてゐた。もとは此處は此方の巷路から向うへ抜けて行くぬけ道であつたのであるが、吉井が懊惱して娘をつけつ視ひつした時分、不用心だと言つて、大家に談判して、其處に自費で大きな板塀をつくつて、扉をつけて、往來が出來ないやうにした。で、午後四時すぎになると、父親はいつもきまつて其處で行水の支度をした。先づ大きな鹽を下水の溝の上に置いて、それに並んで廣い洗場を拵へて、傍に、水甕と水桶と瀬戸引の金鹽とを置いた。その傍に並んで置いてあるトタン製の湯釜の長い鐵砲に、踏みながら小さな炭を入れてゐる父親の姿は、午後の明るい光線の中に簾を透してはつきりと見えた。

微温い水道の水は、一時間も経たない中にすぐ湯になつた。と、父親はそれを盥に汲んで、ゆつくり行水をつかつてから、腰まき一つになつて、「行水が沸いたよ。お前、つかはないかえ。」こんなことを言つて、妹娘の坐つてゐる前のところに来て、縁側に腰をかけてから、盆栽などを眺めた。

「父さん、行水に入つて好のかえ？」

かう母親が言ふと、「好いとも……よく沸いてゐらア。入るが好いや、」などと父親は機嫌よく言つた。

母親の肥つた體は、長い間簾越しに行水場に見えてゐた。妹娘の體も十分に發達して、乳などはもう大きくなつてゐた。「本當に行水はさつぱりして好い。清々しい好い心持らしい顔をして、妹は其處から出て来て、老婢と一緒になつて縁側を拭いたが、姉のぐつすり寢込んでゐる方を見て、「姉さんよく寢てるわねえ。」

「まア、そつと寢かしてお置きよ。」

「ええ。」

かう言つて妹は向うの方へ行つた。

母親は長火鉢のところ坐つて、細長い煙管に煙草をつめながら、姉娘のすやく／＼寢てゐる顔に凝て見入つた。さびしい衰へた表情が名残なくその寢顔に表はれてゐるのを母親は見た。白粉をも附けない素顔は、いやに黒く煤けたやうに見えた。

「矢張、苦勞してゐるんだ。」

かう思つた母親は何となく可哀相になつて來た。

ふと、恐ろしい夢か何ぞに魘はれたやうに、無意味な聲を立て、手足を動かした。が急に枕から頭を擡げた娘は、ぱつちりと大きな赤い眼を明いて、其處等に怖しいものがあるやしないかといふやうに四邊を見廻して、「あ、怖い夢を見ちやつた。何か言つて？」

「何にも言はないけれど、うなされてゐたよ。」

「さう！」起き返つて、亂れた髪を櫛でかき上げながら、「今、本當に、怖い夢を見ちやつた。追つかけて、つかまへられて、殺されるところなのよ。あ、怖かつた！」

「誰に追つかけられたんだえ？」

「それが不思議ね。吉井のやうでもあるし、小林のやうでもあるのよ。怖い顔つてなかつた。短刀をかう持つてね。もう少して斬られるところ。」

「道理で、いやな聲をすと思つた。」

「母さん、さつきから其處にゐたの？」

「あゝ。」

娘は考へるやうにして、「あゝ厭だ。いやな夢を見ちやつたものねえ。」

「お前、お湯に行くかえ？」

「もう、そんな時間？」

「あゝもう五時すぎだよ。何なら行水も沸いてるよ。」

「行水ぢや綺麗にならないから、お湯に行くわ、私。」

暫くしてから、手拭と石鹼を持って近所の湯に出かけて行く娘の姿が見えた。

お座敷が二日も三日續もいてかゝらないやうなことが時にはあつた。さういふ時には、娘は一層懊惱した。「あんなにお茶ばかり挽いてるんぢや、下宿代も出やしない。向うで、住替へに出たい氣なら、今度は無理にとめない方が好いよ。」かう言つて、榮を出してやつて了つたけれど、今度は自分一人がかせぎ人で、自分が休んでお茶を挽いてゐては、一文だつて入つて来やしないと思ふとお座敷がかゝつて来ないといふことが一層深く氣に懸つた。榮がゐれば、三日に一度出て行つても、一人でかせいでゐるといふ心丈夫なところが何處かにあつたけれど、今ではそれがすっかりなくなつて了つた。「本當に、ひまね。丸でお話にならないわね。檢番に行つて見てお出でよ。」姉はかう言つて、妹を見せにやつたりなどした。切火の音がすると、「何處だえ？ 今のは？」

「お向うよ。」

「お向う？ めづらしいわねえ。何處からかゝつて来たんだらう？」

「花村か何處かよ。」

「さういふところでも、何處でも行くんだからね。」

「お前さんは、贅澤なんだよ、一體。」

かう傍から母親が言ふと、

「さうね。えりごのみなんかしてゐられないわねえ。こんなに不景氣では——。昨夜なんか、奥が一杯になつてゐながら、土地の藝者は二人つきり入つてゐないんだからね。」

「お隣でも、これで三日お茶を挽くよ。」

「そんなことはないよ。昨夜もおそく歸つて来たぢやないか。」

「あれは、お座敷ぢやないんだよ。あの男と何處かへ行つたんだよ。」

「さう——。照ちやんなんか暢氣ね。」

「あんまり暢氣でもないよ。此間のやうに、夜中に喧嘩なんかしちゃ——」

「でも、思ふ通りにする氣なんだから好いわ。それに、照ちやんなんか、一人だから好いわ。何をしても、誰も喧しく言ふものがないから——」

「すぐあゝだ、」と言はうとしたが、母親は黙つて了つた。

夏の中頃に來る颱風は、もうそろ／＼やつて來てゐた。空は晴れてゐながら、いやな強い風が吹いて、白い雲が湧き立つやうにかゝつては晴れて行つた。時には、驟雨が凄じく軒を掠めて行つた。

「また、水が出やしないかねえ。」

と、母親は眉を蹙めた。

「さう言へば、母さん、三味線がすつかり駄目よ。新しいのだけでも直して置かないと、一つしかないんだからね。本當に、南風に逢つちやたまらない。」

「本當だよ。」

「何うか工夫がないもんかね。」

「南風の當らないやうなところに置くより他仕方がないよ。」

「本當に困つちやう。」

娘は習ひかけた一中節も面倒臭いといふやうに、一日おきにやつて來る師匠を門口から返した。「何うも、體中がだるくつて仕方がないんですよ。足は丸でぬけるやうなの。脚氣にでもなつたんぢやないかしらん、」などと言つて、朝からごろ／＼と寢をべつた。時には、二階に上つて、長い間、下りて來ないの、母親が行つて見ると、風通しの好い室の真中に、眞産を敷いて、すや／＼と心持好ささうに寢てゐた。

ある日、その晝寢からさめて、何氣なしに、裏の窓のところに行つて見た娘は、盆栽やら石やら水盤やらが並べられてある簾の下の隅のところに、小さな白い鉢に合歡の花の薄紅く美しく眼もさめるやうに咲いてゐるのを發見した。

「あ、お父さんがまた買つて來た。さつき上つて來て、何かゴソ／＼してゐると思つたのは、これだよ。」かう思つた娘は、ひとり微笑ますには居られなかつた。娘は引入られるやうにして、その可愛い美しい紅い花に見入つた。

「母さん、ちよつと。」

娘は二階から呼んだ。

母親が上つて來た時には、娘はその小さな鉢を隅の方から水盤の方へと持ち出して見てゐた。

「御覽な、母さん。綺麗ね。」

「何だえ？」

「合歡の花つて言ふんでせう？」

母親はわるい眼を押附けるやうにして見たが、「あ、合歡だ。」かう言つたが、「何うしたんだえ？ また買つたのかえ？」

「今、買つて來たのよ。今、ゴソ／＼つて置いて行つたのよ……」

『道理で、歸るとすぐ二階にあがると思つた。』

『でも、綺麗な花ねえ。』

『合歡なんかしやうがないよ、お前。ぢき枯らして了ふんだから。これでも、餘程出したんだよ。あの爺が本當に、もう決して買はないなんて言つて置いて、そんなお金があるんなら、浴衣でも買へば好いの……』

『でも、ちよつと綺麗だわ。』娘は母親の言葉には頓着せず、手に取つて見て、『やさしいしほらしい花ね。それに葉が面白いわねえ、日中はひらいて、夜になると、一緒になるんでせう。面白いわねえ。田舎なんか行くと、川の縁なんかによく咲いてるのよ。』

『でも、この位で、かう花を持つてゐるのは少いよ。餘程したんだよ、あの爺——』  
二人はやがて下に下りて行つた。

娘は、

『父さん、罰金、罰金!』

『え。』

『何をおごつて呉れるの?』

『え。』

『えぢやないわ。隠したつて駄目よ。鰻かえ? それともお鮎?』

『アハ、ハ、ハ。』

と父親は大きく笑つた。

『たんと罰金を出させておやりよ。あれほど言つたんだから。』

母親の言ふ跡について、父親は、また、『アハ、ハハ』と崩れるやうに笑つた。

『でも好い花ね。』

『好いとも……あんな小さくつて、あれだけ花を持つのは滅多にありやしない。』かう言つたが、父親はすぐ二階に上つて行つて、得意さうにそれを持つて来て、そのまゝ縁側に置いた。

『何うも、父さん、二階に上つて来て、何かゴソ／＼やつてるから、變だと思つたのよ。さうしたら、ちやんと隅つこの方に、これが置いてあるぢやないか。』

妹や其處に見に来た老婢に話してきかせるやうに娘が言ふと、父親はまた笑つて、

『ちよつと、あるところに寄つて見ると、これがあるから、もう欲しくつて仕方がないから、金がかつたけれど、手金を置いて持つて來ちやつた。……この花が好い。』

『本當に綺麗ねえ。』

妹も仕事の手をとめて見てゐた。

「これは、山には澤山あるなア。日中は離れてゐて、夜になると一緒になるつてな、男と女のやうだなんて、よく田舎では言ふだよ。」田舎育ちの老婢はこんなことを言つて笑つた。

「餘程したんだらう？」

「ナアに……」

「隠してゐるんだよ。二圓ぢや買へないかもしれないよ。」

「ナアに……」

「父さん、本當にいくら？」

「一圓出ない……」

「うそ、うそ。」

「本當ですよ。」父親の笑顔はその言葉の好加減なのをあらはしてゐた。

父親はその小さな鉢を身も離さないやうにして愛玩した。二階に持つて行つたり、床の間に置いて見たり、縁側に出して水を灌ぎてやつたりした。時には、二階の窓の盆石の間に置いた。

ある日、娘はいつものやうに思出して二階の窓のところに坐つてゐた。と、面白さうに笑ふ聲がふと耳に入つた。で娘は何氣なく體を起して、向うを見下ろした。そこからは、簾を通して、前の平家の並んだ三間が一目に見わたされた。その家は去年の秋ごろから久しく明いてゐたのであつたが、この春

下谷に出てるたといふ妓の一家族が引越して來た。娘の家に、今、旅に行つてゐる男が出入る頃には、其處の妹だの下婢だのがめづらしがつて、よく上り端のところからすき見をするので、妹や母親は怒つて、あてつけるやうなことをわざと聲高く言つたりした。姉といふのは、三十を出たか出ぬかと思はれる位の薄手の女で、この二三軒先の三助といふ藝者の家から看板借で出てゐるのではあるが、お座敷などは滅多にかゝつて來ず、一日ぐづぐづと暮らしてゐるやうな生活であつた。そこに毎日女よりは三つ四つ下位のちよつと男らしい苦み走つた好い男が出入したが、何うかすると、女と其男と戯れてゐるのを此方の二階から見ると、これはこれまでも度々あつた。夜は、蚊帳の中に枕が二つ並べて置いてあるのが明るく電燈の光に透いて見えた。

ふと、見ると、此方の六疊には、七月ぐらゐのおなかの大きい妹が裁縫をしてゐて、そこと奥の座敷との中の襖は閉めてあるらしく、座敷には、男が浴衣姿で仰向けに兩方の膝を持ち上げて寝轉んでゐて、その此方に、女が矢張だらしなく並んで寝てゐるのが半分ほど見えた。女の顔は襖の陰になつて見えないうが、男の鬚の生えた顔ははつきりとよく此方から見られた。男の手と女の手とは絡んでは離れ、離れては絡んだ。

男は體を揉むやうにしたりした。

何か甘い物語に耽つてゐるといふことはすぐわかつた。女の心が漲るやうに男に注がれて行つてゐる

のもそれと察しられた。女の手は男の胸のあたりを軽く打つた。男も打つ真似をした。

おなかの大きい妹が、その次の間に落附いて、隣りの間の歡樂を知らないやうな顔をして、メリンスか何かの單衣の袖を縫つてゐる形が娘には殊にある強い性的的の感じを與へた。妹はをり／＼針の手をとどめては苦しうに長大息をついた。壊れかけた大きな丸髻の下には、やつれた影の多いさびしい顔が浮き出すやうに見えてゐた。

『あゝ、あゝ。』

思はず溜息をついて、娘はぐつたりとした。旅にゐる男のことや、世話になつてゐる人のことや、其處此處のお茶屋で逢つてゐる客のことなどが際限なく思ひ起された。娘はまた頭を枕につけた。

『あゝ、あゝ。』語らなうにして再び溜息をついた娘の眼の前には、薄紅い美しい合歡の花の鉢が置いてあつた。娘は隣近所に通つて来る男や旦那を種々に想像して見た。娘はまたも溜息を吐いた。

ある朝、何氣なく新聞を見てゐた娘は、ふと其處に自分の名の出てゐるのを見た。娘は、引込まれるやうにして、その記事を読んで行つた。始めは、赫となつた。中ごろは腹立たしいやうな氣分になつた。終には冷めたい水を脊中から浴せられたやうな氣がした。娘はそのまゝ新聞を傍に置いた。成らうことなら、この新聞を母親や父親や妹に見せたくないと思つた。破つてこつそりと何處かに捨て、了ひたか

つた。しかし、そんなことは出来なかつた。

娘は黙つて坐つてゐた。

わざとさういふ風に書いたのか何うか知らないが、昔のことゝ今のことゝが一所になつて出てゐるのを娘は見た。正面にゐる人を側面にしたり、側面にゐる人を正面にしたりしてゐた。しかし、そんなことは何うでも好いとして、これが出たために、これが世間に知られたために、直接に損害を受ける方面が一番烈しく娘の胸をついて來た。『確かにさうだ。さうに違ひない。あの姐さんが話して書かせたに相違ない。言つてやらなくつちやならない。』などと思つて下唇を咬んだ。

母親が新聞を手を取つた時、娘は言つた。『母さん、書かれちやつた！』

『何を。』

『私のことを。』

『何處に？』

『其處に——』

母親は手早く新聞をひろけて、娘の指さす條を見た。『困るねえ——これぢや怒るよ。』

『だつて仕方がない。』

『困るねえ。』

「きつと、あの人が話したのよ。それにきまつてゐるんだから……。あそこには、此の新聞の記者がよく来るんだから。……取消をやらうかしら？」

「そんなことをしたつて仕方がないよ。」

妹はそつと取つて、読んで、又そつとそれを下に置いた。

「何うせ好加減だから、構はないけども、稼業にさはるから困るわ。何うせ、新聞社では面白半分には書くんだらうけども……」

「本當だよ。」

しかし、母親にしても、娘にしても、それを何うすることも出来なかつた。娘はその記事の影響して行く種々の人達のことを考へた。そこに書かれてある人達は、それほど氣にかけないでも好いけれども、書かれてない人達で、この記事を読んだために、思ひもかけない悪い結果を娘の身の上に齎らして来るものがないとは限らなかつた。ある大きな幸運が鼻の先に垂下つてゐたのに、そのため急に何處かに行つて了ふかも知れなければ、着々と計畫して行つてあることが、そのために向うから壞れて、男が旅から歸つて来るまでの準備がすつかり駄目になつて了ふかも知れなかつた。娘は中でも此頃あるお茶屋に來てゐる髪を綺麗にわけたおとなしい身分のある公達の眼にその記事が觸れないことを切に望んだ。

その日は娘は一日詰らなさうな顔をして暮した。何處に行つて見る氣もしなかつた。奥服屋は、「でも、

あれに出されるやうになれば、いゝ廣告でさ、」などと言つて却つてそれを持揚げるやうにしたけれども、娘は矢張あまり好い氣持はしなかつた。夕方に、ある茶屋からかゝつて行つて見ると、入るより早く「書かれましたね。はア、かういふ姐さんですか、」などとお客は言つた。お茶屋の女中なども何の彼のとひやかした。ある女將は、「雪ちやんなんか、ちつとやそつと浮氣をしたつて、後循がたんとあるから安心だよ、」などと言つた。

「でも、不思議なもんね。新聞に書かれたので、今日はお座敷を三つした。」其夜おそく娘はこんなことを言つて歸つて來た。

一日二日、娘は浮かぬ顔をしてゐるのを母親は見た。母親にはその原因はちやんとわかつてゐた。内母親にもそれが心配にならぬでもなかつた。世話になつてゐる人は新聞を見たに違ひない。しかし、見たからと言つて、そんなことを氣にするやうな人ではないが、さうかと言つて、そこからまた何んな空氣が醸されて行くかも知れなかつた。黙つて詰らなさうにしよけてゐる娘のさまを見ると、母親はいつものやうに、「だつて、仕方がないよ。身から出た錆ぢやないか、」と言ふにも忍びないやうな心持がした。

しかし母親と娘とが氣にかけたほどのことはなかつた。ある日、その世話になつてゐる人はやつて來た。初めは「入つて來た時は、その顔がすぐ覗かれるやうな氣が親子ともしたけれども、いつものやうに矢張機嫌の好いのを母親も娘も妹も見た。」さうだつてね、却つて廣告になつて好いさ。新聞がある



かえ？ お見せな、」などと言つて、押入の中につくねて置いた其日の新聞をさがさせて、平氣な顔をして、それを讀んで、「此處に書いてある人は何うしたえ？ 逢ふかえ？ 時には？」

「ちつともお目にかゝらないわ。」

「すつかり切れちやつたのかえ？」

「だつて……あの人の、怖いやうな人よ。何でもよく見抜く人よ。ちつとも、まご／＼してゐられないやうな人ですもの。」

「でも、一時は大分、此方からも打ち込んでゐたぢやないか。」

「だつて、あの人は五分々々ですよ。向うだつて、随分お寶を使つたんですもの。」

「何方が先によしたんだえ？」

「それは私よ。」

かう言つて娘は笑つた。

「うそだらう、向うからよされたんだらう。」

「本當よ、私よ。私が無心を言つてやつてから、何とも言つて來ないわ。」

「向うでも、それぢや、そんなに深くも思つてゐなかつたんだね？」

傍にゐた母親は、「さうでもないやうでしたけれど、あゝいふ人はわかりませんね。自分のことでも、

何でも、平氣で書くやうな人なんですから、あれが稼業なんですから。」

「さうかね。」

かう言つて笑つて、「旅からも、たよりがあるかね。」

「ちつともないわ。」

娘は笑つて打消すやうに言つた。

娘は自分の方からよしたといふ人に此間も逢つたことを思ひ出してゐた。ある人がある時はかけにし、ある人がある時は表にするやうな境遇に、長い間娘は身を置いて來たことを考へた。此間、其人に逢つた時、娘は自分の今の境遇を話して、つとめて同情をひくやうにして置いた。何ぞと言ふ時には、其方の方からも、いくらかは援助を得ることが出來ると娘は信じてゐた。

世話になつてゐる人は其日は機嫌よく酒を飲んで、娘に三味線を弾かせなどした。その人は清元が上手で、酔ふと、いつも好い聲で唄つた。ある大きな店の番頭をしてゐるやうな人であつた。來る時には母親が好きだと言ふので、いつも新橋の青柳の金鰐を土産に持つて來た。「あゝ、また、私の好きなもの、」などと言つて、母親はボール箱の蓋を明けた。

其日も旅にゐる男の話だの、榮がるなくなつて、ひとりで稼がなければならなくなつたことだの、ひまでお茶ばかり挽いてゐて、これではとても稼業にならない話だのを娘は持出してその男に話した。旅

の男の話が最近にすつかりばれて来てから其男は以前のやうに大氣なところを見せなくなつた。もとは、財布に金がありさへすると、五十や百は何とも思はずに出して呉れたけれども、今ではそれを強ひて望む譯に行かないやうな位置に女は身を置いてゐた。「仕方がないわ。困れば、もとのやうに發展するわよ。もとは賣れたんですからね、これでも……。一月に二百や三百はいつでもかせいだんですから。」娘はこんなことを言つて男の顔を見て、「唯ね、その時分から見ると、體が弱くなつてゐますし、それに、お茶屋へ行つて、しんきに發展するとも言はれないから、それがちよつと困るのよ。矢張、あれでなくつちや駄目ね。おきまりの祝儀ばかり取つてゐるやうでは駄目ね。何しろ、こつちの量見の持ちやうで、此方の意氣込がちがひますからね。何でも、そのお客を物にしようと言ふのと、このお客の座敷に二時間なり三時間なりつとめさへすればそれで歸れるといふのでは、何うしたつて違ひますからね。」

「さうだらうね。」

女の言葉の裏をわざと讀んでやらないやうにして、男は言つた。

娘は溜息を吐いた。

下で、「姉さん」と呼ぶ妹の聲がした。

「何アに！」

「奥からお座敷！」

「さう、今下りて行く。」

かう言つて下りて行つたが、すぐ上つて来て、「ちよつと行つて來ますわ。奥だから、ちきあきますからね。此頃のやうに不景氣ぢや、一つだつて無駄には出來ませんからね。此頃ではお茶を挽くと、それやイヤな氣がするのよ。一つでもしないと、何だか體が減入つて行くやうな氣がするの。ね、少しおよつていらつしやい。」

で、娘は男のことなどには頓着せずに、急いで出かける支度をした。娘は、その奥のお座敷のお客の誰であるかをよく知つてゐた。それはその方面から幸運を引き出さうとしてゐる大切な若いおとなしい品の好い公達に相違なかつた。

娘がその奥のお茶屋の門を出たのは、其夜の十時すぎであつた。五時間ほど娘は其處にゐた。車の上で涼しい風に吹かれながら歸つて來る娘の胸には、溢るゝばかりの期待と喜悅と希望とが漲つてゐた。ある計畫が整然として娘の腹の中に出來かゝつて來てゐた。「何も心配することはないわ。旅から歸つて來る時分までには、屹度物にして見せる。種が大きいから好い。」こんなことを娘は絶えず考へてゐた。川にはモーターの音がけたゝましく聞えて、軒に岐阜提灯を綺麗に下げた舟の灯が明るく水に映つて動いて行くのが見えた。涼しい風は絶えず川の方から吹いて來た。

「歸る時、入つて來たのは、正子さんね。」

『さうでした。』

『今日はちつとは賑やかでしたかえ？』

『さうですね。ちつと動きましたね。』

娘は機嫌好ささうに、若い車夫とこんな話をした。

格子戸を明けて入ると、世話になつてゐる人は、母親と縁先に涼みながら、何か頻りに話してゐた。軒には岐阜提灯が下つて、團扇などが軽く動いてゐた。娘は、『あゝ、あゝ、えらいお座敷につかまつちやつた。お客七人に私一人ぢやないの？ あとではそれでも秀子さんを頼んでかけて貰つたけれど、随分ひどい目に逢つたわ。』

『お客は男ばかり？』

『いゝえ、よし町あたりの藝者が一人に、女中がついて来てましたけどもね。その女中がまた気がきかないのよ。でもね、三圓は貰つて来ましたけれどね随分困つたわ……』母親に向つては、『奥では、それは込んでゐるのよ。お客が一杯。何んな室でも明いてゐる室はない位。それなのに、土地の藝者は、私と、秀子さんと他に妻吉さんが入つたきりなんですもの。あとから正子さんが行つたけれど……』ひどいのね。』

こんなことを言ひながら、娘はお座敷着を中形に着替へたり、手拭を絞つて貰つて顔を拭いたりした。

『あゝ、これで清々した。』かう言つて娘は縁側のところに来て坐つた。狭い庭の上には、星が透明に美しく金属のやうに輝いてゐた。男の晝間持つて来た菓子がまた其處にひろけられて、茶などが淹れられた。時計が十二時を打つ時分には、それでもあたりがしんとした。座敷には蚊帳が吊られ、三疊には朝が早いからと言つて、老婢は先に御免を蒙つて早くも微かな軒を立てゝゐた。二階にはもうちやんと支度が出来て、新しい匂ひのする蚊帳が涼しい夜風に吹かれてゐた。やがて其處に上つて来た二人は、夜涼を貪るといふやうに、暫し窓の簾の前のとこりに立つてゐたが、ふと、男は向うの家の座敷に、はつきりと繪か何ぞのやうに、枕の二つ並んだ空しい床が青い蚊帳の中に透いて見えてゐるのに眼をつけた。

『いつでもあゝなのよ。』

『さうかえ？』

『あんまり覗くとわかつてよ、およしなさいよ。』

『大丈夫よ。』

こんなことを言つて、二人は笑つた。窓のところにおいてある合歡の小さな鉢は斜に微かに灯の光を受けて、夜目にも著るくそれと見えた。花は赤く、葉はびつたりと重なり合つてゐた。

娘の心はある計畫に向つて絶えず歩を進めて行つてゐた。あるところまで發展して、自分で自分の生活を築き上げるより他は何うすることも出来ないと思つた娘は、ぐづくして、寝たり起きたりして思

ひ屈じてはゐられなかつた。イヤだとか、つまらないとか言つてゐては、自分が減ひて行くより他仕方がなかつた。あれかこれかと思ひ迷つた境からかの女は一步先に踏み出して行かなければならなかつた。両親も、妹も、弟も、旅にゐる男も、自分で何うかして行きさへすれば、何の文句も起らず、見苦しい親子の口争ひも起らないのであつた。娘は何うしても一月か二月の中に、あの若いおとなしい公達をつかまへなければならぬと思つた。娘は自分の肌や、眉や、髪や、姿や、さういふものがまだあらゆる異性に對して強い魅力を持つてゐるといふことを信ずる時のみ新しい希望の波の溢れて漲り渡つて來るのを覺えた。かの女は其處に新しいポイントを發見した。そしてそれを確實につかむことを心がけた。

## 歸 京

これから先きは路は壞れてゐて、何うしても行かれないといふ。爲方がないので、小葛は車を下りて、路傍の小さな汚ない茶店に腰をかけて休んだ。小葛はほと／＼困却して了つた。いつそ引返さうかしらとも思へば、男の留めるのを無理に振り切るやうにして、今朝ひとりで發つて來た自分の無謀も後悔された。しかし、何うしても歸らなければならぬと小葛は思つた。一週間の豫定で、ある人に伴はれて、この山の中の湯治場に來たが、雨と洪水とで一週間が十日になり、十日が十二日になつてもその山の中から出ることが出来なかつた。東京には種々な人達がかの女を待つてゐた。ある貴公子もあれば、ある實業家の若旦那もあつた。中でも内所で逢つてゐたある若い男のことは、朝夕小葛の頭を離れなかつた。赤く濁つた熱い湯、ブンと玉子の腐つたやうな厭な匂ひ、赤くなつた手拭を下けて、室に戻つて來ると、中年を過ぎた半白の反齒の男は、自分の持物だと言はぬばかりの顔をして、いつも厭な笑顔をを見せてかの女を迎へた。それも天氣でもあればまだ慰めることも出来るのに、來て三日目から降り出し

た雨は、深く樓上樓下を包んで、雲と霧とが常に流るゝやうに室の中まで入つて来た。小蔦は何故物好きにもこんなところへ伴れて来て貰つたかと何遍後悔したか知れなかつた。

『また、今日も雨ねえ、くさくさするわねえ。』小蔦は欄干のところに行つて立つて、晴れようともしない深い灰色の雲霧の往つたり来たりするのを眺めた。

續いて洪水の報が到る處から聞えた。自分等の通つて来た道は、三ヶ所も鐵橋が落ちて、とても十日や十五日では開通する見込がないといふ噂が聞えた時には、小蔦はがっかりして了つた。小蔦はさも絶望した人のやうに深いく溜息を吐いた。湯に入りに行く氣にもなれなかつた。その傍では、男は、却つて暢氣さうに、『でも仕方がないさ。』緩くり遊んで行くさといふ調子で、ひとり朝から酒などを飲んでゐた。

昨夜湯の中で、山越えをしてI村の方へ出て、M市から別な線の汽車で行けば、東京に歸れないことはないといふことを聞いた時には、小蔦は雀躍した。小蔦は今朝男と殆ど喧嘩せぬばかりにして、無理やりに其處から發つて来たことを頭に繰返した。よう御座んすよ、もう貴方のお世話になんかならなくつても。』こんなことまでも小蔦は言つて發つて来た。

『何うしたら好いだらう。』

小蔦は茶屋の店に腰を掛けながら思案に餘つて溜息をついた。

暴風雨の後の空は美しく碧く晴れ渡つてゐた。そしてその空を割つて、見馴れない怖い形をした山が幾つとなく重り合つて聳えてゐた。下には赤ちやけた濁流を漲らした大きな谷が凄じく流れて、瀬の音があたりに響き渡つて聞えた。『いつそ、あとへ戻らうかしら。』かう思つて見たが、小蔦は何うしてもその氣にはなれなかつた。一步でも東京の方へ行きたかつた。朝夕念頭を離れずにある男の顔が、更に一層の鮮かさを持つてかの女に迫つてゐた。それに、今朝發つた湯治場からは、もう七八里も出て來てゐた。

『姐イ、馬がよかんべ。』

茶店の爺は傍に來て言つたが、『乗つたことがねえ？ さうだんべ？ 無かんべな？ こんな綺麗な姐イぢやなア。』

『でも、馬より他なかんべ。』

『でなけりや、あとへ引かへすか……』

こんなことを其處等にある山の人達は繰返した。其處まで車に乗せて來た男は、『大丈夫ですから馬でいらつしやい。こゝからKまで三里ありますが、まだ日が高いから、そこまでは何んなにのつくり行つても樂に行けますから、そこで一晩泊つて、明日SからM市の方へ行けば、其處はもう好い道だアで、……なアに、馬だつて、鞍さへ置いてありや、危ねえことなんかありやしねえから。』かう言つて深切に小

馬に勧めた。

小葛はあらくれ男が傍でする／＼心太を噉つてゐるのなどを見た。誰も彼も小葛の方を見ては、いろいろなことを言つて評判してゐた。しかしそれが何を言つてゐるのか小葛にはよくわからなかつた。繩を帯にして山刀をさした男は、じろ／＼と絶えず此方を見た。

小葛は殆ど思案に餘つた。芝居などで見た光景があり／＼と小葛の眼を掠めて行つたりした。わる者に誘拐されて行く若い女——自分は何だかその若い女のやうに思はれた。と、恐怖の念が凄じく小葛の心を襲つて來た。いつそあとへ戻らうか……

『さうするか、姐さん。』

『さうする方が好かんべ。』

山の人達は口々に言つた。

茶店の主婦は、『なアに、大丈夫でがんすよ。心配なんかねえよ。この先が、ちつとんべいわりいだけなんだから。』

『大丈夫かねえ。』

『大丈夫でがんすとも……』

で、小葛は漸く決心して、馬を頼んで貰ふことにした。客と湯治に來る話をした時、東京の男は、『行

きたくなけりや、断れば好いぢやないか、』と言つて違つて留めた。それを根に持つてか、山の中以來て此方から手紙を二度出しても、一度も男は返事を呉れなかつた。男は怒つてゐるかも知れなかつた。

午後三時すぎの日影は、半ば茶店の中までさし込んで來てゐた。小葛の腰をかけたところの向うには、山から引いた竹の樋があつて、其處から綺麗な水がちよろ／＼と桶の中に流れ落ちてゐた。樹の葉と樹の葉との間には、日影がチラ／＼と明るく動いた。小葛は上布の單衣に、黒縹子と緋の腹合せの帯をしめて、指にダイヤを二つはめてゐるが、ふと氣がついたといふやうに、ソツとそれを指から外して、金の指環一つだけにして、信玄袋の中の化粧箱の中にソツと藏つた。

『大丈夫かねえ、おかみさん。』

茶をさして來た主婦を唯一の力のやうにして訊ねると、

『大丈夫でがすとも……それに、Kまで三里だアで、一つ走りだ。』

『馬子さんは？ 大丈夫ですかねえ？』

『大丈夫だとも……心配しねえでも。堅い男だ。』

暫くしてゐる中に、其處に馬がやつて來て高く嘶いた。小葛は膚色の汚い一疋の瘠馬が塵埃に白く塗れたたるんだ腹掛をしてゐるのを見た。古びた鞍の上には汚れた袋見たいなものが二つ載せられてあつた。それを曳いて來た男は、じろ／＼此方の方を見てゐるが、挨拶にも來ずに、すぐ大勢男のゐる方へ

と行つた。何か笑ふ聲がした。

『一生のかはうぢや。』

『只でも好いやな。』

『貴様、駄賃、みんな此方へよこせ。』

などといふ聲がつゞいてした。

『ぢや、参りやすべ。』

かう言はれて、小蔦は茶代と勘定とを多分に置いて、Kまでの賃金を堅くきめて、荷物をその男に渡して、其處に出かけて行つて見たが、何うして馬に乗つて好いかわからないので、唯まご／＼してゐた。馬子は信玄袋を鞍の後のところにつけてゐた。

『姐イ乗せてやれや。』かういふ聲が何處かでしたと思ふと、やがてあらくれ男が二三人出て来て、小蔦は忽ち荷物のやうに、横にかき抱かれて、時の間に鞍の上へと乗せられて了つた。小蔦の顔は眞赤になつてゐた。

『此處へしつかりとつかまつてゐれや、大丈夫だ。』

此處の亭主らしい色の黒い男は、こんなことを言つて鞍の前の處をしつかり女の手に握らせた。

『ぢや、行くべ。』

『しつかりやれやア。』

『御機嫌よう。』

あとののは、其處まで乗せて来た車夫が言つた。

馬は靜かに歩き出した。鈴の音がチャラ／＼と鳴つた。山には白い雲がかゝつて、潮が凄じい音を流れた。

『好い姐さ乗せたナア。何處へ行くだア。Kへか。フム。』

到るところでかういふ聲を馬子はかけられた。馬子はトボ／＼と歩いた。路は広いところを通つたり、藪の傍を通つたり、橋の上を渡つて行つたりしてゐた。近所に見たことのない色の白い華奢なすらツとした小蔦の姿は、くつきりと午後の明るい日影の中に繪のやうに見えてゐた。

すれ違つた村の娘は、世にもめづらしい綺麗な人を見たと言はぬばかりに、何邊も振返つては見て行つた。

斜にさし添ふ夕日が暑いので、小蔦は何うかして蝙蝠傘をささうと思つたけれど、鞍につかまつた右の手を離すことが出来ないで、幾度か企て、そして幾度かよした。さぞ、色が黒くなるだらう。かう思つて見ても何うすることも出来なかつた。小蔦は唯一生懸命に鞍にかじりつくやうにしてゐた。

『ドウ、ドウ。』

などと馬子はをり／＼聲をかけた。

谷の縁を通る時には、小葛は殆ど生きた空がないやうな気がした。下には深い／＼谷川が凄じい瀬を立て、流れてゐた。一步躓けば、馬も人も毬のやうに其處に墜ちて了ふに相違なかつた。墜ちれば、もうお了ひだ。かう思ふと、いつそ馬から下りて歩かうかしらなどと小葛は思つた。

一つの崖を廻ると、一つの谷が現はれて來るといふやうなところを通つて行つてゐた。怖しい山がそれからそれへと續いて、何處まで行つたか、この山が出られるのだらうと思ふと、小葛は堪らなく心細くなつた。その間にも、山の中に振放つて置いて來た客の顔が見えたり、東京で怒つてゐる男の顔が見えたり、貴公子の顔が眼の前にちらついて見えたりした。明るい東京の夜の灯の中の賑かな街に一刻も早く行き着いて、今の難儀を早く話の種にしたいと思つたり、明日M市に行つても、汽車が旨く連絡するか何うかと思つて心配したりした。崖の路の崩れたところに來た時に馬子は言つた。

『姐さ、危ぶねえだで、ちよつくりのそこ、歩いてくれさい。』

『下りるのかえ？』

『はア。』

小葛は再びあらくれ男の腕に抱へられて、馬から下りなければならなかつた。『おう、あぶない！』馬

子の肩に凭りかゝる時、小葛は思はず言つた。

路を破壊した洪水のさまがやがて小葛の前にあつた。瀬が幾筋となく路を貫いて流れてゐて、其間を粗朶を編んだ橋が無數に架けられてあつた。ある橋は水が一寸ほどその上を越して流れてゐた。ある橋を渡る時には、小葛は危く駒下駄を迅い流れに取られやうとした。

じろ／＼と絶えず此方を見る馬子の眼を小葛はいつも避けるやうにした。ところ／＼にちらほらと散らばつて見えてゐる人家、をり／＼出會す山の人達、後には小葛にはさういふものが唯一の力のやうに思はれるほど心細くなつて來てゐた。夕暮近い影の多い山の空氣も女の胸に染み通るやうに思はれた。カナ／＼蟬がところ／＼で鳴いた。

『まだ遠いの？』

かういふ質問を小葛は既に前から何遍も馬子にした。しかし一度も満足した答を得ることが出来なかつた。馬子は唯、小葛の顔ばかり見た。

馬上の小葛は種々な想像やら空想やらで夥しく心をさいなまれてゐた。考へると自分は何處へ伴れて行かれるのかわからなかつた。其時は……其時は……。小葛の蒼白い顔は、夕暮の影の濃い山の空氣の中にくつきりと浮き出して見えた。

高い山の陰に日が落ちてから、あたりは急に薄暗くなつて行つた。静かな山の中には水の凄じく流れ



る音ばかりがきこえた。ある家の傍を通る時には、夕顔の棚の下に、据風呂が置いてあつて、裸形の女が腰巻一つで此方を見てゐるのを見た。夕炊の煙が低く裏の山畑を這つて靡いて行つてゐた。

山と山との谷合に、低く高く十五六戸の人家の屋根が見えて、灯が明るく處々に見え出した時には、小葛はホツと溜息をついた。それは今夜泊つて行かなければならないK温泉であつた。やがてそこにある或る大きな旅館の番頭は、馬の上に努れ果てた色のくつきりと白い綺麗な女を迎へた。

『お一人さまで、へい。お一人さまで。』

かうした女性の一人旅を不思議にするやうな調子で番頭は言つた。小葛は途中不安であつたにも拘らず、座敷に上る前に、その馬子に種々とやさしい言葉をかけてやつた。帯の間から財布を出して、賃金をやる次手に五十錢銀貨を一枚やると、馬子は丁寧と禮を言つて、馬を牽いてトボ／＼と薄暮の中に姿を隠した。小葛の案内された室は、終日添つて来た川に臨んで、水の瀬の音が屋を撼かすやうにきこえた。

小葛は静かなさびしい一夜を其處に過した。山の中に置いて来た客のことと、東京にゐる男のこととを思ひながら……。宿の番頭の話によると、此處からM市までは十二三里あるが、もう今日通つたやうなひどいところはないといふことであつた。『え、え、もう馬に乗るやうなところは御座いませんとも……』かう言つて詳しく行先の話をして呉れた。

振放つて来た情と、離れかけてゐる情との間に小葛は身を置いてゐた。離れかけた情を追はうとする心と振放つた情を顧みる心とは、深く絡み着いて容易にその念頭を離れなかつた。自分の氣強さが一方で後悔されると共に、一方では行くところまで行かなければ止まないといふ心が熾に燃えてゐるのを小葛は見た。田舎の温泉場は夜は賑やかで、細い暗い通りを浴客はぞろ／＼と通つて、大湯の方へと出かけて行つた。小葛は其處でも到る處の眼が皆な自分に向つて注がれてゐるのを發見した。内湯の入口で着物を着てゐると、其處に滞在してゐる田舎客は、彼方此方から指さすやうにして此方を覗いた。長い廊下では、人達は皆な眼を睜るやうにして長く小葛の後姿を見送つた。

『東京の藝者だんべ。』さういふ言葉がふと耳に入つたので、小葛はそれとなく覗いて見ると、そこは勝手に、大勢の男や女がごた／＼と膳や椀を其處に並べて躡躑んでゐた。『ムムKから、よく一人で下りて来たものだな。あんな綺麗な衆が山の中を通つて来ちや、ひよんな眼に逢はねえとも限らねえが……』東京の衆は大膽だなし——』などといふ聲が続いて聞えた。

静かな一夜ではあつたけれど、旅馴れない小葛に取つては、種々なことが氣に懸つて爲方がなかつた。隣にゐた紳士風の男は、番頭と小葛との會話を聞いてゐたと見えて、さつき廊下で逢つた時に、向うから丁寧に挨拶して、『M市へお出ですか。私も明日は行くんですが、』などと馴々しく話しかけた。

『え、さうですな、その處はわかりませんが、明日までには、何方か通るでせう、』などと言つて深

切さうに身を近く寄せて来た。

（本當に、さつきの馬子に、そんな心があつたら、それこそ何んな眼に逢つたかわからない。人一人居ない山の中だし、聲を立てたつて誰も聞いてゐるものはないし——）かう思ふと、さつき勝手に嘯してゐたやうに、自分ながら大膽な冒険をしたものだと思はずにはゐられなかつた。馬に乗せられる時にかき抱かれた大きな黒い岩乗な皺の多い腕などを小葛は思ひ浮べた。化粧箱の中に入れて置いたダイヤの指環を、小葛はあらためて財布の中に藏つて、そしてそれを敷布團の下に置いた。金簪は抜いて、信玄袋の着替の中の中にわからぬやうに深く隠した。

ダイヤを盗まれたと思つて。目をさまして、敷布團の下に財布のあるのを確めて、またうとくする。と、今度は怒つた客の顔がありくと見えて、それがいつか馬子の顔に變つてゐる。と、行燈が薄くほんやりとついてゐて、隣で何か物に驚される氣勢がする。谷の瀬の音が雨か何ぞのやうに聞える。雨滴の桶をつたふやうな小さな瀬の音もそれに雜つてきこえてゐる。誰か自分の傍に一緒に寝てゐると思つて、ふと目をさますと、自分はひとりさびしさうにひろい一間に寝てゐるのであつた。

やがて明らかな朝が来た。昨日は日が暮れてから着いたので、よくわからなかつたけれど、今朝見ると、そこはこんな深い山の中にあるかと思はれるやうな狭い谷の間に挟つて村が出来てゐて、谷川は村を右から左へと取巻いて烈しい瀬をつくつて流れて行つてゐた。窓の前には尖つた恐ろしいやう

な形をした岩山が屹として聳えてゐた。

大湯の前には、髪をぐるぐる巻にし、田舎の唄だの、柄杓を持った婆さんだの、白縮緬のへこ帯に銀ぐさりを絡ませて得々としてゐる田舎息子だのがぞろぞろと歩いてゐた。その前の廣場に晴れやかに朝日がさす頃になつて、昨夜頼んで置いた車が来た。

「N町から先は馬車がありますから。」

かう番頭は教へて呉れた。

つとめて素人づくりにしたつもりだが、それでも艶な小葛の車上の姿は、到る處の人の眼を惹いた。誰も彼も言ひ合せたやうに振返つて見て行かないものはなかつた。温泉場を出外れるところでは、前の綺麗な流れて膳や椀鍋を洗つてゐた丸髻の赤い手絡の細君が、ちつとその後姿の見えなくなるまで見送つてゐた。

種々な人達や種々なシインが小葛の眼を走馬燈のやうに掠めて行つた。ある農家の軒からは、七歳位の裸の女の兒をつれた娘が出て来た。ある家からは鋤をかついだ肥つた百姓が出て来た。ある家の縁側には、一生東京も知らずに暮したらしい婆さんがせつせと古風な縁車を廻してゐた。ある路傍には、竹藪があつて、その中で大きな水車が凄じい勢ひで廻つてゐた。重なり合つた山は次第にひらけて谷も段々ひろく／＼なつて行くのを小葛は見た。

N町に一里といふところで、車夫は急に脚氣が出て思ふやうに走れないと言ひ出した。さう言つて車上の小蔦を振返つて見た車夫の眼はわるく光つてゐた。其處等あたりに、車のないのを豫め知つてゐて、そして女と見て難題を吹きかけたのであつた。車夫は定額の外に猶五十錢の増賃を要求した。小蔦は二言三言争つて見たが、効がなかつた。小蔦が承知しない間は、車夫はわざとぐづぐづと足を引きするやうにして、梶棒を高く上げて車を曳いた。街道の白い埃はともすると仰向にならうとする小蔦の髪や顔に舞ひ上つた。

「なら、上げますよ。」

小蔦の聲は肝立つて聞えた。

N町に行つた頃は、もう十時を過ぎてゐた。町の外れにある馬車は、客がもう一杯で、今しも其處を發たうとしてゐるところであつた。小蔦は其處にゐる總べての人の視線がわるく自分に集るのを見た。

「もう、乗れませんか——午後まで待つた、」などとする男は言つた。

しかし此馬車で行かなければ、M市の午後の汽車に間に合はず、それに間に合はなければ、もう一夜何處かで泊らなければならぬので、小蔦は無理に頼んでその馬車に乗せて貰ふことにした。「別嬪ぢやで詰めてやれや、」などとある鬚の生えた男は笑ひながら言つた。

その男と年老つた婆さんとの間に身動きも出来ないやうに押詰められた小蔦は、ハンケチを袂から出

して襟から顔のあたりを拭いた。好い香水の包ひが四邊に漲りわたつた。

「好い匂だ……」

こんなことを誰か言ふと、

「何うしても別嬪なア、違ふわ。」あたりも憚らずに誰か言つて笑つた。

しかし小蔦はそんなことに頓着してはゐなかつた。今朝、温泉場を出てから、心は全く東京の男の方にのみ向つて靡いて行つてゐた。何んな艱難な旅行を敢てしても、今日は是非とも東京に歸らなければならぬと思つてゐた。小蔦は、懐から小さな鏡を出して、遠慮なしに馬車に乗る時に亂した鬢と髪とを丁寧に梳いた。

「姐さん、何處から？」

鬚の男が無遠慮に訊いた。

小蔦は餘程返事を爲まいと思つた。しかしさうしても居られなかつた。

「Kから。」

「今日？」

「いゝえ、昨日。」

「よんべ、Kとまりか、はア。」考へて、「一人で來さしやつたか。えらいこんぢやつたな。よくえらい

目に逢はんぢやつた。K峠あたりはわるい場所だがなア。」

「ほんまにさ——あそこはえらいところぢや。」もう一人の方はそれにつれて、ある年ある女がそこで旅客に弄ばれた話などをした。

汗臭い匂ひを載せて、馬車は白い埃の立つ暑い田舎道をガタ／＼と進んで行つた。涼しい山の嵐氣は此處あたりまではもうやつて來なかつた。日に面した方に張つた白い幔幕はをり／＼風に翻るが、しかもそれは僅かで、時によると、そこから暑い／＼日影がさし込んで來た。矢張、川に路は添つてゐるけれど、その川は緩かに靜かに流れて、何處にももう涼しい樹の蔭などもなかつた。日〇キラ／＼照つた長い赤膚の崖などに沿つて馬車は駛つて行つた。

堪らなく臭い女の髪匂ひが、乗つた時から小蔦の鼻について爲方がなかつたが、それはぢき自分の前に乗つてゐる娘の髪であるといふことが、やがて知れた。娘は眼の縁の赤く爛れた、色の黒い、凸額の、二目とは見られない顔であつた。小蔦は成だけその顔を見ないやうにして、ハンケチで鼻を押へた。しかし、相對して腰をかけてゐては、その顔を見、その臭を嗅がないといふわけに何うしても行かなかつた。これも皆な誰の爲め？　こんな難儀な旅をして、山の中から命がけて出て來たのも誰の爲め？　恐ろしい思ひをしたり、暑い思ひをしたり、さびしい思ひをしたりしてやつて來たのも誰の爲め？　車中の人達は暑い日に辟易して、中には細い柱に身を凭らせて、汗を額に、駢を立て、いぎたなく眠

つてゐるものなどもあつた。ある女は居眠りをして、前に路りかけてはまた起き返つた。

やがてけた／＼ましく鳴りひびいた喇叭の響は、馬車のS町近くやつて來てゐることを人々に知らせた。

S町の電車停留場の前では、小蔦は始めて生返つたやうな心持になつて、涼しい葡萄棚の下の一間で遅い午飯を食つた。此處に來ると、洪水の被害の話が其處でも此處でも話されてゐた。T川はところ／＼で堤防を破つて、M市の下流三里のところなどは、殊にその慘狀が甚しいといふことであつた。東京の被害もかなりに大きいらしく、山の中で新聞で見た以上に、汽車のとまつてゐるところは多いらしかつた。東京のS川の氾濫なども此近所まで語り傳へられてゐた。

「M市からR線で、東京に歸れるでせうか。」

小蔦は逢ふ人々にかう言つて訊いて見た。しかし誰もその實況を知つてゐるものはなかつた。I温泉場から下りて來た老夫婦連は、

「私達も、その汽車で行かうと思ふんですけども、何うですかわからないで困つてゐるんです。S町まで行けばわかるつて言つて下りて來ただけども……。しかし社で聞いて貰つてゐますから、やがてわかるでせう。」などと言つた。小蔦は頼んでM市まで道伴になつて貰ふことにした。Kから！　まア、ひとりでよく下りてお出なすつた。」老いた品の好いお婆さんは、かう言つて深切に何彼と話した。

I 温泉から東京へ歸る客で、電車はかなり一杯になつてゐた。それでも午前の乗合馬車に比べたらどれほど好いか知れないと小葛は思った。電車は滑らかに、山裾の平野を通つて、濁流の漲つたT川をわたつて、次第にM市へと近づいて行つた。

電車の窓からは、重なり合つた山又山が濶々と指さして見られた。山から渦巻き上る白い雲は、簇々と碧い空に漲りわたつて、その山又山の奥には、青い高い山が微かに覗いて見られた。

「Kは何方になりませう？」

かう小葛は隣の男に訊いた。

「さうですな、此處からは見えませんが、あの雲のある山の奥あたりになるでせう。」

「難有う。」

かう言つた小葛は、もう一度ちつとその山の方を見た。其處にひとり残されてさびしく酒を飲んでゐる男のことが再び小葛の頭の上つて來た。ちつと見てみると、その奥の山には、雲が深くかゝつて、僅かに見えてゐた一角も、やがてすっかり見えなくなつて了つた。『好いわ。今度逢つたら、詫びれば好いわ。』かう思つたあとは、心はすっかり東京の方に向いて、あたりで話してゐる汽車の連絡の話の方に氣を取られて了つた。

M市に着いたのは、午後五時すぎであつた。しかしその大きな停車場には何んなに大勢の旅客が集

つて來てゐたであらうか。二等、三等の待合室で足らず、場外までにも一杯に乗客が充滿してゐた。誰も彼も皆なR線を利用して一刻も早く東京に行かうといふ人達であつた。小葛は其處にも思ひがけない艱難の横はつてゐるのを見た。

老いた夫婦連は、『これではとても乗れませんから、一晚泊つて、明日にしませう、』などと言つて構外へと出て行つて了つた。

小葛はひとりさびしく二等待合の隅の方に腰をかけてゐた。汽車は兎に角、六時に出る。しかしこの汽車がO驛まで行つて、その先の線が連絡するか何うかそれはわからない。工事中だし、それに東北から來る唯一の幹線だから、大抵は大丈夫だが保證することは出来ないといふことであつた。小葛は何うしようかと思つたが、一日後れ、ば、水が増して、また何うなるかわからないと言ふので、兎に角行くことにきめて、切符を賣る時間を待つてゐた。

と、傍にゐた角帯を緊めた三十一二の商人風の男が、

『何方までお出ですか？』

と訊いた。その譯を話すと、『さうですか、それぢや、私と一緒に入らつしやい。私も東京に行くんですから……。しかしR線よりも、これからI驛まで行つて、T線に乗る方が距離も近いし、金も安いし、便利ですから、さうなさい。その方が好い、』と深切に教へて呉れた。一人で途方に暮れてゐた小葛には、渡

りに舟で、喜んで、一緒に伴れて行つて貰ふことを頼んだ『え、え、今日つきますとも。A驛までは何うかも知れませんが、K驛までは無論行きます、そこから電車がありますから、遅くも十一時までには歸れますとも!』などと其男は言つた。

小葛はその深切とその人柄なのに引かされて、ついKの山の中から一人旅をして来た話などをしてつた。『それは大變でした。旦那さんは?』などと男は軽く慰めるやうに言つた。切符はその男が一緒にK驛まで買つて来て呉れた。

好いと言ふのを、男は小葛の信玄袋を持つて呉れて、とても女一人では何うすることの出来ないやうな雑沓を、『私の後に跟いていらつしやい、』と言ひ、先に立つて押しわけて行つた。改札所を通る時は、眞剣になつて、小葛の爲めに路を開いて呉れるやうにした。

『早くいらつしやい。早くいらつしやい。』改札所から辛うじて出ると、男は小葛を引張るやうにして先へくと驅けて行つた。で、二人は辛うじて腰を掛けるやうな位置を得た。

『何うも難有う御座いました。』

小葛はかう幾重にも禮を言つた。

小葛の見たところでは、男は桐生足利の間を往來してゐる機業仲買の番頭らしかつた。少し急な商用があつて是非今夜東京まで行かなければならないと言つてゐた。何處となく打解けた氣安い人で、小葛

が藝者であるといふことなどは、一目見た時から逸早く飲込んでゐるといふ風であつた。桐生の織物の話や、足利の名所の話などが絶えずその男の口から出た。

しかしその氣安いと思つた心は次第に油断が出来ないといふ風に變つて行つてゐた。小葛は其處にも女の一人旅の恐怖と心配とが常に身の邊に附纏つてゐるのを思はない譯には行かなかつた。それに、男の餘り深切過ぎるのも、後には小葛に疑惑の念を起させた。

『新橋は、何方です?』

などと後には男は遠慮なく訊いた。

行く／＼男が厭に道伴らしい風を見せるのも段々小葛の氣に懸つた。それに二人で話してゐるのを、じろ／＼と車中の人に見られるのも厭であつた。で、小葛は、男の馴れ／＼しい口を利くのは反對に、わざと他人らしい敬語澤山の言葉を遣つて見せた。ある驛で買つて呉れたミルクキャラメルにも女は手を觸れなかつた。

小葛は段々心配になり出して来た。I驛から別の汽車に乗替へる時には、果してそつちについて行つて好いのか。今夜東京に行けるなどと言つて、わるいところに伴れて行つて、騙さうと企んでゐるのではないか。かう思ふと、旅馴れない小葛はそれからそれへと益々心配になり出して来た。いつそその男と別れて、獨りになりたいなどと思つた。しかし、今更折角の深切を無にする譯にも行かな

かつた。それに、切符も買つて了つてゐた。「この線で行つて大丈夫でせうか。」かう小葛はソツと傍の田舎者に訊いてからその汽車を下りた。

I 驛でも、乗客がプラットホームに溢るゝばかりに集つてゐた。それは皆な洪水の爲めに此方へまぎれ込んで来たといふやうな人達であつた。この線でも、汽車が果してK 驛まで行くか何うかはわからなかつた。東京のA 川の氾濫は非常で、K 驛附近は事に由ると、水に浸されてゐるかも知れなかつた。その様子を訊きに行つた男はやがて歸つて来て、「なアに、今はまだ大丈夫ださうです。しかしA 川が一刻毎に増水してゐるさうですから、ことによると、水に浸されるかも知れないつて言つてゐるんです。なアに、大丈夫ですよ。此處まで来ちや、もう行つて見るより他は爲方ありませんよ、」などと言つた。

そこでは、汽車が一時間もおくれで發車した。出た時には、時計はもう八時半のところを指してゐた。東京のK 驛まで首尾よく入つて行き得るとしても、それから先のことを考へると、小葛は不安の念に襲はれずには居られなかつた。それに、前の汽車もさうであつたが、この汽車は一層乗客が一杯で、二等室でも殆ど身動きも出来ない位にぎつしりと詰め込まれた。小葛の信玄袋の上には、斷つても斷つても田舎の一紺士らしい男が腰を掛けるやうにした。

眞暗な闇の中を汽車は轟々として進んで行つた。小葛は昨日からの旅行に全く疲れ果て、窓に凭りかゝつて唯昏昏としてゐた。暗いランプの石油は小葛の頭の上にゆらくと揺いて見られた。

停車場の他には、灯といふ灯も見えなかつた。一驛毎に次第に殖えて来る乗客は、車の扉をあけると、いつも潮のやうに參進して入つて来た。もう入れない入れないと叫んでも、あとからあとへと押寄せて来た。ある驛で窓から外に顔を出してゐた男は、「えらい騒ぎだ。百人位、あとに残された、」などと小葛に話した。

小葛は窓に身を凭せて、群集の中に埋められるやうにして、蒼白い彫塑のやうな顔をはつきりと薄暗いランプの光線の中に見せてゐた。

「まだ餘程ありませんか。」

「さう。あと五つ六つです。此處はW 驛だから。」かう男は教へた。

あと二つしかないといふ驛に來た時には、汽車は長い間停車した。前から案じられた水は何うやら其の近所まで來てゐるらしかつた。驛夫や車掌がプラットホームを往つたり來たりした。扉をあけて様子を聞きに外に出て行く人などもあつた。一方の窓から外をのぞいて見た小葛は、一面の水の上に星の影がキラ／＼と映つてゐるのを見た。

「ヤア、ヤア、駄目だ、駄目だ。」かう言つて誰かゝ入つて來た。乗客は皆な其方の方を見た。

「何うしたんです？」

「すつかり水になつたさうですよ。とてもK 驛までは入つて行かれないさうです。何でもA 川の大橋

が、落ちたとか落ちるとかいふ騒ぎです。そこいら、もう一面に水ですよ。』かう入つて来た旅客は言つた。

『ヤア、大變だ。』

『それは大變だ。』困つたなア。』などといふ聲が彼方此方から起つた。

其處に車掌はやつて来た。『お氣の毒ですけれども、汽車はもうこゝから先へは危険で行かれませんか、止むなく停車致します。……明日になれば、大抵通ずると思ひますけれど、それもはつきりとは申し上げられません。』かう言つて、一つ一つ客車の中を覗いて觸れ廻つて行つた。

『まア、大變だわ。』

かう言つて、小葛は唯まご／＼してゐた。男は『爲方がありません。ぐづ／＼してゐて、泊るところがなくなつては、それこそ猶大變です。さうときまつたら、一刻も早く出て泊るところをさがさなくちや——』かう言つて、先に立つて小葛の信玄袋を持つてやつた。

小葛は何うすることも出来なかつた。今になつて、自分一人男に別れて、別な旅籠屋をさがすといふ譯にも行かなかつた。小葛は男のあとに跟いて、群集の中を押分けるやうにして停車場を出た。

此處から東京に三里といふだけで、何處の何といふ町だかをも知らない小葛は、唯、騒々しく町の兩側に高張などの明るく闇を割つて點いてゐるのを見た。町にも既にいくらか水がついてゐるらしく、星の光の映つた片側の水溜りを人達はぢやぶ／＼とこいで行つたりするのが見えた。巡査が提灯を下けて

劍を鳴らして驅けて行くのなど見えた。

あつちを歩き、こつちを歩きして、漸く泊るところを二人の発見したのは、それから二三分してからであつた。しかも、それは旅籠屋ではなく、何でも荒物屋の店か何からしかつた。奥にある二間の一間には既に客が入つてゐた。

『お伴れですか。』かうじろ／＼と二人の様子を見ながら、その家の主婦の訊いたあとについて、『いえ、途中で御一緒になつたんですけど……』かう言つて、小葛はその奥の間に入つて行つた。

『くたびれたでせう。』

『え、／＼もう大變！』小葛はかう言つたが、此處で氣を許してはならないと思つて、帯も解かず、着物も脱がず、縁側のところに立つて、唯、團扇などを使った。蚊は盛んに音を立て、押寄せて来た。

『澤山。』

『少しお附合ひなさいよ。』

『澤山です。』

『ぢや、私だけやるかな。これも爲方がない。かういふ目に逢ふのも運だ、』などと言つて、男は腰巻一つになつて涼んでゐたが、『これは堪らん。ひどい蚊だ。まア、一番先に、蚊帳でも吊つて貰ひませう。』



かう言つて手を叩いて婢を呼んだ。

やがて婢は来て、蚊帳を吊つて行つた。男はビールなどを取寄せて、その中で、頻りにひとり飲んでゐた。『外にちや蚊に食はれるでせう。何うです。蚊帳の中に入つては、』などと男は言つた。小葛は愈々油断が出来ないと思つた。しかし、如何にしても外は蚊がひどかつた。蚊帳を吊つてからは、一層蚊が自分の周圍に集つて来た。爲方がないので、『ちや、御免なさい。』かう言つて小葛は蚊帳の中に入つて行つた。小葛は笑ひもしなかつた。男がひとりビールを飲んでゐるので、小葛はわざと遠慮もせず、煤煙に塗れた亂れた長い黒髪を解いた。そしてそれを櫛で梳き始めた。

## 稲がら

寺の後ろの隅にある二反歩ほどの水田は、今年は借手がなくつて、遅くまで耕しもせず田植もせずにつて置かれたが、他の周圍の田の苗の縁が綺麗に朝風夕風に靡く頃になつて、急に寺の墓掃除の男が他の日雇取の二三人の男と一緒にやつて来て、けんけの咲いた荒れた田を慌たしく掘り返して、用水を引いて来て好加減にほつくと苗を並べて植ゑて行つた。

『方丈さんな、懲べいかわくから、こんなことになるんさ。』

墓掃除の男は、苗の置いてある田の畔のところに躊躇んで、先づ一服といふ形で烟管を口に啣へながらこんなことを言つた。

『作は今年は何んねんか？』

『作りていんだが、去年、小作がをさめてねえからな。』

『ふん、それでか……』

『作の野郎、此處借りて作らねえちや困るんだで、毎日のやうに行つて頼むんだけど、方丈さんな、何うしてもきかねえんだ。あんな奴に貸して置くと、小作が取れねえべいぢやねえ。田がわるくなつて仕方がねえつて言ふんだ。』

『あいつは怠け者だからなア。』

他の一人の日雇取の男は、『それでも、他にいくらも借手があんだんべいがな？』

『方丈さんな、何のかんのとむづかしいことべい言ふんだなア。なアに、借手がねえけりや、俺がつくる。俺が日雇取を入れてつくるつて言つてゐたけが、たうとうさういふことになつちやつたんだがな。』

『田がわりいでな……。日雇取にかけちや損だんべい。』

こんなことを皆なして噂し合つた。『好い方丈さんだが、もう少し慾をかわかねえと猶好いんだが、』などとも言つた。日雇取達は精々と働いた。榛の並木の間から日影が晴れやかにさし込んで來たり、向うの桑畑の深い緑の中に村の娘の赤い袴や白い手拭が透いて見えたりした。時には雨が青い野を斜に掠めて通つて行つた。

半ば植ゑかけた田のほとりに、時々方丈さんの姿が見えた。脊の低い方丈さんは、へこ帯をぐる／＼巻きにして、頭の毛の伸びたのも氣にせず、本堂の傍から暗い墓地の中を通つて、杉や竹藪の茂つた中を此方へと出て來た。その墓地には、この寺の歴代の僧の丸い墓石が澤山に並んで、深く蘚苔に封じ

られてゐた。方丈さんもやがてはその中の一つになる運命を持つてゐるのではあるが、そんなことは一度も念頭に置いたことがないといふ風で、いつもサツサとその暗い濕つた墓地の中を通つて、榛の木の並んだ明るい野の方へと出て行つた。

『何うもうなひ方がぞんざいだな。』時にはかう言つて墓掃除の男に話しかけることもないではないが、大抵は黙つて日雇取達の精々と働いてるのを見てゐた。桑畑を越して向うに、明るい野が見え、青い田が見え、汽車のレールが見え、信號柱が見え、湧くやうに渦巻き上つた初夏の午後の白い雲が見えた。

『すつかり田をわるくされちやつた。丸で肥料なんか使はないんだから。』  
こんなことを方丈さんが言ふと、

『本當でがんとすとも……。手入がわるくつちや、田も臺なした。』  
傍にゐた日雇取が調子を合せた。

方丈さんはいつもそこから野の方へと歩いて行つた。日雇取が見てゐると、桑畑の中の眞直ぐな道をぶらり／＼と靜かに歩いて、近所の畑に出てゐる百姓の上さんと話などをして、それから汽車のレールの踏切のあたりまで行つて、そこで長い間黙つて立つてゐて、そこから靜かに引返して來た。時には汽車が淡しい煤烟をあたり／＼に漲らして、寺の森の裏にある停車場へと入つて行つたりした。

時には色の淺黒い肥つた寺の上さんの姿も其處に見えた。上さんは墓掃除の男を新さん新さんと呼ん

でゐた。「新さん、茶でも飲みなせい。」かう遠くから聲をかけた。「これから日雇取を始終入れて、草を取つたり何かするんぢや大ごつたな。……私もう少し體が丈夫だと好いけれど、とても百姓は出来ないから、」などと云つた。その癖、庫裡の周圍にある畑の前栽物は、皆なこの上さんと新さんとでやるので、里芋でも茄子でも菜でも皆なこの上さんが指揮してつくらせるのであつた。町の人々は暑い日影を饅頭笠に避けて、畑でせつせとさくを切つてゐる上さんの姿をいつも見かけた。「お寺の上さんな、えらい働き者だ。方丈さんが留守でも皆な間に合つて行くんだから。じんやほんの世話でも何でもするんだからな。」かう人々は言つた。

そして暇があると、裏の山に行つて、枯枝や松葉などを拾つて、それを庫裡の廣い臺所に持つて來ては積んで置いた。主僧との仲も至極圓滿で、「おきよや、おきよや」などとやさしく主僧は呼んだ。一人ある娘が今年十三になつて、小學校を卒業して、遠い町の女學校に行つてからは、その交情は一層濃かになつて行くやうに見えた。

それでも主僧が東京で豫定以上に遊んで來たり、近在へ行つて泊つて來たりするやうな時には、上さんの顔にはきまつてむつとした表情が現はれた。「もう、働くのは御免だ。働くのは、縁の下の力持ちだ。厭なこつた。此方ばかりせつせと東京も見ねえで働いてゐたつて爲方がねえ、」などと言つた。しかしそれもその時ばかりで、あくる朝は、上さんは矢張早く起きて、元氣の好い顔色をして、庫裡の戸を

明けて、竈の下の火をたきつけた。

寺の後ろの水田の苗は、日増に大きくなつて行つてゐた。水に不自由のないこのあたりでは、何處の田にも苗の根元まで十分に水が來てゐた。朝風に夕風に苗は靜かに靡いて、蜻蛉などがその葉末にとまつてゐたりした。田の畔に近寄ると、蛙は音を立て、水の中に飛込んで行つた。

靜かな白い雲が映つたり、田の畔を劃つた榛の並木の影が映つてゐたり、杉森の黒い影が田の一ところを薄暗く見せたりした。桑畑で桑を摘んでゐた娘達は、俄に降り出して來た雨に慌て、その田の畔を抜けて、寺の森の中に入つて行つたことなどもあつた。夕日は明るくその水田の一面を照した。

この田のところの向うには、一軒藁葺の百姓家があつて、そこからは、向うの別な田に働きに行く百姓夫婦の姿がいつも見られた。噂は鎌や水を入れた土瓶などを持つて、七歳位になる女の兒を伴れて、その畑の傍の榛の並木の蔭を通つて、朝露の深い路のレールを越して向うに行つた。その百姓家の向うには停車場に近い倉庫の白い壁だの、運漕店のこぢんまりした勝手元だの、助役の住宅の草花の庭などが見えてゐた。貨車から豆糟の丸い肥料を運ぶ人足の懸聲が終日そのあたりにきこえて來てゐた。

時々見廻りに來た主僧は、歸つてから上さんに言つた。

「何うもいかな。」

「皆く行きませんか。」

「すつかり田をわるくしちやつてるからな、肥料を入れても無駄なやうな気がする。」

「だつて、肥料を入れずにもおかれますまい。……だから、銚公に貸せや好かつたんだ。」

「うん。」主僧はこんなことを言つてゐたが、少し考へて、「仕方がねえ。今年はまだ、損をしても、肥料を入れてつくつて見るさ。あれでも、ちつとは穫れるだんべ。」

「正公の田はよく出来てるねえ。矢張かせぎ者は違ふだ。」

その田と相接してゐる田の苗の發育の好いのを思ひ出して、上さんは言つた。

「本當だ。正公の田は好い。矢張、かせぎ者でなくちや駄目だよ。忘れ者に貸しちや往生だ。」

「作の野郎のは、ひどいんだから。あいつに作らせるよりは、それでもまだ此方でやる方がましかもしんね。」上さんはこんなことを言つて、勝手の方へと下りて行つた。

ある日、主僧は言つた。

「何處の女だんべ。あそこいらにまご／＼してゐるのは？」

「今日もゐるかえ？」

上さんは天ひながら言つた。

「いつでもゐるんかえ？」

「色の白い、少し肥つた、脊の低い女だんべ？ 男は？」

「男はゐなかつたがね。男もゐることがあるんかえ？」

「此間はゐたつけ……。あの倉庫の壁んとこにくつつくやうにして、こそ／＼話をしてゐたつけ……」

「何處の女だらう？」

「川島の酌婦だよ。此間、来たばかりなんだつて？」

「ふん、あれがね……」

これでその時の話はお了ひになつたが、主僧はその後も度々其女の倉庫の白い壁のところ立つてるのを見かけた。女は銀杏返しに結つて、セルの單衣に縮緬と繻子の腹合せの帯をしめてゐた。ある時には、女はゐなくつて、田舎の息子らしい髪を分けた二十三四の男が其處等をぶら／＼歩いてゐた。

ある日の午後、主僧は一番草を取つたあとの様子を見ようと思つて、暗い杉森をぬけて、明るい野の方へと出て来たが、ふと、いつもの倉庫の白壁の陰にその男と女とが相對して、熱心に何か話してゐるのを主僧はちらと見かけた。榛の並木の蔭になつてゐるので、此方の此處に立つてゐるのは向うからは見えないが、向うの壁にくつつくやうにして話してゐるさまは、此方からは手に取るやうに見えた。女は後姿を見せて男の手を執つてゐた。男の顔は際立つて白く見えた。

主僧は長く見てゐるのに忍びないと言ふやうに、寧ろさういふシーンを攪き亂すに忍びないといふや

うに此方から身を隠すやうにして、田に添つた榛の並木を別な方へと静かに出て来た。半ば老いて髪もや、白くなつた主僧の頭脳には、此時何年にも思ひ出したことのない遠い昔が、美しい繪でもあるやうに静かに浮び出して來てゐた。青春の歡樂、血の燃えるやうな烈しい戀こゝろ、美しい房々した娘の髪、何も彼も忘れて互に寄添つて行つたやうな温い肌、あ、あれも死んだんだ。もうこの世の中にはいないんだ。『かう思ふと、不思議な人間と人生とが今更のやうに主僧の心に繰返されて來るのであつた。』

先住が勸請した不動堂、その門前の兩側に並んだ茶屋、湯屋、あの時分は賑やかであつた。先住は町に法事などに行くには、いつも駕籠に乗つて二人も三人もつれて出かけた。金襴の袈裟は美しく日光に光つて見えた。維新の瓦解の後に漲るやうに押寄せて來た廢類した氣分、絶対に表面にはすることの出來なかつた大黒を——ある時はその爲めに危く牢に入れられようとした女を、先住は其時分はもう幅で寺に連れて來て一緒に住んでゐた。主僧は十七八の可愛い若僧姿をしてゐる自分の姿を其處に見た。茶屋の女や湯屋の娘達に大騒ぎをされてゐる自分を見た。夕暮にそつと寄つて來て自分に抱きついたのは自分よりも五つも六つも年上の色の白い女であつた。ある娘は、自分が庫裡の玄關の脇の三疊で佛書を読んでゐるといつもそこに來て、障子をそつとつばで濡して穴をあけて、そこから眞珠のやうな涙を流した眼を見せた。

しかし、さうした多い情よりも一層深い濃い情がかれを別な方へと連れて行つてゐた。お貞——其女

のことは今でもかれの頭にはつきりと浮んで來た。其時と今との間に經過した年月もそれを遮る力はなかつた。かれにはそれがまだ昨日のやうに思はれ、お貞が其處にゐるやうに思はれ、自分がまだ十八九の若い僧であるやうに思はれた。お貞は先住と大黒との間に出來た綺麗な娘であつた。その時十七であつた。

今から十年前に、主僧はある親しい友達に話した。『私が此寺に住職になつて來た時には、その女はまだ近在の町へ嫁いて生きてゐたんですよ。私がね、こいつ（今の妻）を買つたのを聞いて見に來たことがあるんですよ。こいつは、其時、知らないもんだから、平氣な顔をしてゐましたけれど……。あとで、こいつのわる口をいろいろ言つたつて言ふことでした。可笑しなもんですね。え、え、それはもう關係が深かつたんですとも……。私が足利の僧房に修行に行く時なんか、お互ひに前の夜は遅くまで爐ばたで泣き明かしてそしてわかれて行くやうなわけでしたんだから……。え、その女ばかりぢやない、お袋がさういふことを娘のするのを平氣で見てるやうな女でしたから。』

『何うして死んだんです。』

『病氣で死んだんですがね。今、生きてゐると面白いんだが、』などと言つて、主僧は其時笑つたが——その時分には、酒に酔ひなどとすると、上さんを捉へてその女の話をかかせたり何かするのが例であつたが、此頃ではもうその話などは何處かに行つて了つて、お貞のおの字も出なくなつて了つてゐた。それ

が不思議にも今美しい鮮かな繪となつて、再び主僧の眼の前に現はれ出して來た。

主僧は後ろに手を組みながら、其時分と同じでありながら、本堂も庫裡も鐘樓も山門も、全くその時分の賑やかな派手な色彩を失つて了つてゐるのを見た。あたりは靜かなさびしい落附いた空氣で滿されてゐた。不動堂の門前の繁華も一度全く亡びて、今は貧しい町の人々の長屋になつてゐた。主僧は山門から鐘樓の傍を通つて、荒れ果てた不動堂の傍に行つて立つた。先住のあのやうな熱心と努力とで、兎に角一時は賑かな門前町をつくつて、參詣者なども遠くから集つて來るやうになつたのも、忽ち荒廢の址を留むるにすぎなくなつて了つたことを主僧は繰返して考へた。

やがて主僧は庫裡の方へと戻つて來た。臺所に上さんはゐたけれど、主僧はいつものやうに言葉をかけようともしなかつた。主僧は其日一日、青春の歡樂の追憶の甘い空氣に浸つて、それから離れることが出來ずに暮した。

一番草、二番草、その田の稻は次第に成長した。到底隣の出來榮えと比べることは出來なかつたけれど、それでも縁の色は段々濃かになつて行つた。暑い日影が照つたり、夕風が靜かに渡つて行つたり、雨が斜に降つて通つたりした。

主僧はその頃は寺の用事が忙しいので、もう以前のやうにその田のほとりに姿を見せなかつた。倉庫

の白壁のかけて嬉曳した酌婦の通けた話は、それでも寺までは聞えて來て、「は、ア、さうかえ、近在のものかえ。何處へ行つたかわからないのかえ、」などと主僧と上さんとはちよつと話の種にした。しかしそれでもすぐ忘れられて行つて了つた。町ではいろんなことがあつた。郵便局の息子が首を縊つたり、かけ替のないある金持の一人息子が死んだり、年を取つた深切な寺の世話人が昨日まで丈夫でゐて朝ほつきり死んで行つたりした。その世話人は先住が不動堂を勸請する時分から何彼と寺の世話をした人で、主僧が放浪生活からこの寺に入つて來る時にも、何彼と深切に口をきいたり肝煎りをして呉れたりした。律義な堅い一方の青編屋さんで、滅多に昔の話などはしなかつたけれど、時には二三杯の酒に酔つて、先住の不動様時代を話し出すことがないでもなかつた。『本當に、あの時分はえらい騒ぎでしたからな。先住は借金の殖えるのなどには構はずに、朝から酒を飲んでゐる。お大黒様はびらしやらして不斷着に絹物を着てすましてゐるといふ譯ですから、とても堪りこはありやしません。それに、あの今、前にゐる青山が、その時分、酌婦と驅落なんかして、先住は心配する。お袋は泣く。えらいことがありましたよ、』などと話して笑つた。主僧の兄弟子で、其頃三十位であつた僧は、今でも近在の寺に住んでゐるが、この世話人とは殊に合口で、何うかして寺で邂逅することなどがあると、二人は何の彼のとその時分のことを盡きずに話した。葬式の時には、その老僧はわざわざ草鞋ばきで遠くからやつて來て、主僧と一緒に長い長い續經をした。

『吉田さんが死んでは、もう昔のことを知つてゐる人も町にはゐなくなつて了つた。好い人だつたがな。あの人の聲を聞くと、その時分のことか浮び出して来るやうな氣がしたがな。段々、昔が遠くなつて行つて了ふんだ。』あとでかう主僧は上さんに話した。

二三年前までは、主僧は閑暇すぎて困つたほどであつたが、宗務所の札が山門にかけられるやうになつてからは、人の出入りも多くなれば管内の僧侶達も何の彼のとやつて來るといふ有様で、時には上さん一人では手が廻りかねて、近所の懇意な女達を頼んで來るやうなこともないではなかつた。僧侶がやつて來ると、『まアノ、何がなくとも?』と言ふ風で、主僧はいつも上さんに酒の支度をさせた。

湯豆腐、精進揚、前裁物位で、さういふ人達は、酒を飲んで歸つて行つた。

『まア、さう、言つたもんぢやないよ。酒の一杯も呑ませて置けば、何ぞの時に役に立つものだ。』主僧はこんなことを言つて、忙しいのをこぼす上さんを手で制したりした。

上さんも長い間には段々酒を飲み習つて來てゐた。始めは、一二杯で眞赤になつて、すう／＼言つて苦しがつてゐたものだが、此頃では、夜は主僧の酒の相手も少しは出來るやうになつて來てゐた。町の人達は、古い煤けた庫裡の一間で、長火鉢を挟んで、薄暗いランプの光線の下に浮き出すやうにして二人が盃を手にしてゐるのを、をり／＼見かけた。『もう澤山、そんなに飲むと、あと片附が出來なくなるで、』などと言ひながら、上さんは主僧の酒を強ひるのを喜ぶやうに見えた。

『酔つたら、俺が手傳つてやら。』

かう言つて、にこ／＼しながら、主僧は盃を上さんにさした。

何うかすると横綴の長い酒の通帳をひつくり返して見てゐることなどもあつた。『ほ、もう、随分飲んだぞ。盆には、取られるぞ。一番酒が大きいな。』かう言つて、それを傍に置いて、『でも、まア好いや、酒だけだ。道樂は——。酒位十分に飲まなけりや、生きてる効がないからな。』

『もう、いくら位飲みました?』

『さうさな。』ちよつと勘定して見て、指を四本出して見せた。

『さうなりますかね、……此間のが大きいから。三人で一日に五升も飲んだんだもの。あん時はびつぐらしちやつた。』

『まア好い／＼。今年は桑を旨く賣つてやつたから。』

かう言つて主僧はにこ／＼してゐた。

裏の小さな池に來る割葎は、土用になると、ぱつたり聲を絶つて了つた。暑い／＼日が毎日のやうに續いた。夕暮には、古い軒に蚊柱が立つて、その鳴く聲が鼎の沸くやうに聞えた。草は取つても取つてもあとから出來た。勝手の流元の溝の周圍には、一杯に青い草が繁つて、汚ないよごれた水が長い木の樋から落ちた。

「田は何うだな。水はあるかな。」

主僧はある時墓掃除の男に訊くと、

「水は大丈夫でさ。」

「草は？」

「草も此間取つておきやんした。」

「ちつたア、取れべいか？」

「取れやすとも……。なアお上さん、此頃は始めのやうなことはアせんア。あれぢや、實もかなりつくべいと思ふだ。」

「さうかな。」

「作の野郎にやらせて置くよりやぐつと好いつて、此間もお上さんに言ひやしたのさ。」

主僧は矢張其處に行つて見るやうなことはなかつた。しかし、墓掃除の男の言つたやうに、土用に入つてから、其處の田の稻はぐつと好い勢ひを見せて來た。幸ひに蟲もつかずに順當に育つて來た稻の縁は靜かに朝風に靡いてゐた。

その間に、汽車の助役は變つて、前の肥つた細君の代りに、今度は小學校教師の上りだといふ色の淺黒い脊の高い束髪の女が來てゐた。今度のは、子供がないので、亭主の留守を寢そべつて、雜誌だの小

説たのを読んでゐるのが此方の路から見えた。百姓夫婦は相變らず朝早く支度をして野の方へと出て行つた。

野には朝日が朗らかにさした。

賑やかな盂蘭盆、それもやがて過ぎて行つた。寺の山門の中の舗石道には、紅い白い松葉牡丹などが咲いてゐた。蟲の音が段々繁くなつて、草原には蠡斯だのかまきりだのが飛んだ。近くの町の女學校の寄宿舍から歸つて來た寺の娘は、畠の縁に並んで出來てゐる玉蜀黍を晝中よく折りに出かけて行つたが、それももう残り少くなつて、幹も葉も赤く枯れて、玉蜀黍の實の毛は黒くちぢれて見えた。畠の茄子も段段小さくなつて行つてゐた。

娘は休暇中を多くは三味線や踊の復習に費やした。娘は主僧と上さんとの間に出來た子とは思はれないほど品の好い容色の好い娘で、女學校に行かない以前には、學校から歸ると、包を臺所に投り出して置いて、町の踊の師匠の許へとすぐ出かけて行つた。娘は春雨や潮來や松の縁などを踊つた。大渡ひを町の芝居小屋でした時には、主僧夫婦は、尠なからぬ金をかけて、派手な長襦袢のやうな模様の縮緬の着物を拵へてやつたりした。主僧夫婦に取つては、娘は何物にも替へ難い寶のやうに見えた。

その娘が寄宿舍の方へ歸つて行く日は、あれ模様で、風雨が凄じく裏の梢を鳴らした。通りの方へ出て行く裏の近路は水に浸つて歩けないので、娘は山門の方から大廻りをして母親に送られて、町はづれの馬



車の繼立場へと行つた。馬車の周圍を卷いたズツクから雨滴が落ちて、御者の體はすっかりびしょ濡れになつてゐた。

母親は車軸を流すばかりに降り頻る風雨の中に、傘を傾けて立ちながら、娘の乗つた馬車が靜かに出て行くのを見てゐた。

凄しい暴風雨はやがて來た。裏の森は鳴り、木の葉は飛び、鼠色をした雲はちぎつて投げられた古綿のやうに早く／＼暗澹とした空を掠めて行つた。寺の高い屋根の桶からは、雨が瀧津瀬のやうに漲り落ちた。

夜半に凄しい音がしたと思つたのは、それは裏の森の中の大きな樅の枝の折れたのであつた。朝になつても、風雨はまだ止まなかつた。井の水を汲むためには上さんの髪はしどとに濡れた。

暴風雨の野のさまは慘憺としてゐた。野菜はすっかり倒され、田の稻は半ば水に浸された。

『えらい荒れでしたな。』

『困りやんしたな。』

『土手が何處か切れたつて言ふぢやないか。』

かういふ噂はやがて彼方此方からきこえて來た。風雨は一時やんで、明るい日影がさしたけれど、あれ模様はまだ容易に収らなかつた。小學校の屋根の向うに見える天氣豫報の旗は、依然として暴風雨の

警戒を解かなかつた。

其の次の日も晴れたり降つたりしてゐた。日が明るくさして、空が青くなつたと思ふと、やがてまたすぐ曇つて雨は車軸を流すやうに降つて來た。

米が高くなつて却つて好いかも知れないなどと始めは言つてゐたが、次第に不作の心配になつて行くのを人々は見つた。毎朝の新聞には、各地の出水が二號活字で報道され、T川の土手がところ／＼危いなどといふことも業々しく書かれてあつた。

『困つたもんですな。』

『早く晴れねえぢや困るが……』

こんなことを人々の繰返す中にも、矢張暴れ模様はそのまゝに續いて行つた。一日は風が強く吹き、一日は雨が烈しく降つた。一週間目には、人々は心配らしい顔をして、T川の刻々に増水するさまに胸を轟かせた。一里と隔らない川添ひのながし町では、人々皆な結束して、夜は高張の提灯が濁流の漲りが出て稻の穂のすつかり浸つて了つたやうなところも少くなかつた。毎日裏の森を掠めて通つて行く汽車はこの停車場に入る一里ほど前のところで、すつかり水に蔽はれた畠や田の中を通つて來てゐた。

しかし寺の後ろの田は、さういふ水害の影響も少しも受けずに、靜に黄く熟して行つてゐた。穂はさし

て大きくはないけれども、それでも平年作位の収穫は確かであつた。暴風雨の過ぎた後は、空は連日美しい碧に展けて、光線の強い秋の日影は、静かな潤々とした野に濃かなさびしい影を投げて行つた。垣の蟲の音は次第にかれぐれに、街道を通る荷車の音は高く夕暮の空に響いてきこえた。

冴えた月の光は夜毎に露の多い野の草道を照した。黒く地上に落ちた町の家々の庇の影、何處からともなく匂つて来る木犀のかをり、睦じさうに並んで歩いて行く二つの影——秋は次第に深くなつて、忙しい収穫はやがて野にやつて来た。

一年の収穫を楽しむやうにして、百姓達は皆な忙しく野に出かけて行つた。男女の群は其處にも此處にも群を成して黄く熟した稲を刈取つてゐた。髪の上の白い手拭、赤い襷、時には鎌の刃に日影のきらきらと映つて光るのが、其處を通つて行く汽車の硝子窓に反射したりした。夕暮には、刈稻を山のやうに積んだ車が静かに街道を村の方へと輾つて行つた。朝夕は日増に寒くなつて最初の霜は田に刈り干した稲の束を白くした。

寺の田の稲は、矢張、墓掃除の男と日雇取とに刈られたが、時には上さんの手拭をかぶつた姿などもその中に雜つて見えた。一日二日してからその日雇取達はやがてその稲を寺の庫裡の前の庭へと運んで来た。

「餘程あるなア。」

「これでも五六俵はあるべ。」

「まアよくついた方だんべ。作の野郎につくらせるよりは得だア。」

墓掃除の男はこんなことを言つた。

稻扱きは、近所の百姓が来てして呉れた。広い庭には大勢の男や女が集つて一日ですつかりそれを扱にして了つた。かうして置きさへすりや、いつでも米にするのはわけはねえから、その中、家の方の用でもすんだら、また、一日二日来てやつてやんべ。その百姓はこんなことを言つて、その扱を広い庫裡の玄關の隅へと置いて行つた。

一日は一日と經つて行つた。町役場の兵事係が来て、演習の兵士の爲めの割宿をきめて行つたりした。その兵隊達もやがてやつて来て、三日ほどとまつてそして立つて行つた。風が潮のやうに裏の山を鳴らして行く夜などもあつた。

ある時、上さんは言つた。

「扱にして置いても仕方がねえ。あれを何うかしたいもんだが。」

「平公でも頼んだら、何うだ。」

「平公も忘れ者でなア。」

「ぢや、正公は？」

四 五 六

『皆な忙しいから。一人前のものは、皆な日雇取に行つてゐるから。』  
『それぢやまア、放つて置け。』

『でも、なア、今の中、して置くと、面倒がなかつて好いんだがな。』

主僧は丁度其時忙しかつたので、別に深く取合はずに好加減な返事をしてゐた。

二三日してから、上さんはまた言つた。

『片附けて了ふと好いんだがな。』

『誰かゝるねえか。』

『平公でも仕方がねえから頼むか。』

『さうするが好い。』

で、上さんは收穫のあら方片附いた懇意の百姓の家に行つて、唐臼と唐箕とを借りて来ることにした。  
二三日すると、上さんは、庫裡の玄關の前の處に竿を十文字にわたして、それに唐臼を仕かけて、平公と二人でそれをごろ／＼と廻し始めた。

少し智慧の足りない丈の高い平公は、にや／＼笑ひながら、上さんと一緒になつて終日頻りに働いてゐた。主僧はをり／＼玄關のところに行つてそれを見てゐた。

夜、上さんは言つた。

『平公は何うもつかひにくくつて仕方がねえ。』

『何うして?』

『何うしてつて? 唯、うはの空で臼を廻してゐるだで、ちつとも力にならねえ。誰か他にゐると好いけれども……』考へて、『正公だと、餘程好いんだけど……』

『正公、何處かへ行つたのか。』

『さつきも行つて見たが、何うも頼まれてゐるんで、手が離せねえつて言つてゐたつけ。』

『他にはねえかな。』

『さうさ……』こんなことを言つて、上さんは靜かに夕飯を食つてゐた。

その使ひ難い平公を相手に、それでも上さんは三日ほど働いた。扱はもうその三分の二ほどこなされてあとにはいくらかも残つてゐなかつた。『さうだな、五俵と少しあんべ、』などと上さんは言つた。

一日は平公は加減がわるいと言つて何うしてもやつて來なかつた。一日は終日雨が晴れずに暮れた。唐箕は空しく庫裡の入口のところ幅をして置かれてあつた。

あくる朝、平公を待つてゐてもやつて來ないので、上さんは主僧に言つた。

『あんた、ちよつとやつて呉れませんか。』

『俺れがか——』

『え。』

『やつても好いけども……』

『やつて下さいよ。さうすれや片が附くから。白だつて、さういつまでも借りて置いちや先方だつて困るだんべ。』

『平公は何うしても來ねえんか。』

『あいつは、ぐづくしてゐて、來ても役に立たねえから。』

『ちや、やつてやんべ。』

主僧はかう言つて立上つたが、『まだ餘程あるんか？』

『もういくらもねえよ、半日か、りや出來ると思ふんだがな。』

『ちや、やらう。』

で、上さんは外へ出て、また昨日のやうに十文字に張つた竿に白をしかけて、一方には唐箕を出して、その傍に新しい筵を二枚ほど敷いた。

暫くすると、主僧は古い單衣を着て、手拭で頬かぶりをして、そこに下りてそして白の前に行つた。

上さんは白の中に靱を入れて、そしてそれを廻し始めた。白の廻る音が遠雷の轟くやうに聞えた。

それは晴れた風のない好い日であつた。井戸の傍に咲いてゐる白い赤い朝鮮菊の向うに、玄關と本堂

へ通する廊下とを背景にして、春の低い主僧と體格の大きい上さんが、一緒に一生懸命に白を廻してゐるさまは、丁度レリーフか何かのやうに、くつきりと明るい午前の光線の中に浮き上つて見えてゐた。白の棒が上さんの方へ行く時には、主僧の腰は浮くやうにをかしく動いた。

あたりはしんとしてゐた。其處には誰も訪ねて來るものもなかつた。上さんはやがて再び白の中に新しい靱を入れた。白の棒は頻りに動いた。傍では鶏がコ、／＼と集つて來て餌を拾つた。

『何年振りだかな、白を挽くのは——』主僧は休んでゐる間にこんなことを言つて考へて、『もう三十年も挽いたことがないからな。くたびれるわけだ。』

午後に其處にやつて來た百姓の上さんは、『方丈さん、あ、見えても、中々旨めいだな。腰振が好いな。なア、お上さん、』などと言つて笑つた。

唐箕にかけたり、箕で吹いたりして、すっかりその仕事の終つたのは、もうかれ是れ薄暮に近い頃であつた。上さんが唐箕や白を藏つたりしてゐる間に、主僧はさつき水を汲んで火を燃して置いた据風呂の竈の下に、大きい木の根の割つたのなどを入れた。勞働の後の疲勞と暢氣な百姓めいた心持とは、久しぶりで、主僧の體にある楽しい氣分を染み込ませて行つてゐた。

上さんにまかせて好加減に上にあがつて來た主僧は、湯に入つて、好い氣持になつて、着物を着替へて玄關の方へと出て行つた。日はもうすっかり暮れ果て、ゐた。主僧はふと何年にも嗅いだことのないあ

る好いにほひを鼻にした。それは丁度昔馴染の女に長い年月を隔て、逢つたやうな感じであつた。主僧は高く積まれた靱がらのぶすくと赤く燻つてゐるのを其處に見た。

此頃では、靱がらは養蠶の材料に買はれて行くので、何處の農家でも昔のやうにそれを燃して丁ふやうな家はなかつた。主僧はぶすくと赤く燻ぶる火と一種言ふに言はれないそのにほひとを背景にして、女の許にあくがれて行つた自分のわかい時を思ひ出さずには居られなかつた。かれは庫裡の玄關の前に立つて一ところ闇に赤く見えてゐる火をぢつと見詰めて恍惚としてゐた。お貞のことなどがまた眼の前に浮んで來た。

## ボールドに書いた字

校舎の普請の出來上る間、一年生と四年生の教室がないので、ぢきその近くにある寺の庫裡の一部を借りて、そこで授業をすることにした。座敷と居間と玄關の間とを三間打通しにして、生徒の下駄箱を玄關の隅に持つて來て、奥の床の間の傍の男教員の卓の上にボールドを懸けた。小さなオルガンを女教員の卓の傍に据ゑた。立派な教場が出來た。

朝早くから小さな生徒はぞろ／＼と集つて來た。今までの學校の庭よりも寺の庭の方が廣いので、生徒達は包を自分の座席に置くとそのまゝ、彼方此方に散らばつて勝手な真似をして遊んだ。騒がしい聲は段々高くなつて行つた。教場と同じ長さの同じ間取の三間を、しきつてあるところの扉を釘づけにして、其方の方に小さく引籠つて住んでゐる主僧夫婦が、朝飯の膳に向ふ時分には、殊にその喧騒は夥しくなつて行つてゐた。寺の娘は四年生で、主僧の好みで踊を町の師匠の許に習ひに行つてゐたが、自分の宅が學校になつたのを喜んで、朝飯をすますと、袴を穿いて、包を持つて嬉しさうにして出かけて行つた。

やがて板木が鳴ると、ガタ／＼と生徒の教場に入る氣勢がして、暫くの間しんとなつて、續いて女教員の冴えた聲が静かな秋の晴れた空気に震へるやうに聞えた。

一月ほど経つて校長と視學と一緒に來て見た時には、古い小屋を壊して持つて來て使所が庫裡の傍に出來てゐて、女教員と男教員とは、熱心に互にその受持の組を教へてゐた。男教員の方は丁度數學の時間で、頻りにポールドに數字を書いてゐるのが見えた。校長と視學とは黙つて暫しその授業振を見てゐたが、やがて男教員の卓の傍に置いてある二脚の椅子のところによつて來て腰をかけた。そして一時間終るまでぢつとして其處にゐた。傍に置いてある土瓶の茶をついで校長は視學に勧めた。

『兎に角、これで間に合ひますから。』

『さうですな。』

などと視學は言つた。ピンと延びた鬚と丸い緒ら顔とを女教員はその視學に見た。

男教員と女教員とは、始めは別々に歸つて行つたが——男教員の方がいつも一二時間あとに残つて種調物をして行くのが例になつてゐたが、後には二人は互に待つて一緒に歸つて行くやうになつた。『まだですの、』などと女教員は男教員の卓の傍に行つて言つた。

その時分には、教場にはもう誰も居なかつた。夕日が靜かに生徒の机と腰掛との間にさし込んでゐた。ポールドの傍にかけた大きな時計は五時あたりのところを指して、本校からいつもきまつて跡掃除に來

る小使の爺も、もう用事をすまして歸つて行つて了つてゐた。何うかすると、その時分になつて、女教員はオルガンの前に行つて、新しい譜を選んで弾いて見たりした。

多勢の教員の中から、二人だけ選ばれて特に此の離れ島のやうな教室によこされたといふことは、それはある運命の神の所業のやうであつた。二人は授業のすんだ後の靜かな一二時間の空気に浸ることを樂みにした。

男教員はある時小さな本を持つて來て女教員に貸した。二三日してから、女教員は、『難有う御座んした。』と言つてそれを男に返した。

『何うでした！』

『さうですね。』

女教員は笑つて面白いとも面白くないとも言はなかつた。本の中に書いてあるやうな世界は、女教員に取つても男教員に取つてもちよつと想像の出來ないやうなものであつた。歡樂——さうした歡樂がこの世の中にあるだらうか。體も魂も一緒になつて空を翔つて行くやうな歡樂がこの人間に出來ることだらうか。手と手、顔と顔、唇と唇、涙と涙、さういふことが實際さう容易く行はれることだらうか。

『想像で書いたんですね。』

『さうですね。小説ですから面白く書いてあるんですよ。』

二人はこんな會話を取替した。

男教員は來年は縣廳に行つて正教員の免狀を取りたいと思つてゐた。女教員は出来るなら東京の學校に行つて、裁縫の免狀を得たいと思つてゐた。

二人は學校を出ると、主僧達の住んでゐる庫裡の方は通らずに、本堂の前から鋪石道を山門の方へ出て、街道を通つて、林の方へと出て行つた。その頃はいつも夕日が美しく野を彩つて、町に歸る自轉車が滑かに平らな道を走つてゐた。停車場近い信號柱のあるレールの傍の踏切の小屋では、上さんが頻りに夕飯の支度をしてゐた。

『さよなら。』

『さよなら。』

林の角で二人はわかれた。

體操の時間には、女教員は女の子を大勢庭に連れ出して、『龜よ龜さんよ』などといふ唄をうたつた。小さな生徒達は行儀よく並んで、先生の身振り手真似に應じて立つたり蹲んだりした。それが男教員の讀方を教へてゐるところから手に取るやうに見えた。男教員は女教員のカシミヤの袴の裾の高く低くあはれるのををりをり見た。

ある時寺の上さんは言つた。

『えらい睦まじさうだね、二人は？』

『さうか。』

主僧は笑つて、『何かしてたかえ？』

『いゝえ、何でもありませんけれども、二人で待ち合せて歸つて行くんですよ。男の方の先生が待つてゐることもあれば、女の先生が待つてゐることもあるんですよ。學校を了つちやうと、何か二人でむつまじさうに話してますよ。』

『でも、大丈夫だらう？』

『男の方がしつかりしてゐるから——。今、つまらないことに引つかゝつて、一生損をしてはつまらないと思つてゐるから、大丈夫でせうけれどもね。』

『それでも矢張氣にかゝるかね。』

『さうでもないけど……』

主僧は笑つて、『しかし、險呑だよ。いくら堅い男でもね。』

『本當だ……。』

こんな話を庫裡でしてから二三日経つたある日のことであつた。その日は男教員と女教員とは朝から變な顔をしてゐた。男は女の眼に逢ふのを避けた。女も男に顔を見られるのを恐れた。其日は男教員の

方に讀方と算術とがあり、女教員の方には體操と習字とがあつた。やがて四時の板木は鳴つた。生徒はどやどや包をかへて教場から出て行つた。つゞいてやつて來た小使の爺も腰掛を机の上にあけたり、箒であたりを掃除したりしてゐたが、土瓶の水を取替へて、炭を火鉢に加へて歸つて行く時には、二人は二人とも自分の卓に向つて、頻りに何か調物をしてゐた。

暫くしてから、男教員は立つて、椅子を火鉢の傍に持つて行つて、それに腰をかけて、土瓶から茶をついで飲んだ。女教員は矢張頻りに物を書いてゐた。

男は立つてその傍に行つた。

「てるさん！」

女は猶黙つてゐた。

「てるさん！」

女は振返つた。眞面目な顔をしてゐた。やがて微かな聲で、「でも……」

「聞いて下さらない？」

女教員は微かに頭を振つた。

「私なんか……」

「それはね、わかつてゐますよ。私達は勉強しなければやならないんですから。そんなことをして遊

んでゐられる身分ぢやないんですから……それはわかつてゐますよ。只、ね、一緒に、一緒に勉強すること承知して下さいば……」

女教員は黙つて點頭いて見せた。

その日は、女は、男より一足先に歸つて行つた。しかし、男教員の胸は楽しい希望に満されてゐた。一緒に歸つて行く以上に、かれの心は喜悅に躍つてゐた。

一月はまた經つて行つた。

林は風に鳴り、霜は庇の板を白くした。山門の傍の大きな銀杏はすっかり黄葉して、夕日は美しくその輝きを其處に集めるかのやうに見えた。教場は依然として元のまゝで、時計もボードも、火鉢も卓もすべて同じであつたが、しかし、二人はもうもとの二人ではなかつた。二人の會話はもうもとの會話ではなかつた。授業の終つた後の人目のないところでは、二人はこんな風に話した。

「あれから何うして？」

「すぐ歸つた。」

「随分遅くなつたでせう？」

「え。」

「誰にも逢はなかつた？」



男は點頭いて見せた。女は始めて安心したといふやうな顔の表情をした。女教員はよくオルガンの前に行つた。男が無器用な手つきをしてオルガンを鳴らすのを笑つて立つて見てゐたりした。

それは日曜日と大祭日と續く前の日であつた。終りの授業の時間、ふと女教員は庫裡の方で女の艶やかに笑ふ聲を耳にした。續いて、三味線の音がした。今までつひぞさういふためしがなかつたので――來客も減多にやつて來ないほど靜かな寺だつたので、女教員はそれを不思議にせずには居られなかつた。寺の娘は三味線を習つてはゐるが、その娘の彈いてゐるのでないのは、音でもわかるし、また其處にその娘のゐるのでも知れた。

そればかりではなかつた。その三味線の音は次第に高く、女と男の笑ふ聲ははつきりと手に取るやうにきこえて來た。授業の濟んだ頃には、いよくそれが盛んになつた。三味線につれて男の唄ふ聲などもきこえた。

「お客かしら。」

「さうらしいね。」

「上手ですね、三味線が……。」

かう言つて女教員は抑揚に富んだ達者な三味線に耳を傾けた。

あまりに賑かなので、男教員は、釘づけにして兩方をしきつた扉のところにとつと身を寄せて小さな

穴から其方を覗いて見た。

暫く見てゐたが、やがてそつと拔足して此方へと戻つて來た。

「見えて？」

男教員は點頭いて見せた。

今度は女教員がそつと其方へと歩いて行つた。矢張男教員のやつたと同じやうに其處にある小さな穴のところを身を寄せて、ちつとそれに見入つてゐたが、その姿は容易にそこから離れようとしなかつた。廣い教室にさした夕日の影はもう消えて風が裏の林からサツと落葉を吹込んで來た。

やがて此方に戻つて來た女教員の顔は笑つて居た。

「見えたらう？」

「え。」

かう言つたが、「別品ね、東京の人ね、藝者ぢやないかしら？」

「さうかも知れないね。」

「此處の方丈さんが相好を崩して……」言ひかけてぶつと噴き出すやうにして口を押へて、「あの女は東京からあのお客と一緒に來たんですね。」

「さうだよ、屹度。」

男教員にも女教員にも、餉臺を前にして酒を飲んでゐる肥つた客と、瘦せた主僧と、三味線を弾いてゐる若い綺麗な女とがあり／＼と見えた。女は髪を銀杏返しにしてダイヤの指環などはめてゐた。

「藝者よ、屹度。」

此方でも女教員はわざと立つて行つてオルガンを弾き始めた。譜につれて、長い短い種々な調子が夕暮近い四邊の空氣に漲り渡つて聞えた。わざと「君が代」を長く引張つて弾いて見たりした。

隣の三味線は、暫くして聞えなくなつたが、やがて歸り支度をして外に出ようとした女教員は、急いで戻つて来て、「早く……早く」と言つて手招きした。慌てて男教員が行つて見ると、丁度庫裡の脇から山門の方へと、寺の娘に連れられて、その東京の女が歩いて行つてゐた。すらりとしたその後姿は薄暮の空氣の中に靜かに動いて行つた。

二人は跡を片付けて、やがてそこから出て山門の方へと行つた。女教員を先に、男教員はそのあと五六間ほど距離を隔て、歩いて行つた。果して二人は、山門の少し手前で、その東京の女の此方へと引返して来るのに逢つた。二人は色の抜けるほど白い綺麗な女の顔を見た。

寺の娘は丁寧に先生達に禮をした。

山門を出て通りに行つてから二人は一緒に並んで歩いた。

「藝者ね。」

「さうだね。」

「まさか方丈さんぢやありませんね。」かう言つて考へて、「矢張、東京の藝者はちがひますね。」しかし五六間行つた後には、二人はもう別な話をした。

「ぢや、八時の汽車？」

「あ。」

「貴方はその前の汽車で行つてゐるのね。さう？ 七時の？ 一時間位待つてゐるのね。停車場で待つて下さるの？」考へて、「誰かに見られると大變ね。」

「大丈夫、東京なら大丈夫。」

「ぢや、私は家に行くつて言つて出ますからね。」

「あ。」

二人はこの計畫をするために、長い間無駄づかひをせずに金を残すやうに心懸けたことを繰返して考へた。女教員も金を五六圓は持つてゐた。

いつもの林の角で、「ぢや、もう明日まで逢ひませんかね。屹度待合室に待つてゐて下さい。」

「あ。」

あたりに誰もゐないのを見廻してから、二人は唇を當て、そして別れた。

二日間の歡樂は面にも現はさず、二人はいつもの通りに出勤した。東京の客はもう歸つたらしく、寺はしんとして、庫裡には何の物音もなかつた。常のやうに生徒達は喧しく騒いでゐた。

一昨日の午後、東京から來た客と、主僧と、女と三人で、この教場の中を彼方此方と歩いたことなどは誰も知つてゐるものはなかつた。その人達はかうした寺を借りた田舎の小學校の教場をさめづらしといふやうにして彼方此方と見て歩いた。客が男教員の卓の前に立つたり、女教員の椅子に腰かけたりしてゐる間に、オルガンの前に行つて女はそれを鳴らして見たりした。二人の教員の話の客と主僧との間に出た時には、「それは險呑だね。もう屹度出來てるよ。男と女とを二人一緒に置いて何等の反應がないつて言ふことはありやしないよ、」などと笑ひながら客は言つた。女は、「君が代」を鳴らして見てゐるが、急によして、「本當に思ひ出しますね。小學校に行つてゐた時分を、あの時分が一番無邪氣でしたね、」などと言つた。やがて客はボードの前に立つてチョークを取つて、惡戯書きを始めた。始めは *Little* だの *Amour* だのといふ字が頻りに書かれたが、最後に、*Woman, Wine and Song* と大きく書いた。その文字はその翌々日の二時間目の數學の時間までそのまゝ消されずに残つてゐるが、やがてそれと氣が附いて急いで拭き消した男教員は、*Woman, Wine and Song* と口の中で繰返した。

## 毒 藥

### 一

「これは宅に來たんぢやありませんね。」かう言つて妻はある日小さな紙包を主人に見せた。  
「どれ？」

手に取つて見た主人は、「宅ぢやないとも……ちやんとあて名が書いてあるぢやないか。何うしてこんなものを受取つたんだえ？」

「何うしてですかね？ 誰が受取つたんですかね。私が受取つたんぢやありませんの。」勝手に働いてゐる婢を呼んで見て、「これはお前かえ？ お前が受取つたのかえ？」

「いゝえ？」

「不思議なことがあるもんだね。二三日前から、筆筒の上にあるから、何うしたのかと思つてゐたんですよ。貴方が受取つて、忘れたのかと思つてゐたんですよ。」

「俺はこんな他人の名の書いてあるものを受取るもんか。」かう言つた主人は其處に書いてある番地と宛名とを讀んで見て、「七十七番地？ 餘程先の方だ。何うしてこんなものが俺の家にあるんだらう？ 配達も餘程間が抜けてゐるな……」

「私も一昨日あたりから、それがそこらにごろ／＼してゐるのを見て知つてました。」かう婢は傍から言つた。

「何だらう？ 一體？」主人は觸つて見て、「何か小さな罫のやうなものだな。見本つて書いてある。藥品か何かの見本だな……。早速、郵便局にかへすなり、先方に届けてやるなりしなけれやいけないね。」

「さうですね。」

「七十七番地つて、お前、何處だか知つてるかえ？」

かう主人が婢に訊くと、

「七十七番地？ さう？ 何處等でせうね、奥さん。あの池のあるあたりかしら。」

「あんな遠くかえ？」

「だつて、此間いらしつたお客様の宅が七十一番地だつて言ひましたから。」

「さうかね。あんな方になるかね。」

「ぢや、持つて行くのが大變なら、郵便局に返してやるさ。それにしても、三日も知らずに放つて置

くつて言ふのはひどいな。本當に、一體、誰が受取つたんだらう。」

「子供かも知れせんよ。」

「これは藥品だ。確かに見本の藥品だ。小さな罫が二つ三つ五つある。向うでも、何うして着かないだらうつて思つて困つてゐるだらうから、今度、持つて行つておやりよ。今日でなくつて好いから、ね。明日でも、あつちの方へ行くつて手があつたら届けておやりよ。七十七番地の高田つて言ふんだから、今更郵便局に歸すのも變だから。」

「ぢや、明日にでも、私が貞ちゃんを遊ばせながら、彼方の方へ行つて、届けてやつて來ませう。ねえ、貞ちゃん、明日行きませうね。お池の方に遊びに行きませうね。」丁度其處に入つて來た五歳位の女の兒に言ひながら、婢は勝手元の方へ行つた。

あくる日、婢が去年生れた末の女の兒を乳母車に乗せて、その傍にその紙包を置いて、貞といふ女の兒と一緒に、林に添つた道を靜かに歩いて行くのが、晴れた秋の日影に明かに際立つて見えた。林には鳥が鳴いてゐた。ひろい野には青い大根や菜の畑の中に洋館が一軒ほつんと立つてゐて、其處から靜かにピアノの音が洩れて聞えた。丁度その時、刈稻を満載した車が一臺喘ぎ／＼野の方から登つて來たが、その通る間、婢の押した乳母車は、靜かに林の方に寄つて待つて居るのが見えた。派手な女の兒のメリンスの着物が鮮かに野を彩つた。

やがて乳母車は静かにその丘の傍の路を向うに行つた。

『そら、お池が見えるでせう。』

『お池、お池。』

かう小さい女の兒は言つた。

『あのお池に金魚がゐますね。歸りに見ませうね。』

『金魚、金魚。』

『そら、いつか光やが負ぶして伴れて行つて上げたでせう。』

こんなことを話しながら、婢は静かに乳母車を押した。乳母車の中の兒が、すばく／＼とミルク罌の細い管を吸ふと、それにつれて、罌の中のミルクは靜に日に搖いて光つた。

行く先には、藁葺屋根の家が二三軒丘に添ふやうにして並んでゐた。婢はある家の角で訊いた。『七十七番地……此處は七十四番地ですがね……もつと先きでせう。』かう百姓の上さんらしい女が教へた。

婢は其處此處とさがし廻した。七十五番地、七十六番地、漸く其處をさがし當てたと思ふと、其處には別な姓の家が唯一軒あるばかりで、高田といふ家は何處にも見當らなかつた。『さうですね……。高田……聞いたことがありますね。』其處にゐた婢らしい女が言つた。

『七十七番地つて言ふのは、お宅ばかりでせうか。』

『さうですよ。』

仕方がなく、婢は其處から引返した。婢が池の縁に行つた時には、日影が美しく半分ほどその池を染めて、築山の向うには、立派な御殿の邸の硝子戸が長く見わたされた。黄い白い菊の花壇なども見えた。池の藻の中には、大きな緋鯉や金魚が泳いでゐた。

『金魚、金魚。』

かう言つて女の兒は喜んだ。

夕暮近く婢は歸つて来て、その旨を細君に話した。『不思議だわね。さういふ家がないのかえ？ ぢや、仕方がない。』かう言つて、細君は婢の手からその紙包を受取つて、再びそれを箆筒の上に載せた。

思ひ出して、夕飯の時に、主人に話すと、『不思議だな。さう言ふ家がないつて言ふわけがないがな、さがしやうがわりいんぢやないかな。』

『でも、一軒きりないんだつて言ふんですもの。』

『ぢや、先で番地を間違へたのかな。郵便局へ返すより他に仕方がない。』かう言つたが、主人は再びその紙包を見ようともしなかつた。紙包は箆筒の上に置かれたまゝになつて幾日か過ぎた。

ある日、子供の玩具箱の中に、小さな罎を發見した主人は、

「こんなもの、何うしたんだ？」

「何です、それは？」

「こんなものが玩具箱の中に入つてゐた。一體何處から持つて來たんだ。これはアヒ酸ぢやないか。毒藥ぢやないか。こんなものを玩具具にさせて堪るもんか。」

「ちつとも知りません。」

「これはお前、飲めばすぐ死んで了ふんだぜ。何うしてこんなものが宅にあるんだえ。」

「何うしてですかねえ。」

「近所からでも持つて來たのかしら？」

「何うですかねえ。どうして、こんなものを持つて遊んでゐるんでせうね。」

「注意しなくちやいけないぢやないか。」

「あ、わかつた……。そら、それはこの間の包の中から出たんですよ。」

「この間の包？」

「そら、光やが持つて行つてわからなかつた包ですよ。」

「あの中に、こんなものが入つてゐたのか。」

「え、さう言へば、小さな罎があちこちにごろ／＼してゐましたよ。此間もう一つ其處等にころがつてゐましたよ。」手に取つて見て、「さうですか。そんな怖いもんですか。毒藥ですか。まアねえ。」

「ちやんと、アヒ酸と書いてある。これを飲めばすぐ死んで了ふんだ。子供なんか、何も知らないから、いたづらしながら飲まないとも限りやしない。そんなことがあつたら何うするんだえ。」

「まアねえ。」

「あとは何うしたえ？」

「其處等にあるでせうよ。」

「其處等にあるぢや困るぢやないか。さがして御覽。」

細君の胸にも主人の胸にも、ゆくりなく死の問題が往來した。誰か、それを飲んだら何うだらうと思ふと、身内がゾク／＼した。主人は「ボブリー夫人」のことなどを想像した。床に横はつて苦痛の襲つて來るのを待つてゐる青白い顔、やがて一刻毎に烈しく襲つて來る苦痛、輾轉反側した體が次第に床の中に陥つて行く状態——さういふ光景が歴々とかれの眼の前に搖いて見えた。不思議の災害が何處から襲つて來るか知れないやうな恐怖をかれは感じた。長い人生の間には、さういふ悲惨な光景がかれの平和

な一室の中に起つて来ないとも知れなかつた。かれはかれの胸に潜んでゐるある暗いものに觸れたやうな気がした。その暗い物は、今こそ平和と光明とに打克たれて、何の影をも動搖をも見せて来ないけれど、それがあつた機会とある心理とに觸れて、何んな光景を呈して来るか知れなかつた。罎の中にある白い薬——それを見た二人の心は震へた。

黙つて立つて、箆笥の上をさがして見た細君は、矢張同じ罎が二つ其處にころがつてゐるのを發見した。

「これつきりかしらん。」

「此處には、これつきりありませんがね。」

「もつとある筈だがな。五つ位あつたと思ふがな。」

「子供がもつて玩弄具にしてゐると思ふんですけれど。」

「もつと搜して御覽。」

子供等に聞いて見ても、皆な「知らない、知らない、」と言つた。大きな女の兒は、「そこらに一つあつたと思ふけれど、それよ、屹度。玩弄具に入つてゐたのよ、私が見たのは——」などと言つた。

「本當に危険だ。」

「ちつとも知らなかつたんですもの。」

「何處にでもあつたら、父さんに教へるんだよ。持つて遊んでなんかるてはいけないよ。これは毒藥だから。」

「毒藥つて、毒なの？」

「飲むと死ぬんだよ。」

「さう。」

かう大きな女の兒は眼を睜るやうにした。夕飯を食ふ間、三つの罎は、長火鉢の猫板の上に並んでゐたが、それがすむと、主人はそれを持つて、下駄を突かけて、勝手元から裏の方へと出た。晴れた寒い夕暮で、豆腐屋が垣の外を通つて行つてゐた。

さながら自己の心の底にかくれた暗い心を亡して了ふやうにして、主人はその三つの小さな罎を石でこなくに砕いて捨てた。白い粉が夕暮の黒い地にはつきりと散らばつた。主人の心は震へた。

## 三

「あ、こんな處に一つある。」

かう思つた主人は、佛壇の奥の揮發油の罎や白粉下の罎の中にまぎれて隠れてゐたその小さな罎をさがし出して、それを自分の書齋の方へと持つて來た。それはそれから一月ほど経つた後であつた。しか

し今度はそれを石で砕いて捨て、了はうと思ふほど主人の心は激してゐなかつた。主人は誰にも話さずに、それをそのまま、本箱の抽斗の奥に投り込んで置いた。

もう一つの罎は、主人がそれを発見する十日ほど前に、服簞笥の陰に落ちてゐるのを細君が発見して、矢張り「危険なものだから」と思つて、抽斗の奥の方に藏つて置いたが、しかしその時丁度何や彼やと忙しいことがあつたので、ついそれなり主人に言ふのも忘れてゐた。で、二つの毒薬の小罎は、書齋の抽斗と服簞笥の抽斗の底に深く藏はれたまゝ、誰にも全く忘れられて了つてゐた。

静かな長い年月は経つて行つた。

時には、何うかして、主人も細君も、さがし物などの次手に、「こんなところにまだ罎が藏つてあつた」と思ふことがないでもないが、いつもすぐ忘れて了つて、つひぞそれを話の種にしたことはなかつた。子供達も段々大きくなつて行つた。其時分裁ゑた庭の榊樹は、見上げるほど高くなつて、柿の枝には大きな赤い實などが見えた。

## 四

「長い年月の中には、いろ／＼なことがあるものだ。艱難が艱難でなく、平和が平和でもない。そんなことがあつて堪るものかと笑つて過ぎたことも、何時の間にかこつそりやつて来るかもわからない。

若い時、堅いと言はれた男が、一生堅いで通つて行くものでもなければ、道樂で仕方がないと言はれた男が一生道樂で身を滅して了ふものでもない。榮えたものもいつも榮えてゐるものではない。衰へてゐるものもいつも衰へてゐるものではない。好いが好いでなく、わるいがわるいでない。時が経つて見なければわからない。棺になつてからでなければその人のことはわからない。不思議だ。不可解だ。「こんなことを主人は思つた。

ある時には「時と言ふものが不思議だ。時がいろ／＼に人間に人間の心理の底をひらいて見せる。ある時はその面影をさへ見せなかつたものが、時が到来するにつれて、次第にその姿を見せて来る。こんなことがあり得るかと思はれるやうな時が来る。こんな大膽な、こんな無法な人間になることを曾ては夢想だもしなかつたと思はれるやうな時が来る。遅かれ、早かれ、人間は自己の持つたものを一生の中に経験せずには終らない。怖しいのは時だ。不思議なのは時だ。」かう彼はかれの日記に記した。

「自分の魂は今暗黒の底に落ちつゝある。それを自分は知つてゐる。今、それを何うかしなければ底止するところを知らずに真逆様に底の底に落ちて行つて了ふ。しかも、さうと知りつゝも、何うすることも出来ない。人間の力ではとてもそれを支へることが出来ない。情けないが仕方がない。」

「時はすぎつゝある。そしてその過ぎ行く時の音は明かに感じられる。あゝあの音だ。あの音だ。」



渠は深夜ひとりさめて、悚然として床の上に取りかへつた。

長火鉢に相對して坐した夫と妻との間にも、長い盡きない會話があつた。物質上の争闘、精神上的の争闘、肉體上の争闘、さういふものが盡きずに其處にあつた。

「お前は何故しつかりと俺をつかまへてゐないのか。」

「貴方は何故しつかりと私を捉へてゐて下さらないのですか。」

「組合せた手も離さなければならぬ。抱きついた肌も離さなければならぬ。」

「何故離さなければならぬのですか。」

こんな會話が絶えず繰返された。しかし時の所業を人間は何うして拒ぐことが出来るであらうか。

ある日、渠は小冊子に讀み耽つてゐたが、急にそれを下に置いて、長い／＼溜息をついた。

「あゝ／＼。」

「何うなすつた。」

「實際、人間の運命はわからない。」

かう言つてかれは今讀んだ小説の話を細君にした。

渠の讀んだのは、チエホフの短篇集中の一つであつた。そこには荒野の停車場と、そこにゐる男とが描かれてあつた。男は昔ある人から豫言された豫言を覚えてゐた。二十五の厄年には屹度お前の一生を

すつかり變へて了ふやうなことが起つて来る。かうその豫言者は言つた。それをかれは二十五の年の大晦日の日に思ひ出した。今日一日だ。何がこの身に起るだらう。何がこれから先き十時間か十二時間しかない間に起るだらう。それも市街の真中とか、人の大勢あるところなら、さういふ運命が何處からかやつて来ないとも限らないけれど、この荒野で、人一人ゐない荒野で、雪ばかり降頻つてゐる荒野で、何が起つて来るだらう。かう思つて、その男は停車場で圍爐裡にあたつて、汽車の來るのを待つてゐた。

「で、何うしました？」

「何うしたと思ふ？」

「わかりません。」

「實際、廣い野には、雪が降り頻つてゐて、人一人ゐない。汽車が來ても、乗るものもなければ降りるものもない。唯、停車場を掠めて通つて行くばかりだ。時間は時間と經つ。何も無い、何も無い。これから、歸つて、妻のゐる宿にかへつて寝るばかりだ。かう思つてゐるところに、最後の汽車が來た。」

「それから。」

「そこには、男の叔母さんだといふ女が唯一人乗つてゐた。そしてそれは今までに二度と逢つたことのない若い美しい叔母さんだ。男は喜んでそれを自分の家に伴れて行つた。」

「それで何うしました？」

『それが——その若い美しい叔母が運命の手であつたとは誰が知らうだ。その女と男とは家に辿りつくまでに、既に全く戀に落ちてゐたんだ——』

『へえ！』

『で、それから後は何うなつたか、皆さんは知つてゐるか。御覽の通りで、かうして、かういふところに彷徨してゐる。かう書いてある。實際、不可思議だ。』

『さうですね。』

『お前と俺の間だつて、何うなつてゐるかわかりやしない。いつ、何んなことが起つて来て、平和が忽ち破れて行つて了ふかわかりやしない。』

『本當ですねえ。』

かう言つたが、細君は思ひ出すやうにして、『さう言へば、かう言ふことがありました。』

『何ういふ？』

『今までは話をしたことはありませんでしたけれど、一度、姉と一緒に、ある易者に、運星を見て貰ひに行つたことがあるんですがね。』

『何處にゐた時？』

『小石川にゐた時分ですがね。……あそこは非常に旨いつて言ふから、私もついて行つて見たんです。』

姉さんは、あゝいふ人でしたから、何ぞと言ふと、すぐ其處へ見て貰ひに行つたんですがね。その時は、何でも指環が見えなくなつたとか何とか言ふので、出かけて行つたのです。私は好いつて言ふのに、姉が達つて勧めるものですから、見て貰つたんですがね。』かう言つて細君は笑ひかけた。

『何つて言つたえ？』

『大變にわるいんだつて……』

『星が？』

『貴方と私との間が……。出来るならば、此人とは今の中にわかれて了ふ方が好い。とても平和と一緒に暮してゐられる星ぢやないんださうです。貴方にくつついてゐれば、私は身の破滅を見なければならぬんですつて……』

『馬鹿な。』

『姉さんもその時は笑つて、あの易者は上手だと思つたら、あんなことを言ふがね。それはお前のことぢやない、私のことだがねつて言つてゐましたがね……』言ひかけて少し考へて、『でも、今の話なんかきくと、さういふことがないとは言はれませんわね。私達の間には、どんなことが起つて来るか、それはわかりませんからね。今までは平和でやつて來ても、先は何うなるかわかりませんからね。おしまひの一時間に、さういふことがあつても、それでもその豫言は當つたんですからね。』

肉體の  
2.1.9

「それはさうだ。長い一生だからな。それはわからない。」

「それを思ふと、厭なく、氣がするんですの。」

かう言つて細君は其話をやめた。

しかし何うかすると、其話は夫妻の間に取換された。そして、その話の出る度に、豫言者の言つた通り、二人はある宿命に向つて徐々として進んで行つてゐるやうなを感じた。『馬鹿な。』かう言ひながらも夫は顔を曇らせ、細君は聲を顫はせた。夫は野道を夜遅く歸りながら、さうした宿命を頭に描いたりなどした。

孤獨はやがて二人の間に來た。

それは長い間にそれを合せることに努力した愛情の蔓が、ぱつたりある處で切れたやうなものであつた。今更それを繋ぎたいにも繋ぐことが出来ないのを二人は感じた。

ある日、細君は末の五歳になる女の兒の襦袢や着物を行李の中から出して、それを展げながら言つた。

「もう、これを着せるものもない。」

「まだ、子供が欲しいのかえ。」

「欲しいといふわけではありませんけれど、——生ればまた困るのは知れてゐるけれど、元のやう

に、子供の生れる月を数へて、襦袢でも拵へて見たいやうな氣がしますよ。あの時分は、まだお互に若くつて、元氣でしたからね。家も賑やかでした。赤兒の啼聲といふものは賑やかな好いものですからね。」

「ぢや、拵へるさ。」

「もう出來やしませんよ。あ、く、小石川にゐた時分が戀しい。」

「さうだな、あの時分は賑やかだつたな。何んな苦痛も苦痛にならず、何んな煩悶も煩悶にならなかつたな。周囲を見廻しても、自分達と同じやうな生活をしてゐる若い人達が多かつた。行く先にはいつも色彩のあるはなやかな希望の雲がたなびいてゐたからな。何んなことをしたつて、氣はまぎれて行つたものだ。」

「本當ですな。」

「しかし、皆なかうなるんだから、何うも仕方がない。若い人達が、ミルクの罐を赤兒にふくませたり、ねんねこで子供を負つて寒い朝に立つてゐたりする光景は、今でも到る處で見受けるが、さういふ人達も、皆な私達と同じやうになるんだから。」

「さうでせうか。つまらないのは私達だけぢやないでせうか。」

「そんなことがあるもんか。皆なさうだ。子供を生まなくなれば、皆なさうだ。お前達はもう子供を

育てることばかり興味を有たなければならぬのだ。」

「さうでせうか。」

「何故さうでないんだえ？」

「だって、私の年位で、まだ子供の出来る人は澤山にあるんですもの。」

「ちや、何故、さういふ風にしないんだ？」

「貴方がさうなさらないからだ。」

「俺にも責任があるかも知れないが、お前にも責任がある。それならば、何故、お前は肌を美しくし、髪を美しくしないのだ。」

「何故男は肌の美しい髪の毛の美しい女ばかりをもとめるのでせうか。肌が美しく髪が美しくなければ、女は男には用はないんでせうか。」

「さうではない。しかし、美しくないよりは、美しい方が好い。お前が髪を美しくしようと思はないのは、お前の心も體も、俺から離れて行つてゐるからだ。子供の養育に忙殺されて、生殖には段々縁が遠くなつて行くからだ。お前の體と心の中に、生殖の芽が段々薄くなつて行つてゐるのだ。」

「男は何うです？」

「男には直接には子供の養育といふことはないから、女とは違ふ。」

「何故でせう？」

「肉體の關係が女親よりは薄いからだ。男は乳を飲ませない。だから、子供は父親のものと云ふよりは、母親に屬してゐると云ふことが出来る。」

「だから、男は何んな真似でもして差支ないつて言ふんですね。」

「いや、男ばかりぢやない。女でもさうだ。お前だって、これから肌を美しくし、髪を美しくしようと思ふやうになることがないとは言はれない。その對象さへあれば、生殖の芽は再び萌え出して來るに相違ない。」

「ぢや、他に男を拵へろと言ふやうなものですな。」

「拵へろとは言はない。しかし、お前に取つては、さういふ新しい芽の萌える方が或は幸福であるかも知れない。しかし、恐らくは、さういふ元氣はあるまい。何故と言へば、お前の肉體はもう衰へつゝあるから……。新しい芽を萌えさせようとするには、子供の養育に忙殺されてはゐられないから。子供を捨てなければならぬから。さういふ元氣はお前にはあるまい。」

「それはわかりません。」

「さうだ。それはわからないかも知れない。夫はかう言つて笑つた。」

書齋の柔かい寢臺の上に赤いメリンスの裏のついた夜着を着て、夫がひとり寢をするやうな年月がかりに長く續いた。細君は毎夜大勢の子供の世話をしてから、おそくまでひとりて茶の間に起きてゐた。

で、細君が大勢の子供に取巻かれて自分の床に入る前には、屹度一度は夫のゐる書齋の方を覗いて見るのが例になつてゐた。時にはもう灯が消えて暗くなつてゐることもあれば、時にはカン／＼と明るく灯が點つてゐることもあつた。しかし細君は一度もその長い廊下を書齋に入つて行つたことはなかつた。細君は靜かに障子をしめて、電氣のスイッチをひねつて、そして自分の床に入つて寢た。

ある日、寢臺の上に寢てゐる夫の傍にやつて來た細君の顔には、赤い昂奮した色が隠されずに漲つてゐた。

「この夜着を私に下さい。」

「何うして？」

夫の顔にも急にある表情が上つた。

「何故でもよう御座んすから。」

「何故、そんなことを言ふんだえ？」

「言はないでもわかつて居ります。」

「俺にはわからない。」

「その夜着の中には、私から貴方を奪つたものが住んでをります。ある女が住んでをります。美しい女が住んでをります。」

夫は起上つて、

「何を言ふんだ？」

「そんなにしらを切らなくとも好う御座います。その夜着は私が戴いて、向うに持つて行きます。」

「これはやられない。」

「頂戴して参ります。」

「いや、これは俺の生命だ。俺はこの爲めにのみ生きてゐるのだ。これを失つては、俺の生活もなければ、俺の藝術もない。こればかりはやることが出来ない。」

「何うしても頂戴して参ります。」

夫は考へて、

「そんなに欲しければ、持つて行くが好い。しかし、俺の心まで持つて行くことは出来まい。この夜着は持つて行つても、俺の心は持つて行くことは出来まい。それで好いか。」

「……………」

『それでも好ければ持つて行け!』

細君の目からは涙が流れた。

『この心を、この涙を貴方は汲んで下さることは出来ないのですか。これまではそんな貴方ではなかつた。やさしい人だつた。この夜着に絡みついた心の起らない中は、貴方は立派な家長であつた。すぐれた父親であつた。貴方は五六年前の昔の賑やかな家庭を翻つて考へて見ることは出来ないのですか。あの賑やかな暖かい家庭を、赤兒の聲で満された賑やかな家庭を。日の暖かい明るい部屋に私が寝てる。その私の傍に小さい生れたばかりの赤兒が寝てる。小さい可愛い呼吸を立てゝる。その周囲には、お七夜の祝物の赤飯やら鯉節やらが散らばつてゐる。あの時分の暖かい生々した空気に返らうとは、貴方は思はないのですか。』

『何うも仕方がない。』

『あの時分の空氣と今の空氣と何んなに違つてゐることでせう。あの時分は苦勞を苦勞と思はなかつた。一つのを半分づつわけて食つても私達は満足してゐた。人達も大勢訪ねて來た。親類の娘達も絶えずやつて來た。笑聲が門に満ちた。希望の光はこの家に満ちあふれてゐた。それを今の空氣に比べたら、何んなに違つてゐるでせう。今は、今の空氣は、丸で氷のやうです。北國の雪や氷に閉された家と同じです。いつの間にかさうなつたのでせう。いつの間に、この同じ家が、この同じ部屋が、この同じ家具

が、さういふ冷めたい空氣に包まれるやうになつて行つたのでせう。それも皆この爲めです。この夜着の爲めです。この夜着に貴方の心が絡みついて行つてからです。』

『何うも仕方がない。』

『では、何うしても再びもとに戻すことは出来ないのですか。昔の温かい柔かい賑やかな空氣には引返すことは出来ないのですか。』

『何うも仕方がない。』夫は三度重ねて言つたが、急に聲を強くして、「過ぎ去つたものは仕方がない。お前は寧ろ新しい生活を築くが好い。過去を夢みるよりも、將來を築き上げるが好い。寒い國も仕方がない。冷めたい空氣も仕方がない。』

『では何うしても……』

夫は黙つてゐた。細君は凝と夫の方を見たが、そのまゝ冷めたい長い廊下を向うの方へと行つた。

またある年月は過ぎた。

矢張二人はその同じ家に住んでゐた。家を取圍んだ樹には月が照り、日が照り、風が吹いた。何も知らない子供達は無邪氣に唱歌をうたつたりした。大きな男の子達は、ボールなどを投げた。

此頃、細君は髪を美しくすることに心がけた。今まで入つたこともない髪結なども出入した。新しい

白粉下、油、鏡などが常に細君の居間に置かれた。』でも、これは貴方の爲めではありません。私の爲めです。私だつて生きなければなりません。私だつて生きる路を築いて行かなければなりません。』かう言つてゐるやうにして細君は長い髪を梳いた。

## 五

書齋の抽斗と、服箆笥の抽斗との奥に藏はれた小さな鱧は、長い年月を全く埋れて過して来た。誰もそこにさういふ鱧があるのを知らなかつた。藏つた人達も、つひぞ一度もそれを思ひ出さなかつた。

書齋の抽斗の方には、紙屑や反古が一杯に詰められてあつた。そこには、主人の昔の戀の手紙が一束になつて入つてゐたり、秘密の日記が雜つて入つてゐたりした。男と女と戯れに書いた歌の断片もあれば、あるところから要求された計算書の半ば破れたのが入つてゐたりした。金を借りた證書なども雜つた。ある手紙は破れて丸められて押詰められてあつたが、それは女のやさしい手跡で、それを讀んだ主人の激動と昂奮とは、その時のまゝに依然として其處に残つてゐるのを見た。主人の胸の其時のなやみは、とうに消え去り醫やし盡されて了つてゐるけれど、ある人が来てそれを持ち出して去るか、その丸めたのをひろけたりするかしなければ、何時までも何時までも同じやうにして跡を示してゐるのであつた。

た。

小さな鱧は、さういふものゝ中に、到底世に出る春の希望の絶えて了つたものゝやうにさびしく斜に横はつてゐた。

服箆笥の方に藏はれたものは、これとは違つて、倒れて、腹を白く見せたまゝになつて其處に横はつてゐた。其處には古い縮緬の帶揚などがあつた。そしてその帶揚の中には、女の心の底に人知れずかくれてゐるやうな秘密がいくつとなくひそんでゐた。油の匂ひの失せない半襟、香水のかをりの残つた風呂敷、ある男から貰つた記念の指環、さういふものが澤山に澤山に入つてゐた。何うかすると、細君の白い手が、その指環を其處から出したり入れたりした。ある小さな繪の本などが入れられてあつた。

細君は、時には小さな鍵で、その抽斗をあけて、帶揚の中から、昔の手紙や反古を出して、長い間、そこに坐つて、それを見てゐることなどもあつた。さういふ時には、子供達は大抵學校に行くか、外へ出て遊んでゐるかして、あたりにはその姿を見せなかつた。前の庭に面した縁側はしんとして、樹の影が靜かに半ば閉めた障子に映つた。

知らぬ間に過ぎ去つた時だ。その時、乳母車に乗せられて行つた女の兒は、もう七歳になつて、來年からは學校に行けるやうになつてゐた。其時、八歳であつた女の兒は、今年から女學校に行つて、靴をはいて、カシミヤの袴を裾長に曳いて、『行つて参ります、』と言つて、快活に出かけて行つた。

細君は時々不仕合せな小婢のことを思ひ出した。ある夜、その小婢は、自分の荷物をあるところへ持ち出して置いて、細君が幼い兒に乳を吞ましてうとくしてゐる間に、戀に惱んだ娘の多くのするやうに、こつそりと裏口から出て、外に待つてゐる男の方へへ行つた。細君の起きた時には、茶の間には灯が徒らに明るくついて、子供の明日の辨當の菜のかんべうが黒く鍋の底にこけつてゐるばかり、呼んでも呼んでももう婢は其處にゐなかつた。

しかし小婢の上にも、楽しい戀の歡樂は長く續かなかつた。婢は男の爲めに彼方から此方へと流浪した。其處で逢つたといふものもあれば、彼處で逢つたといふものもあつた。ある人はその婢が落魄して汚いざまして歩いてゐるといふことなどを細君に話した。

そればかりではない。ある年のある日、細君は婢の田舎の父親から其の死去を報じた手紙を受取つた。早く流れて行く生活ではないか。あの小さい娘が、あの池の縁で女の兒に金魚を指さした娘が、戀をして、苦勞をして、子を生んで、そして逸早く過ぎ去つて了つたではないか。「あゝ光も死んだかね。あの娘は一番効々しい好い婢だつたのに……。樂もせず、死んで行つて了つたのかねえ。」かう言つて其時細君は涙をそのはがきの上に落した。

主人はまた主人で、旅行の次手に、その小婢の墓のある田舎を訪ねて行つたことがあつた。婢は家出をした時の男とわかれて、別な男を持つて、その胤を懐妊して、困つて、田舎に歸つて行つたのであつ

た。そしてその産後にかの女は斃れたのであつた。丘の陰にある小さな農家にゐる老いた父母は、涙ながらにその娘の艱難な短かい一生をかれに話した。

その墓は村の寺の奥の方にあつた。小さな塔婆が唯一つ立つてゐるばかりで、石碑もなければ墓標もなかつた。かれは其前に行つて花を手向け線香を燻した。で、かれは其處を去つて、寺の後を流れてゐる川の土手の上に立つた。丁度秋で、野はひろくと川の向うに展けてゐた。其處此處の森は濃く淺く紅葉して、もすがキ、と聲を立てた。

この婢の身の上ばかりではない、この他にも、其間に種々な事件やら悲劇やらが澤山に澤山にあつたに相違なかつた。絶え難い苦痛、狂はしい煩悶、愛着と嫉妬とに堪へかねて、ある男はある女の腹に刃を刺した。ある女は流るゝ水に向つて身を投じた。飛行機からは若い軍人が墜落して死んだ。遠い外國では、聞くも恐ろしい戦争が起つて、何百萬といふ人間の血は時の間に流れた。——その間を、小さな二つの體は、つひに来る時を待つやうにしてそこに横はつてゐた。

## 六

ある人がある扉を開けた。「あゝあの扉を開けなければ、かうした空氣は此處に入つて來なかつた。」かう悔んだとて、それは何の役にも立たない。靜かに靜かにある空氣は入つて來た。



「お前は何處から来た。」

「遠くの遠くから。」

「何故来た？」

「お招きになつたから。」

「いやそんな用はない筈だ。」

「いゝえ、お招きになりました。あそこに行けと命ぜられました。私は好んで此處に來たものではありません。私は谷の底に靜かに眠つてをりました。青草が私の寢床で、谷の水が私の音楽でした。長い長い眠りを私は眠つて居りました。それを呼びさましたのは、貴方ではありませんか。」

「お前は何だ？」

「私は歡樂と苦痛とを裏表に持つてゐるものです。私は盲目です。私はこの世に稀なものを人間に見せる技術を持つてゐます。私に逢つてはどんな豪い人でもすぐれた人でも皆な盲目にならずには居られません。そして私の見せるものは、この世の中にあるやうなものではありません。「生存」でもありません。「生死」でもありません。さうかと言つて物質でもなければ精神でもありません。人間は時には死を代償にしても、このめづらしいものを見ることを厭はないことがあります。しかし、多い人間の中で、このめづらしいものを見られる資格のあるものとなないものとの區別があります。貴方にも、貴方の奥さん

にも、さういふ資格は昔からあつたのです。」

「私の妻にも？」

「さうです。貴方と貴方の奥さんには、かういふ運命がいつか一度はやつて來ずにはゐないのでした。」

「それが昔から知れてゐたのか。」

「暗示がもう昔からあつた筈です。今更急に起つたことではありません。かうなつて行くのは、前から知れてゐました。」

「進んだが好いか、退いたが好いか。」

「お進みなさい。」

「よし。」

扉は閉つた。

七

妖艶な美しいその女は、その黒髪を、その肌を、その姿を前にかけて大きな鏡に映して坐つた。主人はそれと相對した。

『孤獨の苦惱、寂寞の煩悶、さういふものを免れるのは、唯御身の眼を見た時ばかりだ。御身の體には、この世では見ることも味ふことも出来ないある尊い美しいものがかくれてゐる。御身を見ない以前は、この身は全く孤獨に虐まれた。右を見ても、左を見ても、何處を見ても暗い壁ばかりであつた。何物も私を樂ませるものもなければ、何人も私を慰めて呉れるものはなかつた。こればかりは眞實だと思つて、それを目蒐けて一心に追求して行つた本能さへも、次第に茶褐色から灰色に變つて行つた。後には全く暗黒な壁になつて了つた。そしてその壁には「生殖」といふ無氣味な字が唯大きく書かれた。私の周圍は夜のやうに暗かつた。妻は蒼白い顔をした幽靈であつた。子供は執着く絡みつくけだもの、やうであつた。』

女は黙つてその黒髪を梳いた。

『孤獨の苦惱、それは何んなであつたと思ふ。生の苦惱、死の苦惱、それよりもつと苦痛であつた。ぢつと坐つてゐると、體がずんと千億萬仞の底に沈んで行くやうな氣がした。そしてこの孤獨には、いづつと退屈と寂寞とが伴なつた。何故、人間はかうして生きてゐなければならぬのか。幾日も幾日も一語も口を利かずに生きてゐなければならぬのか。死ぬにも死なれず、生きるにも生きられず、「社會」とか「他人」とか言ふものが、絶えずその背後に絡みついてゐて、自分で自分を自由にすることが出来なかつた。自分は鳥のやうに自由に空を翔つて行く翼のないのを悲しんだ。毎日々々唯同じやうに、どん

よりとした空が明けてそして暮れて行くのを私は見た。そして人達は、さういふことが何でもないやうに、當り前のことであるやうに、平氣な顔をして、満足して歩いてゐるのを見た。黄い佗しい砂塵がいづつと私の眼の前に舞つた。私の頭は「平凡」と「無爲」と「無思想」とに疲れた。しかし人々の言ふやうに、勞働といふものが孤獨に比べて、果してそれほど貴い價值あるものであつたらうか。勞働、努力、さういふものに何の意味があるであらうか。しかし、今はさういふ境から離れた。それも皆な御身の賜だ。』

女は微笑に笑つて見せた。

『かういふ價值ある世界が別にあらうとは夢にも思はなかつた。かういふ光輝ある美しい世界が私の前に展けて來ようとは思はなかつた。それにしても、何といふ縁だらう。何といふ幸福だらう。ゆくりなく御身の眼を見たといふことは——。御身はその時、流るゝ川の畔を歩いてゐた。御身は私の其處を通るのも知らなかつた。御身はその河の中に御身の眼と御身の心とを限りなく誘惑するあるものがあるやうにぢつと深くそれに見入つてゐた。あの時、御身がちよつと頭を擧げて私を見なかつたならば——そして永久に御身の眼を見ることが出来なかつたならば、それは私に取つて、何んなに不幸であつたであらう。それこそ私は長い長い暗い壁の中の生活を猶つゞけて行かなければならなかつたのだ。しかし、私は御身の眼を見た。御身の眼と私の眼とは運好くそこで逢つた——』

女は顔を此方に向けた。黒い眼はけだかいしかしフィットクルな蠱惑のかゝやきを持つて、ぢつと主人

の方を見た。

主人は猶續けた。

「奇遇——眞に奇遇だ。この眼と御身の眼とは何千年來相觸れよう相見よう相近づかうとしてゐたか  
知れなかつたのだ。互に捜し合つた眼と眼とがこの廣い世界で逢つたのだ。その瞬間は、何といふ好い  
日、好い時間、好い分秒であつたらう。あの時、御身は今まで川を見てゐた眼を移して、忽ち私の方へ  
と近寄つて來た。その時から、私の孤獨は救はれた。私の苦惱は取除かれた。私の暗い四壁は崩れた。」  
女は始めて口を開いた。「その時から、さうです、その時から憂愁の谷も花で彩られ、困憊の天地も金  
色で輝いた。千載の一遇、實際千載の一遇でした。」

窓の外からは、俄かに美しい日光が灑ぐやうに女の肩の處に射した。

女は言つた。

「社會は？」

「社會などはもう既に既に、とうの昔に、私から去つた。孤獨の世界にゐる時にも、社會はもう私の  
頭の中にはなかつたのだ。」

「他人は？」

「他人も矢張社會と同じだ。他人はこの千載の一遇を羨み且つた、へるであらう。私達の間には咲いた

花に眼を娛ませ心を淨くするであらう。そしてその花のかをりはかれ等の思を私達の境に誘つて來るで  
あらう。」

「では、貴方の妻は？」

「妻？ 妻は別な道を行つた。妻は更に新しくかの女の行く道を開くであらう。そしてそこに花を咲  
かせることに力と心とを盡すであらう。」

「妻の涙は？」

「それも間もなく乾くであらう。何んな涙でも、時を経て乾かぬものはない。」

「時は？ 貴方の最も苦しんだ時は？」

「時はもう私の心を悩まさなくなつた。時も私達二人に對しては、如何なる作用をも呈することが出  
來なくなつた。私達の歡樂は世の中にある刹那の歡樂ではない。苦痛を後に脊負つた歡樂ではない。刹  
那と永久との交渉を唯一の題目にした時は、二人の間には何等の欺騙を働かすことが出来なくなつたの  
だ。」

女は微笑を湛へて、靜かに立つて、窓のところに行つた。

窓の下にある花園には、種々の美しい花が咲いてゐた。日が靜かにそれにさして、髪々と風の渡る度  
に、花と葉と共に女の髪が軽く揺れた。

『藝術は？』

ふと振り返つて女は訊いた。女の眼は美しく輝いた。

『藝術は……藝術は……御身の眼と御身の髪と御身の心とに由つて、更に無限の美しさと輝きを増すであらう。世の中に稀な尊い価値のある藝術が私の胸にやどるであらう。御身の胸を透して……』  
主人は言ひ淀んだ。主人は急に言葉をとめた。主人は女の眉のあたりに、ある小やかな暎の色の上のを見た。

『では、藝術と私と比べては？』

『……』

『私か？ 藝術か？』

主人は沈黙した。主人は急に女の傍に走り寄つた。主人は口に出してこそ言はなかつたけれど、無限の服従は残りなくその顔に現はれてゐた。

二人は抱き合つた。静かな音楽は何處からともなく起つた。美しい緩かなしかしその底に測りがたい不吉を暗示したやうな旋律は長く續いた。

八

不思議な形をした娘の姿が急に其處に現はれた。年は十六七で、髪は庇髪を真中から割つて、前揃を二枚差して、袴を裾長く穿いて、靜かに此方へと歩み寄つて來た。不完全に發達した春期の覺醒は、胸のあたりに高くふくらんだ乳房と、青白い皮膚と、動搖し易い表情とに名残なく現はれてゐた。放縱に捨てられて育てられた荒んだ氣分も歴々と見えた。

『お父さん！』二歩三歩進み寄つて、茫然とした主人の顔を凝と見た。

『お父さん！』二度目の聲に、主人は初めて氣が附いたものゝやうに、懶いどんよりした眼を開いて其方を見た。

『お、お前か。』

『お父さん、お父さんは何故歸つていらつしやらないのです？』

主人は黙つてゐた。その顔には昔の孤獨と憂愁とがはつきりと掠めて遍つた。

『お父さん、お父さんがお歸りなされないので、私達はどうあの家に住んでゐることが出来なくなりました。家は荒れたまゝになつて了ひました。昨日も或人が來て、家の一部を壊して持つて行つて了ひました。今日もある男が來て又其一部を壊して持つて行かうとしてをります。私達はどうあの二階で、欄干に

凭つて富士を眺めることも出来ません。あの大きな樹の下で戀しい昔の唄をうたふことも出来ません。何も彼も荒れて壊れて了ひました。折角、お父さんが築き上げた生活も皆な亡びて行つて了ひました。お父さんの書齋には、埃やら塵やらが一杯にたまつて、蜘蛛の巣が網のやうにかゝつて居りました。此間は、ある人が来て、私の常に離さない琴をも無理やりに持つて行つて了ひました。」

「母さんは、何うした？」

「母さんも此間出たきり、もう歸つてまゐりません。母さんはある人と手を携へて町中を歩いてゐるといふ話です。私はその男の人を三三度見ました。」娘は不思議なフィツクルな笑をちよつと顔に見せて、「好い立派な男でした。役者のやうな男でした。お父さん、もう、私達は獨立しなければなりません。自分のことをしなければなりません。私は私の好んだ方へ行かうと存じます。私には、私の相手が澤山あるといふことを私は漸く此頃になつて知りました。お父さん、家なんか潰れたつて構ふことはありません。お父さんやお母さんの生活なんか壊れて了つたからとて、私の生活には何の影響もありはしません。私達の前には楽しいことや美しいことや悲しいことが澤山に澤山にあります。此間も手紙が参りました。」手紙を袂から出すやうな形をして、「今日も待つてゐて呉れる筈です。あの林の陰に、あの青草のしける美しい花の咲く林の陰に……。それでは、さやうなら。」

かう言つて、娘は體をこゝみ加減にして、主人の黙して坐つてゐる傍を掠めるやうに通つて出て行つた。

暫く沈黙が続いた。

と、また足音がして、さつき娘のやつて来た階梯を、十五位になる中學校の制服を着けた男の兒が此方へと上つて来た。大きい頭と瘦せた體とが矢張その不整な不健全な發育を示してゐた。

「お父さん！」

「ヤ、お前か。」

「お父さん、僕の家はもうなくなつて了ひました。僕は今日から伯父さんの家に行くことになりました。母さんも姉さんも皆な何處かに行つて了ひました。お父さん、僕は何うしたら好いでせう。……お父さんが曾て言つたやうに、自分で自分の生活を築き上げなければならぬのでせうか。僕はそれには餘りに小さい。僕はこれから種々なことを苦しまなければならぬ。いろいろのことをしなければならぬ。しかしお父さん、心配はして下さいませう。お父さんがゐなくつても、母さんがゐなくつても、僕は、僕は一人で……」急に聲を飲んで、「お父さん、あの時分は楽しかつた。お父さんは僕を活動だのボオルだのによくつれて行つて下すつた。お父さんや母さんや姉さんと一緒に御飯を食べた時分は賑かだつた。お父さんは、さうはお思ひになりませんか。」

主人の頭は次第に低れ、深い溜息は肩を揺かした。

『お父さん、お達者で。』

男の兒は直立して、禮をして、項を高くして、急いで向うに行つて了つた。

何か賑かな聲がすると思ふと、今度は十になるさげ髪の女の兒と八歳になるおかつばの女の兒とが、無邪氣に互に何か話しながら此方へとやつて來た。

『お父さんがゐた。お父さんがゐた。』

『お父さん！』

女の兒達は急いで主人の黙つて坐つてゐる前へと走り寄つた。末の幼い兒のおかつばの髪の亂れたのや、着物の褌の合はないのや、寒さうにさびしさうにしてゐるのが主人の眼に附いた。

大きい方の女の兒のなつかしげに父親の傍に寄つて行つたのに引かへて、小さな方の女の兒は、母親思ひの、父親を怖いと思ふ平生の習慣が除れぬらしく、姉の立つてゐる後ろに離れてさびしさうにして立つてゐた。

『母さんがゐない、母さんがゐないつて、この常ちやんが泣いてしやうがないのよ。常ちやんひとりよ。母さんがゐなくなつたつて泣くのは。常ちやんは弱蟲よ。でもね、父さん、此頃は泣かなくなつたわ。夜は、私と寝るわ。おとなしく寝るのよ。朝も泣かなくなつてよ。でも、ね、父さん、今度の家は狭くつて、小さくつて、何にもないの。お二階もないの。でも、好いわ。父さんさへ歸つて來て下され

ば——。さうすればまた賑かになるわ。そら、いつか常ちやんと、元ゐた光やと乳母車でお池に行つて、金魚を見たことがあつたわね。あの時分のやうに賑かになるわ。』

末の女の兒は黙つて父親の顔を唯見上げてゐた。

『常ちやん、お父さんがゐて嬉しいだらう。お父さんとお言ひなね。』

『お父さん。』

此時、主人の坐つてゐる背後から、靜かに影のやうに美しい女の姿が現はれて來た。女は端麗なすつきりした態度をして、長い白い衣の裾を曳いて、ちつと二人の幼い女の方を見た。長い髪は流るゝやうに背後に垂れた。

『お父さん、左様なら。』

『お父さん、左様なら。』

女の兒達は母親ならぬ女の顔を見ぬやうにして急いで彼方に行つて了つた。

『何か賑かだと思つたら、あんな子供が來てゐた。何ですか、あれは？』

『昔の影だ。昔の聲だ。その昔の影と昔の聲とが私の心の中に映つて反響して來たばかりだ。しかしそれが何にならう。』主人は靜かに立つて緩かに歩きながら『それが何にならう。昔の聲が蘇つて來たとて、何にならう。皆な過ぎ去つたことだ。夢のやうに過ぎ去つて了つたことだ。一度踏み入れた足はと

どめることの出来ない誰やらが言つたが、實際さうだ。考へて、「ちきだ、ちきだ、ちき消えて行つて了ふ。……あ、もう消えた。世界は二人きりだ。お前には何も彼も捧げた。」

『生命でも何でも？』

『生命でも何でも……』

女は手をひろけて主人を抱いた。ある不吉を示す樂の音は再ぶ緩かに聞えて來た。

九

『お前は何だ？』

静かに寄つて來た一つの形相は、あやしく笑ひながら近寄つて、「私は貴方の書齋の抽斗の底に長い年月を忍んで待つてゐた小さい罎です。私は時の來るのを待つて居ました。貴方のお呼びになるのを待つてゐました。今、貴方は私をお呼びになつた。」

『さうか、お前がああ小さな毒藥の罎か。』

形相は點頭いて見せた。

他の一つの同じ形をした形相は、つゞいて静かに寄つて來た。

『お前は——？』

『私は貴方の細君の服篋の抽斗の中に藏された、矢張、同じ小さな罎です。——私は朋輩の世に出るやうになつたのを喜んで、一緒に此處にやつて來たのです。しかし、私もやがては、この朋輩と同じやうに貴方の細君に呼ばれるに違ひないと思つてをります。そして朋輩のやうに私の持つた役目を果すのを喜んで待つてをります。』

『さうか。』

『私達朋輩は始め五つありました。それがのくりなく貴方の家に行けと命ぜられました。で、私達は出かけました。そしてその五つの中の三つは、貴方に、用がないと言はれて、裏の掃溜の中に捨てられて了ひました。しかし矢張、貴方には用があつたのでした。』

『さうか。』

主人は手を伸べて、「その白い藥をよこせ。」

最初の一つの形相は静かに近寄つて、それを主人に渡した。主人はそれを仰ぎ飲みながら、「これで私の事業は完成した。永久に行く道は開けた。大きな生命の潮流の中に入ることが出來た……」主人は次第に昏睡状態に入つて行つた。

再び其處に現はれた美しい女の顔には、得意らしい妖しい微笑が湛へられてゐた。

## をばさんの IMAGE

山寺は別に用事とてもないけれど、さうかと言つていつまでもぐづぐづと寝てはゐられない性分のをばさんは、いつも暗い中から目を覚ました。

飯を炊いて、たき落ちを十能に入れて、それを座敷の炬燵に入れる時分には、木坊の傍にある大きな鐘樓の夜明けの五時の鐘が、山の翠微を動かすやうにして高く聞えた。

と、をばさんの眼には、筒袖を着た丈の高い大きな男が、撞木の綱を長く引張つて、力を籠めて鐘を叩いてゐるさまが歴々と映つて見えた。鐘の音は一つ／＼餘韻を残して消えて行つた。暫くすると、

「おう寒い、寒い。」

かう言つて、表からその男は入つて来た。

「寒いね、今日は氷が張つた。まア、入つてお當り。」

「をばさん、いつも早いね。」

「目が覚めると寝てゐられない性分だから……」

「でも、をばさんが早く起きてゐて呉れるんで助かる。まだ、何處にも、火なんかありやしないから。」かう言つて、男は遠慮なしに炬燵に當つて、

「これからは、朝はたまらない……」

「本當だね。」

「これからは寒くなるからな、をばさん。それや、ひどい處ですよ、此處は——。一月頃になると七時位までは、撞木を握る手に覺えがない位だから。」

「さうかね、雪降りなんかには、大變だらうね。」

「雪はさうたんとは降らねえけれど。」

谷を越して来る朝日が前の障子に當る頃まで、をばさんと男とは炬燵に當りながら種々なことを話した。男はをばさんが里で長い間世話になつた老師の弟子の異腹の同胞で、その弟子といふのが、今では立身して、この山にすぐれた勢力を持つた幹部の一人になつてそこから二三町隔つた山懐に大きな立派な寺を持つてゐた。今度その弟子の弟子が山のある寺の住職になるにつけて、「をばさんに來てゐて貰へないだらうか。若いもので仕方がないから、是非、さうして貰ひたいんだが——」かう頼まれて、この



夏、をばさんは香の多い蜜柑などの出来る暖い海岸からこの山へと呼寄せられて来たのであつた。新たに住職になつた若い僧といふのも、矢張をばさんの世話になつた老師の許で大きくなつたやうな人で、老師は、「お前だつて、後で世話にならなければならぬんだから、今の中面倒を見て置いてやらなければいけない、」などとよくをばさんに言つたものだ。その若い住職は今輪番で、その近所の大師堂の方へ行つてゐた。

『大師堂では遅いかえ？』

『まだ中々。七時の鐘をつかなかつちや。』

『此頃はそれでもおとなしくしてゐるかえ？』

『うむ——』

などと言つて男は笑つた。

『昨夜はゐるかえ？』

『ゐたつけ。』

『困つて了ふよ』と言ふやうな顔をしたが、をばさんは黙つて二三日前のことを思ひ出してゐた。をばさんが其處で仕事をしてゐると、軽い小さい下駄の音がきこえて、誰か其處に來た氣勢がした。障子を明けると、色の生白い白粉をべた／＼つけた、一と目でそれとわかる女が立つてゐて、「清光院さんは

——』と訊いた。『大師堂に行つてゐますよ、』と言ふと、『さう——』と言つて顔も赧くせずに出て行つた。づう／＼しい女もあるもんだ。それに住職も住職だ。あんな女が何處が好いんだらう。あれほど師匠に心配をかけて置きながら、それでもまだ懲りないと見える。

こんなことを考へたが、すぐ止して、今度は田舎の話始めた。平野の裾の細長く山の中に入つて行つたやうなところにある町、石灰の出る町、蒟蒻の出来る町、生絲の盛んに賣買される町、さういふ町で、このをばさんも師匠も鐘を撞く男も若い住職も大きくなつた。をばさんの世話になつた老師の寺は、その町の裏の丘の上にあつた。遠くからでも一目にそれとわかるやうに、杉の森が黒くこんもりとその寺の背後を取巻いてゐた。

こんな處にゐるよりも、田舎の方が面白いことも旨いこともあるだらうなどをばさんは言つた。男は唯にや／＼笑つてゐた。やがて男は、をばさんの淹れて呉れた香りの高い番茶を一杯飲んだが、柱にかゝつてゐる時計を見て、『もう時間だ。忘れるとまた叱られらア。』かう言つて立上る支度をした。

『さう言へば、昨日は來ないと思つたら、寝過したね。どうも音がしないと思つてゐたら、六時が鳴つたよ。』

『は、は、』

『叱られたらう？』

「なアに、五時ののは、滅多に氣が附くものもねえがね。晝のは忘れたぢやすまねえからね。」

「それはさうだともさ。おつとめだもの……」

「夜あすびがすぎると、つい寢込んでちやつてね。は、は、は。こんなことを言ひながらその男は出て行つた。」

をばさんが裁縫にかゝりかけると、隣の寺の婆さんがやつて来たので、又一しきり炬燵で話した。婆さんは、今年三十になる娘と七歳になる孫と三人で、その寺の老僧の世話をしてゐた。娘は一日僅の賃金で毎日朝早くから箒を持って山内の掃除に出かけた。婆さんは小屋で、山から刈つて来た萱を編んで、一俵三錢で炭俵をつくつた。『年老つたでな、遠くまで山の中に萱を刈に行くのは大變だけでもな……でも遊んでもゐられねえし。煙草錢まで娘に出して貰つては氣の毒だでな、』などと言つて、鞆の出来た手をごそくと揉んで見せた。娘の話が出ると、『もう婿どんにはこりくしたぜい……お前さん、つい此間まで、内所でやつて来ちや、せびつて行くぢやねえか。縁も切れた他人だからつて喧しく言ふんだけどもな……娘が人が好いからな。本當に困るんだよ、』などと言つて話した。婆さんは、夜は孫の女の兒を抱いて寢た。

『でも、和尚さんが少しは面倒を見て呉れるだらう？』

などと人が訊くと、『何うして！ お前。米でも何でも別にしてるんだから、何してくれるもんかね。』

煙草錢さへ滅多に呉れやしねえ。婆ア、婆アなんて言ふけども、本當に内を借りてるばかりだから、何一つ世話になんかなりやしななんだから。』

『そんなかね。』

『さうともな……。家の和尚の吝嗇は、だから山でも評判だな。丸つきりつき合ひつて言ふことはしねえんだから。だから、誰だつて人一人来やしねえ。』

『さむしくはねえのかね。』

『ちつとアさびしかんべいよ。だから、お経ばかり讀んでらア。』

その讀經——隣の老僧の讀經を、をばさんはいつも朝早くから耳にした。三時の時計が鳴ると、やがて鉦の音がして、靜かな靜かな讀經の聲が始まるのが常であつた。『でもな、朝のおつとめをするのは、お前さんとこばかりだよ。』

『昔から氣狂坊主つて評判だな、』こんなことを言つて、婆さんは、その老僧が山の中にある時、不思議な奇蹟を行つた話などをした。『今ぢや、もうな、附かねえけども、その時分にやな、あの坊主がお經を讀むと、頭の後のところに五色の絲筋が附くつて言はれたもんだアな。お経べい讀んで、それで僧正さまにまでなつたんだんべい。』かう言つて笑つて、『矢張、女だアな、女に心を寄せちや、佛様も愛想をつかさつしやらアな。十年ばかり前に、何でもこつそり女を困つて置いてから、その絲筋がつかなくな』

つたつていふ話だつけ。」

『何うしたね。其女は？』

『何うしたか？ もう女でもなかんべい。もうぢき七十五だ。』

『それぢや門跡さまより上だね？』

『上だとも……。門跡さまは、まだ七十になつたか、なんねえか位だんべ……。でもなア感心なは、門跡さまだ。あの人ばかりだんべい。本當に女つ子知らねえのは。』

『さうかね。』

『だから、今度お山で皆な噪衆を持つやうになるつていふ話には、門跡さまばかりは困つていらしやるつて云ふこんだ……。お寺もなア、上さんが出来ちやぢきおしめを干すやうになるだんべい。』

『矢張、時世で、これも仕方がないよ。誰でも上さんは持ちたいんだから……。却つて表向きに持つ方が好いかも知れないんだよ。』をばさんはこんなことを言つて茶を勧めた。

三年になつても、その時のことは、をばさんの頭から離れなかつた。をばさんは今でも一日の中に何遍となくそれを思ひ出した。

『何うして、あゝいふ氣になつたんだらう？』

かう言つて考へては、をばさんはいつも運んでゐた針を止めた。窓には暖かい冬の日が射して、庭の

樹の枝や、その枝に戯れてゐる小鳥の影などが靜かに映つた。寒い冬の近いのを知らせる谷の音が凄しくあたりに響いて聞えた。

『死んだんぢやない。何處かにゐるに相違ない……。あの易者も確かに生きてゐると言つた……。』考へて『生きてゐるとして、何處に生きてゐるだらう？ 何んな風にして生きてゐるだらう。お寺には無論ゐない。お寺にゐれば、あれほどさがしたんだから、わからない筈はない。還俗して了つたに相違ない。それにしても、還俗して、何をしてゐることか、お寺でこそ、立派な和尚さんでゐられるけれど、俗人になつては、とても立派に暮らしてゐられるとは思はれない。國には無論行きはしない。生れ故郷にも行つた跡もない。世話をする人もなく、この寒いのに困つてゐるやしないか。』かう思ひ出すと、想像は想像へと長く續いた。繰返しても、繰返しても、際限がない。

初めの中は、夢を見て仕方がなかつた。ある村の役場の隅に大勢人がゐて、その隅の方に小さくなつてゐる老人がゐた。ふと見ると、それは老師であつた。「こんなところにあるんですか。ちつとも知らなかつた。さうなら、さうと何故早く知らせて下さらなかつた。」かう言つて、をばさんが袖に纏つて泣き寄ると、老師は濟まなかつたといふやうにしてにつこり笑つた。そして夢が覺めた。しかしその笑顔はいつまでもをばさんの頭について離れなかつた。ある時はもう死んで了つてゐる夢を見た。「私はもう死んだ者だから……。思ひを残してはいけない。そのため、ちやんと、あとのことを心配して置いた。困つた事

があつたら明淨院に相談するが好い。」かう言つてすうと向うへ行つた。

しかし、死んだ者は口を利かないさうだ。をばさんはかう思つて、思ひ附いたやうにまた一針二針、針を動かして見て、「何うしてあんな氣になつたか。」

ふと奥の二階の雨戸の明く音がした。もう十時だ。起きたと見える。かう思つてをばさんは立ち上つた。一月ほど前から、東京の客が三人づれで来て、月五圓で、奥の二階と下とを貸した。萬事自炊ですると言つて、夏の時に使ふ炊事場に水の来るやうにして、鍋や組板や桶鉢などを貸してやつた。下の座敷にゐる方の客は早起で、をばさんが起きる時分には、いつもきまつて雨戸を明けた。で、をばさんは一番先に火を持つて行つてやつて、御飯とお汁とを拵へてやるやうにしてゐたのが、それが十日ほどゐて歸つて了ふと、二階の方の一人も山が寒くなつたと云つて、月の末に歸つて、あとには丈の低い色の白い客がひとり残つて、いつも夜更しをしては朝は遅くまで寝てゐた。

二階には、大きな机の上に、原稿紙だの洋書だのを一杯にひろけて、電燈を室の真中から机の上に引張つて、一生懸命になつていつも筆を走らして物を書いてゐた。をばさんとは滅多に口をきいたことはなかつた。

その客はトルストイだの、ドストイフスキーだの、モウバッサンだのを讀むやうな若い人で、かねてやつてゐた外國の小説の翻譯を完成する爲めに都會の煩累を避けて此處にやつて來たのであつた。かれ

は原書と英譯と下翻譯とを其處に並べて、難かしいところに出會す度に、字書を引いたり、溜息を吐いたり、萬年筆を傍に置いてちつと物を考へるやうな顔をしたり、退屈して障子のガラス越しに外に聳えた山の翠微を長い間眺めてゐたりした。そして新しい文藝にあくがれる心は、をり／＼潮のやうに、かれの胸に押寄せて來た。しかし、をばさんにはそんなことは少しもわからなかつた。をばさんは唯沈黙して、よくも倦きずに書を読んだり物を書いたりする若い人を見た。

その若い人は、朝、雨戸を明けると、長いドテラを着たまゝ、下に下りて來て、湯殿に入る前に、その長いドテラを脱いで、そして、何んな寒い朝でも、冷めたい手の切れるやうな水で半分胆になつて冷水摩擦をやるのが例であつた。「寒いのによくまア」とをばさんは思つた。しかしつひぞ言葉をかけたことはなかつた。わかい客は「労働と沈黙」といふやうなことを書いて、「今日は一日誰とも口をきかなかつた。實際の沈黙だ。」などと記した。

飯櫃と汁の鍋とを二階に運んで來てから、裁縫を前にしたをばさんの Vision は再び續いた。

……老師は言つた。

「ね、さうして呉れ、頼むから、さうして呉れ、今度向うの寺に入るにつけては、何うしても、さうしなければ具合がわるいから。あの寺は固い難かしい寺で、いままでのやうなことがあるのが人に知れては、とてもつとめてゐられないから。」

「でも、此處に私だけ残つてゐれば好いぢやありませんか。」

「さうは行かない。向うの寺に入る以上は、さうは行かない。すぐ噂に立てられるから、此方の方のこともすぐわかるから。こゝに少しばかりだが、金があるから、これを持つて國に行つてゐて呉れ。その中に、また旨く話をつけるやうにするから。」

「でも、今までかうしてお世話になつて来て……。今更……。そんな水臭い……。これまで何んなに苦勞をして、日蔭の身を耐へて来たとお思ひですか。」

「それはよく知つてゐる。よくわかつてゐる。でもこの際困るのだから。」

「では、何故そんな堅い立派なお寺にお入りになるのですか。此處で安樂に暮して行けば、それで澤山ではありませんか。何故、そんなお寺に入るのをお断りなされないのでですか。」

をばさんは泣いて口説いた。をばさんは自分ながら老師と其身との縁を不思議にせずには居られなかつた。老師は六十五を過ぎてゐた。それに拘らず、をばさんはまだ五十をいくらかも出ては居らなかつた。をばさんが老師に初めて侍したのは、二十一の時で、初めは自からも厭だと思ひ、人に後指さされるのを恐れたが、後には老師の濃い情に體も魂も引寄せられるやうになつて行つた。公にすることの出来ないだけそれだけ一層秘密の色彩の濃い氣分も加はつて行つてゐた。で、老師の行く寺から寺へとをばさんは後を追つて行つた。ある寺では寺に入れられないので、一里ほど離れた町のある家の二階の間を

借りて住んだ。をばさんは僧侶と女との關係のむづかしかつたその時代のことなどを考へた。

「まア、さう泣かずに置いて呉れ。あの寺に行けるやうになつたのは、私の立身ぢや。私は田舎坊主で一生は終りたくない。弟子の明淨院でさへ、今ではあの名高い山の寺の住職となつた。それに、今度のことについては、あれも骨を折つて呉れた。師匠の一生の花の咲いたやうに喜んでゐて呉れた。……だから、お前もそこを聞きわけて、一時、私の言ふ通りになつて呉れ。決して悪く思ふのではない。思ひたくつても思はれないのぢや。別れて呉れとか何とか言ふのではないのぢや。一時、ほんの一時、國に歸つてゐて呉れと言ふのぢや。」

かう言ふのを、をばさんはそれでもとは言ふことが出来なかつた。老師の立身のさまたけをするには忍びなかつた。で、をばさんは一時國の方へ歸つて行くことになつた。

その時の寺は、つい此間まで、をばさんの住んでゐた町にあつた。それは丁度靜かな富んだ町の外れにあるやうな寺で、大通りから山門が高く立派に見上げられてゐた。鋪石道の兩側には、高野槇だの檜だの松だのが栽ゑてあつて、寺男がいつもそこを綺麗に掃除した。本堂は明るくかゝやいて、立派な金色の本尊がいつも寂然として立つてゐた。明淨院も、今の若い住職も、皆な其處で大きくなつたのだ。それに町では、皆なをばさんのことを知つてゐて、寺に入れても差支なかつたのではあつたけれども、それでも老師は世を憚つて、別に一軒、町に家を借りてをばさんを置いた。をばさんはいつも其處から寺

へと出かけて行つた。

三面を丘で囲まれて、一面遠く海の遠鳴を聞くやうな町には、南國の暖かな氣分が漲るやうに行き渡つて、娘達の頬も紅るに、着物の裾や襟もはなやかに、笑聲が家から家へと漂つて、冬は蜜柑の黄い實が谷といふ谷を彩つた。ある朝は海から來る水蒸氣があたりを籠めて、朝日の薄いかゝやきの中に寺の山門が繪か何ぞのやうに見えた。夏は綺麗に煙草の畑がつゝいて、農夫達がせつせと蟲を捜してゐる傍に專賣局の役人が白い洋服姿で立つて話をしてゐるのが見えた。鮪、鯛、鯉、中でも秋の小鯨が旨かつた。『小鯨よしかな。』身輕な、いなせな若い香尾がいつも海の方から驅けるやうにしてやつて來ると、家々の若い上さん達は、喜んでそれを呼びとめて買つた。

煙草の葉の上納期の賑かさなども、をばさんの眼の前にあつた。夕方になると、工場の門からは娘達がぞろ／＼と笑ひさゝめきながら出て來た。何處の家でも煙草の葉を揃へるのに忙しかつた。『をばさん遊んでゐるなら、少し手傳つて下さいな。』こんなことを言つて、近所の娘や上さん達は無理にをばさんを伴れ出して行つた。やがて賑やかな富んだ年の暮が來た。婚禮が其處にも此處にもあつた。をばさんは夜毎に寺の裏門から忍んで入つて行く自分を見た。あの時分はまだ若かつた。二十五六であつた。をばさんは老師と自分との縁を不思議にせずには居られなかつた。世の中に女は多いであらう。人に知れない歡樂に身も世も忘れた女も澤山にあるであらう。しかし自分ほどすぐれた異つた歡樂を恣

にしたものはあるであらうか。老師に侍する以前に、をばさんは既に一度ある立派な農家に嫁いで男を知つてゐたのであるが、一度老師に侍してからは、をばさんは他の男を思ふ暇もないほど深い／＼情と歡樂とに身も心も溺らせて了つたのであつた。祕密から來る歡樂、それ以上に男の情は深くをばさんの魂に染みた。女に餓ゑた畸形じみた情、飽まで女の方に偏つて來る濃い心、女に對して起した空想じみた所業、さういふものは到底この世の普通の男には望む事が出來ないものであつた。あけ方近く、をばさんが其處から出て來ると、今の明淨院は、其時分はまだ小僧で、眠むさうな不思議さうな眼をして、をばさんの歸つて行く姿を凝と見送つた。その頃はをばさんは、髪を銀杏返しに結つて、派手な襟をして、曉の空氣の中にぬけ出すやうなさまをして靜かに裏道を通つて家の方へと歸つて來た。夏は道の畔の池の中に紅い白い蓮の花の美しく咲いてゐるのを見たことなどもあつた。

あの時分は老師はまだ三十八九だつた。まだ若かつた。緋の僧衣などを着て、町を歩くと、人は皆振返つて見た。『それにしても、何故、あんな心持を起したのか。私のことも考へては呉れなかつたのか。』かう思ふと、すぐあとから、『それにしても、生きてゐるなら、何うしてゐるだらう。何處にゐるだらう。何んなにして暮してゐるだらう。寒くなるのに、誰が着物を縫つてやつてゐるのだらう。』それからそれへと際限なく集つて來る想像に堪へかねて、をばさんはほつと溜息を吐いた。障子に映つた梅の枝は、いつか消えて、日ざしが次第に午近くなつて行つてゐた。をばさんは縫ひかけた綿入の針をとめて、そ

のまゝ立つて茶の間の方へ行つた。

それは暖かな春のやうな日であつた。老師は僅かばかりの休暇を取つて、赴任して行つた大きな寺から海岸の方へと歸つて來てゐた。餘り心勞して、體が少しわるいから、温泉にでも出かけて行くつもりだなどと言つてゐた。をばさんは一度國に歸つたけれど、何うしても老師のことが忘れられず、一度は老師のゐる寺にこつそり訪ねて行き、そこから歸ると、再び舊知の多い暖かい海岸近い町へと身を落着けた。寺は、二番目の光順といふ弟子が嗣いでゐた。

老師は肥つて好い血色をして、莞爾してゐた。『どうも、忙しくつて、本當にこまつた。一刻もやすむ暇もないぢやでな。大きな寺に入れば、入つただけの苦勞があるぢや。立身するものは恐ろしいもんぢやな、』などと云つてゐた。別に變つたこともなかつた。いつものやうに、好きな酒に酔つて夜は早くから寝た。

『本當に、年を取つてゐるんだから、無理をしては仕方がありませんよ。』

かうをばさんが言ふと、

『何アに、大丈夫ぢや。』

『でもね、何しろ年が年だから……さういふ忙しい心配な寺にゐては、何うしても體に利きますよ……酒も前と比べては弱くなりましたよ。』

『さうかな、さうでもない積りぢやが——』かう言つたが、笑つて『でもな、いつ無常の風がさそつて來るかわからないからな。後生だけは片時も忘れてはならんよ。お前だつて、私だつて、如來様がお迎ひに來ればいつでも行かなければやならないからな。』

『それはさうですとも……。私も後生は片時も忘れません。』

と、老師は笑ひながら、『でもな、私はこれでも一生佛に盡して來た積りぢや。國の方の寺も好くなつたし、明淨院は立派な和尚になつたし、光順もまアこの寺のあとがつけるやうになつたし、學校に行つてゐる奴も、來年は山に歸れるつて言ふから、もう何も心配はないぢや。唯お前ばかりぢや。子供がないから、淋しいなア。』

『なアに、私なんか何でもありませんよ。誰でも世話して呉れますから。』

『まア、順當に行けば、わしが死んで、お前が残るのが當り前だが、その時は、明淨院も世話をして呉れるだらうし、學校に行つてゐる奴も、來年か來々年住職に直れば、お前一人位世話するのは、何でもないからな。そこは安心ぢや。』

『だから、もつと樂な寺に入つて、二人でしづかに暮すやうにするのが一番ですよ。もう年を取つたんだから。』

かうをばさんが言ふと、老師はやゝ暫し考へてゐたが、『でも、な、私は佛様に捧げた身ぢや。俗人の

やうなことは出来ん。田舎寺で、お前と一緒に暮すやうなことは出来んな。」

かう言つて老師は黙つた。をばさんもその後をつまけなかつた。

今日行かうと言ふのを、一日延して、その翌日立つことにした。熱海の方に行つて一周りも湯治して来る積りだと老師は言つてゐた。誰もその言葉を疑ふものはなかつた。光順もをばさんと一緒になつて、湯治に行つて不自由のない様に種々とその支度を整へてやつた。『なアに、三界に家なしぢや、何にも入りはせん、』などと言つてはゐるけれど、それでもをばさんはちやんと暖かい着替から襟巻から齒みがき楊枝までも鞆の中に入れてやつた。

『ぢや行つて来るぞな。』

いつも着る黒の被布を着て、下に白を重ねて着てゐた。山門のところまで出て行くのを、をばさんは見送つてゐたが、暫くしてから又戻つて来て、『忘れものをした。』かう言つて自分の居間に入つて三十分ほど何かさがし物をしてゐた。再び出て行つた時には、何も言はなかつた。後も振返つて見なかつた。一日々々と経つた。初めは別にあやしくも思つてゐなかつた。熱海にゐることとばかり思つてゐた。それにしては、手紙が来ないが、何うしたんだらう位に思つてゐた。また日は日と経つた。向うの寺からは、日毎に歸任を促して来た。疑惑は遂に人々の胸に萌した。明淨院が山からやつて来て、熱海の方へ出かけて行つたりする時分には、老師の姿はもう何處にも見出されなかつた。やがて大騒ぎは始まつ

た。凡そ手蔓のあるところへは、遠くまで人を出して捜させた。しかし、竟にくゝ老師の行方は知れなかつた。

何故老師は跡を晦したか。そこには何か深い理由がなければならぬ。しかし、その理由は明淨院にも光順にも、をばさんにもわからなかつた。赴任した寺の方を調べて見ても、それらしい原因は少しもなかつた。不思議なことがあるものだと思つた。

出る時のさまが繰返し、繰返しをばさんの口から話された。『今考へて見ればさういふ積りでゐたんですね。それは確かにさうなんです。去年あたりから、さういふことを考へてゐたのかも知れませんが。金は何でも出る時百兩や二百兩は持つてゐたでせう。忘れ物をしたと言つて、一度出かけたのをまた歸つて来ましたが、その時の顔は、いつもに似合はぬ青い思ひ詰めたやうな顔をしてゐました。居間で捜し物をしてゐるところに、私がふと入つて行くと、持つてゐた手紙のやうなものをちよつと隠すやうな風をして、私の顔を見ました。しかし、それが別れだとは夢にも知らなかつた。』かう云つてをばさんは泣いた。時は過ぎて行つて、不思議は只不思議として、やがて人々の口にも上らなくなつて行つた。明淨院は、『何うも仕方がない。縁が熟すれば今にわかる時が来るだらう。あまり心配せずに置きなさい。をばさんに苦勞をかけるやうなことはしないから、』と言つて慰めた。をばさんの涙は乾く時もなかつた。をばさんは老師が住んだ跟跡の残つてゐる寺でさびしく暮した。朝、目が覺めるときから、夜床に入



つて深い眠りに落ちるまで、老師の Image は常にをばさんの目の前を往來した。居間、座敷、すべて其處には老師の日夕手に觸れたものばかりが残つてゐた。机、硯、筆架、座布團、拂子、床の間にかけて文珠の幅、押入の中にあるをばさんが拵へてやつた絹布の夜着、九谷焼の大きな茶碗、常に愛玩した徳利と盃、何を見ても、老師の面影と追憶とが生きて残つてゐないものはなかつた。其時々<sup>々</sup>の出來事、歡樂と悲哀と絶望とは、常に種々なものに絡み着き纏れ着いてゐるのをばさんは見た。

をばさんは黙つて毎日々々さがし物をした。反古、日記、手紙、さういふもの、中から、その不思議の謎を解かすには置かないといふやうな氣分で、をばさんは寺に残つたあらゆるものを展けて見た。机の抽斗、押入の奥、後には本堂の方まで出かけて行つてさがした。時には本尊の前に行つて坐つて、長い間、手を合せて祈念をしたりしてゐるのをばさんの姿を光順は見た。

をばさんはさびしく暮した。以前のやうな快活な賑やかな氣分はなくなつて、黙つて物を思つてゐるやうなことが多かつた。體も瘦せ、顔色も艶を失つた。今まで身嗜みを忘れたこと<sup>も</sup>なかつたをばさんも、此頃ではもう髪も結はなければ、鏡も手にしなくなつた。着物も着更へようともしなかつた。何うしていらつしやるだらうね。何處にいらつしやるだらうね。『夜など、長火鉢の前で、をばさんは光順に話しかけた。』

「おア。」

「生きてゐるとすると、何か仕事をしてゐるでせうが——、持つて行つた金だつてさういつまでも残つてゐる筈はないから、何かしてゐるに相違ないが、何をしてゐるでせうね。」

「おア。」

「生れ故郷にでも歸つてゐやしないでせうかね。」

「國に歸つてゐれば、すぐわかるわけです。」

「學問もあるし、手も旨いしするから、困るやうなことはないだらうけれども、それでも此處にゐた時や、向うの寺にゐた時分のやうに、皆なに尊敬されて、老師様、老師様と立てられてゐるやうなわけには行かないだらうから。』かう言つて考へて、『それにしても、何故さういふ樂な大名のやうな境遇を捨て、身を隠しなどしたのだらうね。何うしてもわからない。老師様の心がわからない。』

「實際、不思議ですよ。」

「それとも、私が煩さかつたのかしら。』をばさんは其處に行くと、いつも急に暗い壁にでも打突つた様に言葉をとめて黙つて了ふのが常であつた。』さうかしら、さうかしら。』かうをばさんは繰返して考へた。』

「そんなことはないでせう。』

「そんなことはないだらうと思ふだけだ……。けども、一度、私が向うのお寺にこつそり行つた時には、老師様は非常に迷惑の様子だつた。あれほど言つて置いたのに、何故來たといふ顔をなさつた。

何かそのために、あのお寺にゐられなくなるやうなことがあつたのではないかしら。』

『そんなことはないでせう。』

かう光順は強く打消した。

實際、明淨院が調べたところに由つても、さうした話や形跡は少しもなかつた。向うの寺でも好い老師を失つたことを不思議にし且つ惜しんでゐた。

ある時をばさんは言つた。

『それにしても、誰か世話をしてゐる人があるでせうか。』

『さア。』

『あるかも知れない。私に代つて、世話をしてゐる人があるかも知れない。』

『そんなことはないでせう。』

『兎に角、かういふことだけは確かです。今度家出をするやうな心をお起しになつたのは、向うの寺に行つたためです。それだけは本當だと私は何うしても思ふ。あの寺に祕密があるのです。それだけは確かです。』

『さうかも知れないけども、何うもわからない。』かう光順は打消した。

一度訪ねて行つた其寺の光景が、をり／＼をばさんの眼の前に浮んで見えた。その時はさびしい田舎

の停車場で下りて、そこで俵を雇つて、長い／＼路ををばさんはその寺の方へと志して行つた。光丸様と言へば、其處等でも音にきこえた流行佛で、その靈驗のあらたかなのは、一國中誰も知らないものはない位であつた。信徒は遠くから常に陸續として押かけて行つた。參籠の日などは、附近常に立錫の地がないといふほどの賑かさを呈した。それに、參詣者はそこに行つて祈禱をこめて、密教の尊い護摩を焚いて貰ふのを例にしてゐた。

停車場から七里も隔つた山の中で、そこに行くには、ひろいさびしい野原を通つたり、街道に外れた荒れた田舎町を横ぎつたり、丘から丘へと續く路を越えて行つたりしなければならなかつた。それは丁度梅雨の上つた頃で、緑は緑に續き、若葉は若葉に續いた。日影は晴れやかに四邊に照つた。

をばさんはやがて別世界のやうに前に展げられた寺、杉森、町、人家の簇りを驚いたやうな心を抱いて見てゐる自分を見た。町の入口の大きな旅館に俵を留めて、やがて二階の一間に通つて行く自分を見た。其處に老師様がゐると思ふと、何とも言はれない嬉しさで、胸が躍つて仕方がなかつた自分を見た。をばさんは遅い午飯をすますとすぐ、高い石段を上つて、大きな山門をくゞつて入つて行つた。そして立派な庫裡の方から老師の安否を聞いた。

立派な廣い十疊の座敷、高い檜の一枚板の天井、大きく龍を描いた金屏風、厚いふつくりとした綾緞の座布団、そこに綺麗な小僧が桐火桶を運んで来て、長い／＼間をばさんを待たせた。

暫くして靜かに紫の衣をひるがへして入つて来た老師の尊かつたこと、美しかつたこと、見事であつたこと、嚴かであつたことなどを、をばさんは續いて繰返した。それが長い間自分が世話をした同じ老師であるとはをばさんには思はれなかつた。をばさんは唯頭の俛るゝのを覺えるばかりであつた。

期待して来た希望は、すべて全く遂げられなかつた自分のをばさんは見た。それほどそこは堅いむづかしい山であつた。をばさんは老師の親戚の一人として取扱はれて、丁寧な饗應やら、深切な案内やらを受けたが、しかもその夜は旅館に歸つてひとりさびしく寝なければならなかつた。老師とは靜かな積る物語をすらすらすることが出来なかつた。

そしてそのあくる朝は、また俵に乗つて昨日通つた長い道で停車場の方へと戻つて来た。あとでそのことを聞き知つたらしい明淨院は、それとは言はなかつたけれど「困つたことをして呉れた」といふやうな風ををばさんに見せた。

その堅いむづかしい山、その山には何んな秘密があるか知れなかつた。達つてそこに望んで行つた心は？ 私と別れるやうなことをしてまでもそこに行かうとした心は？ 突然そこから歸つて来て姿をかくした老師の心は？

其處まで行くと、をばさんはいつも赫となつた。欺かれたのではないか。初めからさういふ決心がついて私とわかれる手段を取つたのではないか。何處か其處らで人知れず楽しく暮してゐるのではないか。

さう思ふと、何うしてもその秘密の糸口を捜し出さずには置かれないうやうな心持になつた。

をばさんは裁縫の手を留めて、その老師のゐなくなつた海岸近い町の寺から、この山の中に来たことを思ひめぐらした。初めはめづらしいと思つた殿堂も、寺も、谷川の流も、いつか興味を惹かなくなつて、此頃ではさびしい寒い山の中に變つて行くのををばさんは見た。心にはいかな日にも思ひ出さないことはないけれども、此處には老師の追憶の種となるやうなものは何物もなかつた。本堂もなく庫裡もないやうな寺、あけても暮れても水の音ばかり聞える寺、新しい住職は大師堂の方に行つたきりで滅多には家にも寄りつかぬやうな寺、周圍にゐる女達も田舎染みて、灰色の顔をして、女に似けないやうな口をきく寺、さういふ處に住むといふことの佗しさに、をばさんは段々堪へられなくなつて行つてゐた。

豆腐、油揚、芋の子、御馳走と言へば、硬い太い蕎麥切位で、肴屋も滅多にはやつて来ないやうなところで、をばさんは終日長く鯨だの鮪だの鯛だのを想像した。蜜柑の黄く色附いた谷々を想像した。丘と丘の間から廣く豫想せられる海を想像した。

奥の二階を借りてゐた東京の客の許には、此頃新たにまた一人、客がやつて来た。その客は若い色の白い方の一人とは違つて、年をとつてゐるだけに話でも態度でも碎けてゐて、出入りに聲をかけた口をきいたりしたが、寒い朝などには、をばさんの拵へた炬燵に来てあつて話をすることなどもあつた。

「さうですか。今まであそこにいらつしたんですか。あそこは、暖かい、好いところだ。あそこなら

肴も才分にある。あそこから此處に冬籠りでは堪らない、」などとその客の言ふのにつれて、をばさんはある時つい話すともなくその老師の一伍一什を話してきかせた。

「何うも、しかしをかしいですね。何かわけがありさうな話だ。」かう言つて其客は考へて、「かけに女か何かあるんぢやないですか。」

「さうも思ふんですけれども……年が年ですから。」

「それもさうですね。」

かう言つてまた考へて、「前に、さういふことはありはしませんか。五年とか六年とか前に、内所で逢つてゐたといふやうな女がありやしませんか。」

「そんなことはつひぞなかつたんですがね。」

「不思議ですね……しかしわからない。ことによると、その光丸様とか言ふ寺の方に、何か秘密があるのかも知れませんよ。」

「こんなことを客は言つた。」

しかしこの二人の客も長く寺に留つてはゐなかつた。「寒いですな。これぢやとても堪らない。もう歸りだ、歸りだ、」などと言つてゐたが、ある日、そこくくに始末をして、山から停車場の方へと仲を急がせた。

山は次第に寒くなりつゝあつた。最後まで残つた梅もどきの赤い實も、いつかすつかり落ちて、霜が毎朝寺の屋根の瓦を白くした。手水鉢には叩いても割れないやうな厚い氷が張つた。

さびしい寺に一人ゐるをばさんは、をりくゝ目の縁を赤くなどしてゐた。をばさんはつくづくひとり身の頼りなさを感じた。通り一遍の明浄院の世話では、をばさんは満足してゐられなかつた。それに老師がお前の後の爲めにと言つて面倒を見て置いて呉れた新しい住職も、此頃のやうにかまひつけて呉れなくては、とてもその世話になる氣にもなれなかつた。をばさんには何うしても老師がわすれ兼ねた。草をわけても捜したいといふ氣がをりくゝ起つた。

鐘を撞く男は言つた。

「をばさん、歸るんだつてな。」

「寒くつて仕方がないから、暖かい方へ行つて来ようと思つて……」

「それが好いよ。住み馴れないぢや、とても此處にはゐられないや。それは寒い何のつてお話にも何にもなりやしないんだから。また夏になつたら来るさ。」

「さうしようと思つて……」

「その代り、をばさんがゐなくなつちや、寒いな。朝、炬燵に當て、貰ふ家がなくなつて了ふでな。」

「何處かあるだらう。」

「無えや。」

ふと言葉を改へて、「昨夜もさわざだつたぜ。大師堂がお師匠の貯金を引張り出して、三人づれで町へ行つて、太鼓を打たせたり何かして大騒ぎをやつたんだとさ。師匠が大怒りさ。貴様のやうな奴は目通りは叶はねえつて言つてゐたつけ。」

「いつやつたんだえ？」

「一昨日の晩のことだ。光明院と町の眞光寺と三人でやつたんだとよ。呆れたもんさ。」

「だから、早く上さんを持たせねえぢやしやうがないよ。」

「お寺も俗人もねえやな。今は——」

「來年來れや、お寺にや、もう一人づつ上さんがゐるだらうよ。」

「本當だ……」

「今はお寺も樂になつた。上さんでも何でも幅で持てるんだから。」かう言つたをばさんは、自分達の長い間の戀の苦しみと祕密の歡樂とを思ひ出してゐた。

暖かい海岸近い町に歸つて、再び多い昔の追憶の中に生活しようとする前に、をばさんは、もう一度

光丸様に行つて、老師の噂やら面影やら、出来ることなら、その不思議な家出の祕密の糸口を探りたいと思つた。しかしをばさんはそれを誰にも話さなかつた。

ちよつと知人の許に寄つて行くからと言つて、宇都宮までの切符を山の停車場で買つたをばさんは、そこで下りて、海岸の町に行く汽車とは反対の方向に行く汽車の來るのを待つて乗つた。

矢張、前に來た時と同じさびしい野原を通つてをばさんは行つた。夏と冬との違ひだけで、あたりのさまの昔に變らないのを見るにつけても、をばさんは夥しく變つて行つた自分の境遇を考へずには居られなかつた。その時の樂しさと得意さとに引較べて、何といふ淋しさであらう。何といふ悲しい辛い境遇であらう。をばさんは俵の上でをり／＼袖を顔に當てた。

落葉はがさこそと風につれて路傍に散つた。遠くに村があり丘があり、その丘を廻つて路は次第に向うへと通じた。枯れた白い薄の穂には、午後の日がさびしく照り、百姓達の遅い收穫の車は、田圃間の路から街道へと出て行つた。振返ると、國境の山の雪は白く日に輝いてゐた。

俵に揺られながらも、老師の Image は絶えずをばさんの眼の前を往來した。緋の衣を着た時分の若い姿、白の重ねを着てやさしげに笑つた長火鉢の前の姿、大勢の僧を従へて高い聲で讀經した立派な姿、さういふものが種々な事象と事件と一緒になつて、絡みつくやうに絶えずをばさんの胸を悩ました。またしてもをばさんは考へた。「それにしても、今、何うして何處にゐるだらう。私がかうしてこの道を通

つて行つてゐるなどは夢にも知らないだらう。かうして三年前のことも忘れかねて、絶えずその面影にあくがれてゐることなども知らないだらう。……それも逢つて話をする時が来るのなら好いけれど、……それも出来ない。……もう逢ふことも出来ない……。」

陰のものとしてこの自分があつたといふことが、老師の家出と密接な関係を持つてゐるといふことは前にも度々考へられたが、行く／＼をばさんはその考の事實であることを思はずには居られないやうな気がした。

佛の罰と言ふことを老師は絶えず氣に懸けて居た。愛慾の爲めとは言へ、佛に仕へる僧侶の身でありながら、煩惱と歡樂とに捉へられたのを常に悲しみ苦しんでゐた。老師はよく木尊の前に行つて手を合せて讀經した。「私の爲めの家出だ。それに違ひない。」かう思ふと、をばさんはかうしてその面影を追つてばかりゐられないやうな気がした。

しんとした杉の並木の中から大きな寺の伽藍の屋根の見えた時には、をばさんは思はず手を合せて祈念した。後生を忘れてはならないと言つた老師の言葉は、その時新しい力でをばさんの胸に一杯になつて押寄せて來た。

をばさんの頬には涙が流れた。

今まで悟らざるにゐた無限の罪障が、繪巻物のやうになつて、今しもはつきりとをばさんの前に現はれて

見えた。

やがて以前來た時に世話になつた旅館に宿を取つたをばさんは、老師の遺物の珠数を手にかけたまま、茶も飲まずにすぐ其處を出て、石段を登つて、山門を潜つて本堂の方へ行つた。

境内はしんとしてゐた。五重の塔が杉の並木の中に屹然として聳えて、葉間を洩れる日の光線が、暗い杉並木の中をひとところばつと明るく照した。ある儀式に參すると見えて緋の衣を着た若い僧が三四人並んで本堂の方へと歩いて行くのが見えた。大きな石の手水鉢からは、清い水があふる、ばかりに漲り落ちた。

白足袋に草履を穿いたをばさんの姿は、やがて本堂の階段の前に見えた。鉦の音、讀經の聲、參詣する信徒の捧けた蠟燭の火は、無數に薄暗い殿堂の中に燃えて、香煙はむせるやうに四邊に満ちた。をばさんは多くの參詣者の集つたところに靜かに歩み寄つて、そこに雜つて、珠数を繰りながら一心に祈念した。そして日の暮るゝまで、をばさんは其處を離れようとしなかつた。

をばさんは到るところで、老師の話やら噂やらを耳にした。誰も老師の徳をたゞへないものはなかつた。短い間の住職にも拘らず、老師は種々な功德を其處に施した。「えらい老師さんでいらしたのに、何ういふことで御座いましたか。本當に、山では、惜しまないものは御座いません。」かう旅館の主婦は話した。

をばさんは今は思ひ立つて来た時のやうに、老師の跡を探らうともしなければ、秘密の絲口を探らうともしなかつた。をばさんは全く信徒の一人になつたやうに朝から御堂の方へと出かけて行つた。積る罪障は今更のやうに深くく、をばさんの胸に集つて來てゐた。をばさんは唯珠數を繰りながら手を合せて祈念した。

金色の藥師の三尊佛は香煙と讀經との中に寂として立つてゐた。

## 二人の最期

何となく騒々しい。誰も彼も出て見る氣勢がした。犬が頻りに吠える。不吉なある事變が起つたのではないかと疑はれた。

その朝は静かであつた。風も吹かず、木の葉も動かず、それでゐて空は美しく碧に晴れて、士族屋敷の處々から颯る烟が、細く真直ぐに立昇つた。殿様がお城を引揚げて東京住ひをなされてから、衰顔と絶望と寂寥とが全く四邊を領した。長い間の家祿に離れて、大小を差すことを禁ぜられて、頭も町人のやうにザンギリにしなければならぬ士族達は、殆どあてどもないほどに思ひ惑つた。

お厩にも馬の嘶きも聞えず、大名小路に弓の練習をするものもなく、三の丸に通ふ路も全く草に蔽ひかくされた。城の門は明放され、自壁は崩るゝまゝに任せ、石垣には藁が絡み附いてそして紅葉した。

『何ちや、何ちや。』

「何うした？ 何うした？」

さういふ聲が到る處で聞えた。何處の家からも人が出て來た。髪を断ちかねてまだ鬚に結つてゐるものなどもあつた。ある家の格子窓からは女房の顔が覗いた。子供達は無意味に唯騒ぎ廻つた。

火事かと思へばさうでもない。喧嘩かと思へばさうでもない。それでゐて、人は彼方からも此方からも走つて行つた。呼び留めて訊いても誰も知つてゐるものもなかつた。

兎に角、事件は大名小路の方面にあるらしかつた。路の角に立つて、其方を眺めてゐる女房達は、不安さうに何彼と噂した。また何か事件でも起つたのではないか。一昨年騒動のやうなことが起つたのではないか。或は知らぬ間に戦争が始まつて、殿様の世になる運動が始まつたのではないか。

「巡邏がやつつけられた！」

向うから走つて來た男は言つた。

「巡邏が？」

「何うしたんだ？ 何だ？ 事件は何だ。」

人々は忽ちその周圍に集つた。その男の言ふ所によると、何でも血を見る騒動であるらしかつた。「堀内の坊ちやんが斬られた。それから戸部さんが出て槍で向つた。槍は見事に切落された。えらい腕だ。冴えた腕だ。」かう言つて走つて行つた。

ある人は言つた。「えらい騒ぎぢや。とても巡邏などの手には合はん。追手のところで、二人まで斬られた。それから、もう少し來たところで、侍がこりずに劍を抜いて向つたが、忽ちそれを打落されて眞向に額を切られた。武士ぢや、確かに武士ぢや、腕の利いた武士ぢや。えらい騒ぎぢや。今、丁度杉山さんのところを通つて行つてゐる。」

「強盗か？ 人殺しか？」

「そんなもんぢやない。えらい勢ぢや。又向ふものは片端から斬つて捨てるといふ勢ひぢや。」

「一人か？」

「いや二人ぢや。二人とも立派な着物を着て、裾を高く端折つて、血刀を提げてゐた。一人の方は創を額のところを受けて、血が其處から流れてゐた。」

「何處から來たのか？」

「何でも佐野の方から來たといふ話だ。昨夜佐野を荒らして、今朝、町へ入つて來たといふことぢや。」

「何者か、わからんか。」

「わからない。」

かう言つて其人はまた走つて行つた。



今朝早く町のある店で若い主婦が戸を明けた。と、その二人の男は、そこに立つてゐて、いきなり刺された刀を眼の前に突きつけた。

若い主婦は氣絶した。

『無心ちやが、水を呉れ。』

かう言つて、齒の根も合はぬばかりにぶる／＼戦へてゐる主人の手から水を貰つて飲んだ。一人の方はことに咽喉が乾いてゐるといふ風で、二杯も三杯も續けて飲んだ。

それは小料理屋らしい店であつた。棚には徳利などが並んでゐた。昨夜遅く洗はずに婢が放つて置いた膳碗なども其處等に散らばつてゐた。

『腹が空いた。氣の毒だが、飯を一椀振舞つて呉れ。』

かう一人の方が言つて、血のついた刀を土間に突きさして、そこに腰を懸けた。年の頃三十八九で、苦味走つた好い男であつた。死の追窮の中を連れて來た激昂と、夜を徹して歩いて來た疲勞とは名残なくその面やら態度やらに現はれてゐた。一人はそれよりも一つ二つ年下らしく、脛のところは二三ヶ所創を受けてゐた。

氣絶した若い主婦を番頭や婢達が奥へ運んで行つたり何かしてゐる間に、主人と氣丈な一人の婢とは、飯櫃と膳碗と昨夜の残肴とを其處に出した。一人はそれに水をかけてさら／＼と旨さうにして食つた。

手創を負つた方の一人は、一杯食ふには食つたが、咽喉に通らないといふ風で、すぐ箸を傍に置いた。人々は年上の方の男が飯を食つてから、しつかりと帶を締め直したり、草鞋の紐を結びかへしたりするのを見た。年上の男は年下の方の男に向つて言つた。

『痛むか。』

『いや——』

手拭をぴり、と裂いて、渡すのを黙つて受取つて、一人の方は、それで確かりと脛の傷を結へた。そして立上つて、地踏をして、これで大丈夫といふ風を見せた。

『忝けなかつた！』

かう年上の方は言つたが、『古河の方への道は何う參るのちや？』  
主人は指さして『二言三語教へた。』

『城の中を通るのちやな。』

『左様で——』

『何里あるかな？』

『五里には近う御座います。』

『忝けなかつた！』

かう再び禮を述べて刀を鞘に収めて、そして外に出て行く二人を人々は見送つた。その時には、巡邏こそまだ來てゐなかつたが、噂を聞いて群集が大勢その家の前に集つて來てゐた。

二人が出ると、群集は忽ち路を開いた。種々な聲やら噂やらが其處から起つたが、しかし誰も二人を留めるものはなかつた。群集の中には、子供も女も雜つてゐた。『佐野の方から來たんだ。人殺をして來たんだ。……追手がかゝつてゐるんだ。』かう物知り顔に言ふものなどもあつた。二人の歩いて行く後から群集は續いた。

不運なのは、それと聞いて最初にそこに驅けつけて來た一人の巡邏であつた。群集をわけて、二人の前に立塞がらうとすると、年上の方の男の刀は忽ち鞘を離れて、あつと言ふ間に、その巡邏の肩のところに觸れた。巡邏はあつと言つて、後ろに倒れた。

『抜いた、抜いた。』

群集はかう叫んで後退りをした。

あまりの離れ業に、群集は唯呆れるばかりであつた。誰一人手を出さうとするものもなかつた。二人は朝日の光の美しく漲つた町を靜かに歩いて行つた。

噂はやがて町にひろがつた。行く先々の町では、危険を恐れて、一度あけた戸を再び閉めるものなどもあつた。親達は急いで子供を奥に隠した。

二人が料理店で飯を食つてゐる時分、町の巡邏の集合所には、あちこちから頻々として警報が傳へられて來てゐた。佐野からも來れば、その間に流れてゐる川の渡場からも來た。二人は二三日来、あちこちを暴ばれ廻つた。殆ど手をつけることが出來なかつた。佐野では、巡邏が數十名で取巻いて、既に捕縛に及ばうとしたところを、残念にも遁がした。あとから追ひかけて來た數名の巡邏は、棒だけではとても何うすることも出來ないと言つた。

『しかし、もう疲れてゐる。一人は手創をさへ負つて居る。手筈をきめさへすれば、捕縛するのに、さう困難も感じまい、』と追手の一人は言つた。

町の巡邏が逸早く斬られたといふ報は、集合所の巡邏達を總立にさせた。巡邏達は大騒ぎをして跡から追ひ懸けた。

その先發隊の數名の巡邏が群集に追ひついた時には、二人はもう町の角を城の大手の方へ行かうとしてゐた。大手の門は、殿様が住まなくなつてから、明け開いたまゝにしてあつたが、それでもまだそこに通ずる路は、ひろく、綺麗になつてゐた。門の傍の二階の中には昔の仲間が住んでゐた。

仲間はその噂と一緒に朝飯を食つてゐたが、表が急に騒がしくなつたので、何事かと思つて古い昔の格子戸から覗いて見た。仲間の眼には、群集と、怪しい形をした拔身を持つた二人の男と、棒を持つた巡邏とが手に取るやうに映つて見えた。丁度その時、一人の男は先に進んだ一人の巡邏と渡り合つてゐた。

あとから巡邏が二三人續いた。しかし一人の方の男の切先が鋭いので、それと渡り合つてゐた巡邏は棒を落されて、あつと言ふ間に、額に創を受けた。

数名の巡邏のばつと後へ退くのが歴々と指さゝれて見えた。

と、逃げるものは追はずといふ風で、刀を鞘に收めて、二人の男の並んで静かに此方へと歩いて來るのが見えた。鼻もその時には赤兒を抱いて、飯を食ふのを止して、そこから顔を出して見てゐた。

この時、誰か人があつて、大手の門を閉めたなら、二人は何うすることも出来なかつたであらう。現に、巡邏の中にはさういふことを思ひ附いてゐたものも一人や二人はあつた。しかし時機は遅れた。二人は静かに大手から城内へと入つて行つた。

城内には、新しく酒屋だの物賣店などが二軒出て來てゐた。昔の城内の威嚴は全く地に委して了つて、土手には草叢やら竹藪やらが茂つた。仲間も赤兒を抱いた鼻も群集に雜つて後から續いた。

群集の中からは種々な聲が起つた。斬られた巡邏は士族だと言ふことや、城内に入つたら士族が大勢出て來るであらうといふことや、棒ではとても敵し難いといふことや、何や彼やと喧しく騒いだ。天誅組の仲間だと言ふものもあれば、旗本の落武者だといふものもあつた。侍だ。立派な侍だ。あゝいふ侍を侍らしく取扱はないからいけんのちや。あれを縛め取らうと思ふから間違つてゐるのちや。『分別顔をした男は、かう言つて同情するやうな顔をした。』

静かであつた城内は、俄かに群集の聲に目覺めた。其處の門からも、此處の門からも人が走つて出た。めづらしい光景を知らせるために、外に遊んでゐた子供は走つて内の中に入つて行つた。

其處からも此處からも、犬が吠え蒐つた。大抵は地犬で、仔牛のやうに大きいのが多かつた。ある大きな構の家の前に來た時には、餘りにそれが煩さく吠え蒐るので、脛に手痛を負つた方の一人が、刀を抜いて、近くへ來た黄い毛色の大きな犬を真二つに斬つた。犬の脊から胴にかけては、血が夥しく流れた。犬は猶ほ吠え蒐つた。

巡邏の数は、此時は既にかなりに多くなつてゐた。非番の人達も變を聞いて彼方此方から集つて來た。少くとも十五六名には達した。それでも、かれ等は何うすることも出来なかつた。

隊長は脊の高い鬚の生えた男であつた。不恰好な服を着て、だぶくしたズボンを穿いて太い棒を持つてゐた。それが彼方へ行つたり此方へ行つたりして、部下を指揮してゐるのが明かに朝の空氣に浮き出して見えた。しかし最初の一撃に氣を飲まれた巡邏達は、進んでかれ等に當らうとするものはなかつた。

二人の歩くのにつれて、群集と巡邏とは唯動いて行つた。

『駄目だ、駄目だ。刀が無くつちや駄目だ。刀を持つて來い。槍を持つて來い。』かう誰か叫んだのを二人は耳にした。

『何者だ？ 城下を騒がすのは？ 殿様がお住ひにならなくなつたと思つて、悔つた業をして後悔すな。』

かう言ふ聲を二人は聞いた。二人はある侍らしいものが、一人は長い槍、一人は刀を振翳して、群集の中から此方へと向つて来るのを見た。なまこじつくい長い堀の續いたところに來た時であつた。

『何者だ？ 名告れ！』

『名告らぬか。』

傷痕を負はない方は、振返つて身構へした。そして聲を張り上げて言つた。『此處は天下の大道だ。それを通るのに、邪魔をするものこそ心得ぬ。われ等は佐野から來て、此處を通つて、古河に行くものぢや。古河には我々の同志がある。我等は義に由つて動くもの、一人ぢや。民が餓ゑるのを見てゐるのに忍びないもの、一人ぢや。われ等は新しい政治に不満を抱き、薩長の奴輩に天下を任せることの出來ないもの、一人ぢや。われ等は餓ゑた者には食を與へた。渴したのものには水を與へた。われ等の同志は、天下と國家とのために憂ふるものだ。われ等の同志の爲めに民の食を得て飢餓を免れたものは何れほどあるかわからない。……それでも猶ほ邪魔をするか。』

『天下の秩序を亂し、人を殺し、財を奪ひ、それでも猶、上の威光を恐れぬ鼠賊ぢや。』

『からめ捕れ！』

槍を持つた方の一人は、先づ躍りかゝつて行つた。群集は目ざましい光景の忽ちそこに展けられるのを見た。刀を振翳した方は、もう一人の方と渡り合つた。

槍は忽ち折り折られた。そればかりではなかつた。前から後から集つて來る巡邏を近くには寄せつけずに、一人の同志をかばひながら、一步步々後へへと退いて行くさまは、見てゐる人達の眼を驚かすに十分であつた。三四分渡り合ふ間に、槍を持つた男は、群集の中に追ひまくられ、刀を振翳した男は肩の處に痛手を負つて後に倒れた。巡邏は三人まで斬られた。

ある路の角で女房達は話した。

『見さつたか？』

『見た。』

『まだ若い男ぢやつてな。』

『えらいにも何にも。腕のきゝ手だ。一人は手を負つてゐるから、それほどでもないが、一人は容易につかまへやうたつてつかまえられない。堀内の坊ぢやんは斬られた。』

『清助が槍の柄を切られたつて言ふぢやないか。馬鹿な奴だ。物笑ひの種だがな。出いても好いところへ出て。坊ぢやんは、また何故そんなところへ出たんぢやな。』

『物好きに出たんぢやらうがな。命があぶないつて言ふ話だがな。』

『殿様の御奉公なら、爲方がないけれど、馬鹿な眼を見たもんだ。』

『本當だ……。それに、義賊だつて言ふちやありませんか。』

『さういふ話ですよ。唯だ城下を通して貰ひさへすれば、好いつて言ふさうちやありませんか。黙つて通してやれば好いの……。』

『本當ちやな。』

『餓じいものには食を與へる。渴したものは水を與へる。さう言つたつて言ふちやありませんか。何も御城下に来ては、わるいことをしたと言ふではなし、さういふ義賊なら、黙つて通してやれば好いの……。』

息子らしい十三四の男の兒の驅け出して行かうとするのを、一人の女房は慌て、走つて行つて引留めた。

『行くんだい、行くんだい。』

『なりません、なりません。』

『行くんだい、行くんだい。』

『だつて、お前、怖いんだから……。傍に寄るものは、皆なた、つ斬つて了ふつて言ふんだから。行つちやなりません。』

『行くんだい、行くんだい。』

男の兒はかう叫んで、母親のしつかりつかんだ袖を振放つて、飛んで行かうとすると、母親はまた追蒐けて、小さな溝の白い花の咲いてゐるところで捉へた。

ワツと言ふ群集の聲がちき近いところで聞えた。

『今、其處を通つて行く。』

『何處を？』

『大名小路の戸部さんの前のところを……。もうちき曲り角のところだ。』  
かう教へてある人は走つて行つた。

二三人の女房は急いで其方の方へ驅けて行つた。長屋の門の前にも畠の桑の樹の蔭にも、大勢人が出て、その二人が群集に跟けられて通つて行くのを見てゐた。

二人と群集との距離は十間ほど離れてゐた。手を負つた方は先に歩いて、あとからもう一人の方が續いた。二人とも舐られた刀を持つて、鳥渡でも邪魔をするものがあつたら用捨なく斬つて捨てようとする態度を見せて静かに歩いた。

さつきの争鬭に手を負つたと見えて、一人の方の額からは、血が流れてゐた。そしてそれがをりく

眼に入らうとするのを、煩ささうに手で拭つた。

やがて大名小路の路の曲り角のところへと二人は來懸りつゝあつた。そこからは、城の門と、高い白堊と、藁の絡んだ石垣とが見えた。切り拂つて残り少なにはなつたけれども、土手の上には、まだ大きな松の並樹が残つてゐて、晴れた空には、鶯がのどかに舞つてゐた。

曲り角には、小さな店があつた。それは通りすがりの旅客に、茶や菓子や果物などを賣る店であつた。熟した柿の實などが一杯に其處に並べられてあつた。赤い襷をかけた、ところでも評判な頬の紅い十七八の娘が、いつでもそこで客に茶を侷めた。

その時も矢張その娘が其處に出てゐた。

思ひもかけず二人は其處にある縁臺に腰を懸けて休んだ。遠巻にしてゐた群集は、ソツと聲を懸けた。

二人は娘から所望して、水を飲んだり柿を食つたりした。刀は拔身のまゝ、其處に突刺してあつた。

二人はこんな話をした。

『創は痛むか。』

『うむ……』

『かなり深いな。』

『何うも目がまはつていかん。』

手を負はない方は考へて、『かう大勢になつてはとても駄目だ。とても切抜けて古河まで行くことは出來んな。』

『残念だ。』

『切り抜けよう、切り抜けようと此處まではやつて來たが、これではとても駄目だ。』

手を負つた方は、『無念だが、致方がない。俺は疲れた。とても駄目だ。しかし、貴公はまだ何ともない。流石は名流の子孫だけあると思つて感佩した。もう澤山だ。友人の厚誼は、もうこれで十分だ。心から感謝した。俺はこゝに放つて置いて、何うにもして此處から血路を切り開いて呉れ。昨日、佐野で俺はもう無い命だつた。それを貴公のために、俺は此處まで生きながらへて來た。もう澤山だ。』

『そんなことを言ふな。俺一人血路を開いたところで爲方がない。奮闘して、それで駄目なら、切つて切つて切りまくつて、それで潔く此處で死ぬばかりだ。』

『俺のまきぞひを貴公が受けてはならん。それに、古河の方のことを考へても、生きられるだけ生きなければならぬ義務がある。仕上げなければならぬことが澤山にある。俺は大丈夫だ。俺のことは心配しないで好い。俺は俺の處分をちやんとする。人に唄はれても恥かしくないやうな最後を遂げるのだ。決して捕縛の恥辱は受けない。』

『しかし、そんなことを言ふな。行くところまでは行かう。』

かう言つたが、無念さうな顔の表情をして、キツと群集の方を見て、「しかし、此まゝになつて了ふのはいかにも無念だ。同志に逢つて、もう一度謀略を企てて見ないのが残念だ。言つても効がないことだが、何故、佐野であゝいふことをしたか。あゝした幕を開いたか。昨夜、また、あの渡場で、何故身を遡してしまはなかつたか。」

『それと言ふのも皆な俺の爲めだ。』

『そんなことはない。……しかし、村田、歎いたつて爲方がない。事は成敗に由て論ぜず、眞價は棺を蓋うて後定まるぢや。俺も決心した。』

『血路を開いて呉れ。』

『飽まで運命を俱にしよう。生きるなら生きる。死ぬなら死ぬ。貴公一人を此處に捨てるわけには行かない。』

額から血が流れるので、今朝裂いた手拭の残りを取り出して一人の方は一人の額をしつかり結んでやつた。

群集はまた聲を擧げた。二人は屹として其方を見た。

『犬め、羊め。』

かう言つて睥睨した。

『天下の大勢とは言ひながら、』かう言つて手を負はない方は慨嘆して、『薩長の奴輩にかうして天下を取られようとは思はなかつた。何處に行つても眞の骨のある人間はないのか。言ふまゝに、羊のやうに従順に城を捧げ國を捧げて何とも思はない藩主共は、何と言つて好い腰抜けか。縁を金に代へ、城を邸宅に代へ、祖先傳來の家臣を捨て、恩を捨て、義を捨て、それでも生きて安逸を貪りたいのか。殊に情けないのはそれに従ふ奴輩だ。髪を断てと言へば髪を断ち、大小を捨てよと云へば大小を捨てた。それほどまでにしても猶ほ命が惜しいのか。』齒を喰ひしぼるやうにして暫し黙つてゐたが、『しかし、これも運命だ。しかし村田、今になれば、會津を通れ、函館を通れたのが残念だ。何故、あの時に潔く同志と共に死ななかつた？ 何故あの時萬死に一生を通して生き残つて來た？ それと言ふのも志を遂げたいばかりにかうして生き残つて來たのだ。しかしもう駄目ぢや。天下が既にかういふ形勢になつては、古河に歸つたとて、とてもわれ等の志は遂げられようとは思はれない。石田の謀略も雄志も何もかももうお了ひだ。俺はもう決心した。』かう言つたが、顔を擧げて、『それにしてもかういふところがわれ等の最後の地とならうとは思はなかつた。』

『本當だなア、瀬尾……』

二人は慄然とした。

暫くしてから、『では行かう。』

『行かう。』

最後の勇氣を鼓したといふやうにして、手を負つた方は立上つた。強い眩惑はかれを襲つた。

一人の方は、懐の中から、財布を出したが、もう入らない金だとばかりに、小判一枚を朱塗の盆の上に放り出した。

『世話になつた！』

で、二人は血刀を提げたまゝ表へと出た。群集はまた囁した。

城の方に行かうとする路の角に來た時には、二人はキツと目を据ゑて向うを見渡さずには居られなかつた。そこにはもう何うしても破ることの出來ない難關が横はつてゐるのをかれ等は見た。刀や槍を持つた大勢の群集は、報を得て、彼方此方から集つて來て、かれ等の來るのを其處に待受けてゐたのであつた。

かれ等は顔を見合はせた。

で、二人はまた靜かに歩を進めた。二人は此時は最早これを突破して血路を開かうと思つてはゐなかつた。それよりはむしろ見事に人に笑はれない最後を獲たいとのみかれ等は思つた。勇氣は全身に満ち渡つた。

先づ槍を向けたのは、かなり年を取つた頭髪の半白の男であつた。藩の多い侍の中でも、武藝一殊に槍の達人としては、聞えた人であつた。瀬尾は身つくろひをして、地に足を踏みしめてから、靜かにそれに向つた。

群集はその槍の穂と白刃との見事に空に交はされるのを見た。續いてもう一人の男は刀を揮つて村田に向つた。村田はそれを引受けて戦つた。

熟達した刀の冴えは、をり／＼槍を地上に向けさせるべく餘儀なくさせた。それを見て取つた一人は忽ち横合から瀬尾に斬つてかゝつた。瀬尾は槍をはねのけて置いてから、直にそれと刃を合せた。

混戦は始まつた。侍の方に手傷を負つたものが二三人出來る頃には、瀬尾も、腕と肩とに薄手を受けた。それにも拘らず、かれの刃は鋭く冴えて空に光つた。

瀬尾は既に三度進んで三度退いた。二人を傷け三人を斃した。ふと村田はと見ると、かれから三四間離れて、二三人の敵を相手にして頻りに受太刀になつてゐるのを見た。瀬尾は更に立つてその一人に躍りかゝつた。

『打つて了へ！ 打つて了へ！』と言ふ聲が聞えた。

『飛道具は卑怯だ。敵ながら、天晴な武士。』  
續いてかういふ聲が聞えた。



不意に喝采の聲がした。

一人の男を相手にして戦つて居た瀬尾は、この聲を聞いて、何事かと振返つて見た。その時かれの眼には、村田がある大きな男に肩先を斬られて、前に踏るやうにして倒れるのが映つた。かれははつとした。と、勢ひ十倍して、いきなり真向にその相手の眉間を割つたが、そのまゝ踵を旋らして、かれは急いで地上に倒れた友達の方へへ行つた。

村田と戦つてゐた男は、今度はかれに向つて來た。

それを切つて切つて切りまくつて、かれが再び友達の傍に來た時には、大勢の群集も侍も、巡邏も、あまりの勢ひに恐れて、暫し遠巻にしなければならなかつた。

瀬尾は倒れた友達を引起了た。

「氣をたしかに——」

かう言つたが、肩に、額に胸に無數の劍を受けた村田は、もう再び其處から起き上らうとしなかつた。村田の魂は獨り靜かに天に昇りつゝあつた。

「村田、おい、村田。」

ほそく眼を開いて見たが、すぐまた眼を閉ぢた。胸からは血が夥しく流れた。

「貴様とは長い間志を俱にして來た——こんなところで貴様を殺さうとは思はなかつた。志は事と皆な翻歸した。」かう獨りて言つたが、萬感交も胸に集つて來たといふやうに、生白い激昂した顔を上げて、瀬尾は悵然とした。涙が頬を傳つて落ちた。

やがて思切つたやうに立上つたかれは、聲を張り上げて群集に向つて叫んだ。「村田新之助、函館脱走浪士村田新之助、今此處に戦死した。天下の爲めに憂ひ、國家の爲めに謀つた大丈夫の志は、爾等のやうな犬、羊にはわかるまいが、よく聞け。恩を恩とし、義を義とし、爾等の如き不忠不義の者を憎むこと蛇蝎の如き大丈夫、城を邸宅に代へ、恩顧を金に代へ、祖先の志を忘れて安逸を貪らうとした汝等不忠不孝の者は、何の面目があつて、この勇しい大丈夫の最期に對するぞ。爾等鼠輩は、大鵬の志を知らず、燕雀に伍して、われ等の志をして水泡に歸せしめた。しかしながら、言つてきかせたとて、われ等の志はわかるまい。來るなら來れ——」かう言つて瀬尾の身構へした時には、群集は既に関の聲をつくつて、その周圍に押寄せて來てゐた。

瀬尾は一刻毎に群集の多く簇つて來るのを見た。最早、前に進むことも出來ず、後に退くことも出來なかつた。切つて切つて切りまくつて、潔く死ぬより他に仕方がないと決心した。

ふとかれの眼に映つたのは、城の白堊と、門と、石垣と天主閣とであつた。丁度その時、午前九時過の日影は美しく昔の城壁に輝きわたつて見えた。

『さうだ。』

かう思つた瀬尾は、急に刀を揮つて、城の方へ向ふ方面の一路を切り開くべく群集の中に躍り込んだ。その勢ひは盛んであつた。それは丁度虎が羊の群の中に躍り込んだ様なものであつた。路は忽ち開けた。

『この期を移さず搦め捕れ！』

『城の中に遁すな。』

かういふ聲が彼方此方から聞えた。

村田を失つたといふことは、瀬尾の爲めには尠くとも一大打撃であると共に、巡邏達に取つては、非常に力を添へる材料となつた。巡邏はあとからあとへと隙間もあらせず競ひかゝつて來た。

それを、その追窮を自分の身の近くに寄せまいたためには、かれはをり／＼立留つて烈しく戦はなければならなかつた。かれは更に三人を傷け二人を斃した。かれ自からも、更に數ヶ所の手傷を被つた。

かれは血刀を提げながら、潤歩して、三の丸の城門の方へ行つた。

『さうだ。好い死場所だ。われ等敗殘者には人の住まなくなつた昔の城の天守閣の上が最も好い死場所だ。さうだ、確かに好い死場所だ。』

かうかれは獨語した。

三の丸の城の前の門には、小さな濠が取りめぐらされて、其處に、古い朽ちかけた橋が架つてゐた。殿

様の住まなくなつてから、何もかもすつかり荒廢した。それは丁度昔榮えた封建制度の滅亡のシンボルを見るやうに、石垣は崩れ、樓門は壊れ、屋根には長い葛が跼つた。寂寥が全くあたりを領した。『城の中に入れるな。』

かういふ叫聲がまた後でしたが、しかし橋を渡つて、開いてあつた城門の中に入つて行くかれを誰も遮るものはなかつた。かれは幾屈曲して曲つていつてゐる路を、殆ど抵抗するものなしに、天守閣の前まで來た。

天守閣の下階に住んでゐた番人は、其時噂と二人で内職をしてゐたが、ふと群集の揚げた関の聲に驚いて、何事が起つたかと思つて、大きな四ツ格子の窓から覗いた。そこからは、橋と、向うに打渡した廣場と、大勢集つた群集とが見えた。巡邏を先に、槍だの刀だのを持つた侍衆が橋を渡つて此方へやつて來るのも見えた。番人は仰天した。何事かと急いでそこから下りて行つた。

番人が表へ出たのと、かれが其處にやつて來たのとは殆ど同時であつた。誰何する前に、番人は提げた血刀と、渾身赤に染みた姿と、青白い激昂した顔を見た。かれは愈仰天して、一度出たのをまた再び内に入つて了つた。

番人の炊事場らしいところの傍に井戸のあるのを見つけた瀬尾は、何をもしし措いて、先づ其方へと歩み寄つた。流石にかれも疲れてゐた。昨夜から今日にかけての悪戦苦闘、會津でも函館でも勇名を以て鳴

つたかれも、今は何うすることも出来なくなつたのを總身に感じた。かれは辛うじて井戸から水を汲みあげて、釣瓶の縁に口を寄せて、何も彼も忘れたやうに心ゆくまで水を飲んだ。

『あゝ萬事休す！』

かれは思はずかう言つたが、軽い眩惑を覚えて、そのまゝ額を押へて蹲踞んだ。いつの間にか脛にも股にも數ヶ所の創の負つたと見えて、血が傍の枯れた雑草を赤くした。

いろ／＼な光景が早く早くかれの眼の前を通つて行つた。會津の城外で通ぐる官軍を追つて行つたかれ、重圍の中を脱して深夜山越しに逃げて行つたかれ、函館の落城の間際まで奮戦苦闘したかれ、ひそかに東京に遁れかへつて、同志の者と頻りに再擧の肝膽を砕いたかれ、石田といふ首領と軍用金を集めるために下總から常陸、下野の間に往來したかれ、何處も彼處も新政に謳歌して天下の形勢の次第に我に非なるを見て悲憤慷慨したかれ、さういふものが繪巻物か何かのやうになつて、それからそれへと鮮かにちらつて見えた。(何も彼も過ぎ去つた。これといふも身の否運だ。天下の爲めに憂ひ、國家の爲めに謀つたことも皆無効に歸した。苦心も皆水の泡だ！)しかし、何も歎くべきことはない。この上は、この上は……唯、潔く死ねばかりだ。さうだ。天守閣、昔の城の天守閣の一番上で腹かき切つて死ねば、それで本望だ。ふと主君のことだの、父母兄弟のことだの、遠い故郷のことだのが思ひ出されたが、かれは自分の女々しいのを恥ぢるやうに、すぐそれを打消して立上つた。

キとかれは目を据ゑた。

追手は既に天守閣の門のところまでに聳々と詰め寄せて來てゐた。群集は更に群集を加へたらしく、騒音は一層高くかれの耳朵を打つた。

かれは追手の邪魔をしない中にと思つて、急いで天守閣の内に入つた。

光線の明るい戸外から入つて來たかれは、暫しはあたりをそれと見定めることが出来ないやうな暗さを覺えた。突然、かれを掠めて慌て、出て行く人の氣勢がした。かれは身構へした。

『其處だ、其處だ。そこに上つて行つた。』その出て行つた人のかう言つてゐるのが後に聞えた。

かれは血刀を杖にして階段を上つて行つた。

かれの行くところには、血汐が長く痕を引いた。

かれは力の全く盡きたのを感じた。眩惑して、倒れかけて、危く階段の手摺に寄りかゝつたりした。あるところでは、苦しい呼吸をつく爲めに、やゝ暫くの間、階段の一つに腰をかけて休んだ。多量の出血から來る心臓の鼓動は、烈しくかれの疲れた體を悩ました。

一階は一階毎に、階段が次第に狭く長くなつて行つてゐるのをかれは見た。ある階段にかゝらうとした時は、あまりに苦しいので、いつそ此處で自殺して死んで了はうかと思つた。しかしかれは勇氣を鼓して猶ほ上へ／＼と登つた。

何處の間もひつそりとしてゐた。五年前までは、種々な武器や太鼓や器具が置かれて、足輕や徒士が頼りに往來したが、今は些の物の具もなければ、人氣もなく、徒らに蜘蛛の巣や鼠や鼯の住むところとなつて了つた。停滞したまゝの空氣には、埃の匂ひが微かに雜つた。

かれは半は血刀を杖にし、半は階段の手摺に身を凭せながら、辛うじて最後の一階まで登り詰めた。其處は二十疊敷位の板敷で、四面の小窓からさし込む光線は明るくあたりを照してゐた。大きな梁と太い柱とが縦横に互に交叉してゐた。

かれは半ば倒るゝやうにとつかとその板敷の真中に體を落した。死といふことより他に、かれには何物もなかつた。かれの頭はがらんとしてゐた。後から上つて來る追手のことなどは、もう殆どかれの眼中には留つてゐなかつた。僅かな間——唯、呼吸の根を留める僅かな時間さへあればそれで足りる。かう思つて、かれは安心してほつと呼吸を吐いた。

ふと天守閣の最高の一間の四面をめぐるひろい眺望がかれの眼に入つた。空、雲、日の光、遠い森、人家の烟、一ところ金屬のやうに輝くものがあると思つて凝視したかれは、それは城の半をめぐるつてゐる大きな沼の水であるのを見た。

『好い死場所だ。』

かれはまたかう思つた。』

かれは續いて石田と同志のことを考へた。村田が死に、自分も死んで了つては、この悲壯な最期を同志に傳へるものは誰もない。誰もない。かう思ふとそれが死に臨んでの唯一の心残りであるやうにかれには思はれた。しかしかれは何うすることも出来なかつた。

やがて時を移さず群集が上へくと押寄せて來る氣勢がした。もう確かに三階、四階あたりまで上つて來たらしかつた。関の聲が死を促すやうに下に聞えた。

かれは蹠蹠として立上つた。かれは板敷に滴り落ちた血汐に指を染めて、前にある太い柱に、『愛國の志士瀨尾半之丞秀包此處に自裁す』と大きく書いた。

しかしそれを書くのに、かれはかなりの時間を費した。血が足りないもので、かれは何遍となく蹠蹠んで血汐に指を浸した。——で、書き終つて、それを見て、莞爾笑つて、それから自殺の準備にかゝつた。かれは血刀の切先を衣の袖に巻いて、ぐさつと下腹へ突刺して、それを左から右へと引いた。群集はその時既に其處に迫つて來てゐた。

## 旅の者

一

おきよが起きる時分には、いつも下りの一番の汽車が来た。夜の稼業の遅いので、跡片附を好い加減に放つたらかして置いていても、床に就くのは何うしても十二時すぎになる。しかし新参の身は、朋輩のお鶴よりも早く起きなければならなかつた。おきよは眠い目をこすりながら、いつも表の雨戸を明けた。

おきよはそれから表の通りを掃いて、店を片附けて、煙草を置いてある棚やら土間に添つてゐる三疊の座敷やらを掃除して、上さんの火を焚附けてゐる竈の傍へ行つて、湯を一杯バケツに貰つて来て、それからあちこちと雑巾がけを始めた。

何うかすると、上さんはおきよに話しかけた。

「お鶴のお客は、昨夜、はなを置いて行つたかえ？」

「何うですか。」

「置いて行つたに違ひないよ。あのお客は堅いんだから。」

雑巾がけをしながら、好加減な返事をおきよがしてゐると、

「本當に、あいつはづう／＼しくなつて、此頃は油断がなりやしない。今度お客が来たたら、聞いてやるから好い。」

こんなことをぶつ／＼言ひながら、上さんは向うの方へ行つた。朝日が漸く通りにさして、荷馬車だのが、ガラ／＼と町の方へ行つた。汽車の辨當だの茶だのを賣る向うの家の亭主は、朝早くから一商賣したといふやうな顔をして、元氣よく停車場から店の方へ歸つて来た。

「キヤツ／＼」といふ聲がきこえるので、おきよが振向いて見ると、その汽車賣の亭主の店の前の高い撞木には、今しも箱から出された猿が元氣よく上つたり下つたりしてゐた。来た時から、おきよには、その猿が可笑く滑稽に思はれた。その猿はもう随分長くそこに飼はれてゐるといふことであつた。何ても秩父の山奥から貰つて来て、客を寄せるために亭主はそれを店の前に置いた。果して其處には種々な人が朝に晩に立留つた。子供、子守、倉庫の人足、さういふものがいつも飽きずにその前に来ては立つた。

遠い海の方から来たおきよには、あたりのものがすべて何も彼もめづらしく不思議に思はれた。小さな停車場、小さな倉庫、町と言つても、自分等の住んでゐた町と比べたら、何んなにさびしい平凡な

色彩の乏しい町であつたらう。娘達にも髪を綺麗に結つてゐるものなどは一人もない。大抵は紡績か何かの地味な着物を着て汚ない顔をして平氣で町の通りを歩いた。男達には自分の故郷に見るやうな色の白い好い男は見たくも見られなかつた。それに言葉もわるかつた。變な訛りのある言葉で、平氣で人々は話し合つた。

薄暗い停車場を出て、亭主につれられて、始めて其處の格子を明けて入つて來た時には、おきよは外國にでも來たやうなさびしさと心細さとを覺えた。その時、色い生白い、白粉のところ／＼はげた女が、綿フランの黒い襟卷をした客と、だらしのない風をして、ふざけ散らして、奥から出て來たが、それが今思へばお鶴であつた。あの時お鶴は變な眼色をしておきよを見た。

『好い姐さんだ……何處から伴れて來なした？』

其時、そのお客はかう言つて、じろ／＼おきよの方を見た。

國から東京、東京から上總、上總から埼玉、さういふ地名だけは、おきよは覺えてはゐたけれど、それが生れた故郷からは、何ういふ風に離れてゐるのか、何ういふ風にやつて來たのか、自分自身にもはつきりとは覺えてゐなかつた。何でも、國は西の方になつてゐる。おきよは唯かう思つた。おきよはをり／＼停車場の陰に薄れて行く夕日の方を見て涙を流した。

をり／＼客から、

『姐さんは何處だえ？ 此方のもんぢやないね。』  
などと訊かれると、

『いゝえ、ちき近くよ。埼玉よ。』

かうわざとろ覺えの關東語をおきよはつかつて見せた。

『そんなことはないだらう。言葉が違ふ。』

『いゝえ、本當。』

『ちや、埼玉の何處だえ。』

かう言はれると、すぐ返事に窮して、『いゝぢやないの？ そんなこと、戸籍調べなんかしなくつて好いわよ。』

『何うしても、此方のもんぢやない。關東のもんぢやない。』

『さうなら、さうして置きなさいよ。』

ある客は、

『當てゝ見ようか。』

『え。』

『西だらう。』

『西つて何方?』

『西つて、お天道さまの入る方さ。』

『それはわかつてゐるわよ。西つて、何處つて言ふのよ。』

『さうさな、名古屋?』

『いゝえ。』

『なら、伊勢?』

『いゝえ。』

『しかし、その近所だらう。中らなくつても、何でもその近所だよ。』

『さうですか——』

おきよは容易にその故郷の地名を言はなかつた。無論、家では知つてゐる。亭主も上さんも知つてゐる。一度お鶴にきかれて、隠すにも隠されず、止むなく、それを話したが、地理に暗いお鶴には、それが十分には飲み込めなかつた。『志摩、そんな國があるのかえ? 何方の方だえ? 伊勢? さう、』と、言つたきりて、深くも訊かなかつた。その癖、自分の國の方の話が出ると、おきよは二見が浦の話だの大神宮の話などをしてきかせた。

それに、おきよには、右の襟からかけて胸の方に、かなり目に立つ大きな疵があつた。おきよは来た

時から、わざと氣にしないやうにしてゐたが、しかもそれが絶えず氣になつて仕方がないといふやうに誰の眼にも見えた。襟をきちんと合はせてゐれば、ちよつと目にはつかない位にかくされてゐるが、少し注意しないと、すぐそれが歴々と見えた。

一番先に、上さんが訊いた。

『何うしたの? お前?』

『これ?』

急に顔を赧くして、『これ、子供の時に大きな腫物が出来て……』

『それで切つたの?』

『え。』

『随分大きい腫物だつたと見えるね。』

『え、え、この爲めには大變難儀したんですもの。病院に、この爲めに三月もゐたんですもの。』

『幾つ位の時だえ。』

『十一二の時ですよ。』

『ひどいもんだね。』

『う上さんは言つたが、別に深く訊かうともしなかつた。おきよはほつと溜息をついた。それを聞か

れるのは、おきよには丁度痛いところにも觸られるやうに思へた。お鶴から、どら見せて御覽と言はれた時には、おきよは身を悚ませるやうにした。

## 二

おきよはちよつと小綺麗な顔をしてゐた。それに、おつくりが上手であつた。年は二十五六であるが、お湯から歸つて来る時などには、何うしてもやつと二十二にしか見えなかつた。それに、上方近い柔かい線と濃かなる皮膚と小づくりな姿とは、此處等には見られない美しさを持つてゐた。通りすがりの人々は皆振り返つて見て行つた。

『停車場の川本には、今度別品さんが来たな。』

『玉本の藝者なんかかなはねえや。』

『本當だ、好い女だ……』

『上方ものだよ。』

こんな噂があちこちにきこえた。

同業のある亭主は、其處の亭主に、

『今度は好い玉だな。何處からさがして来たえ？』

などと訊いた。

丁度その角は、この町から、なにがし町に通ふ馬車の繼立場になつてゐた。毎朝、九時頃になると、御者は一通空馬車を引張つて、ラツバを吹いて、町の大通りを通つて行つた。と、田舎の人達は、それを待ちうけたやうにして、其處此處から出て来て乗つた。大きな包を抱へて遠い女學校の寄宿舎に通つて行く娘達もあれば、急な商用に慌て、乗つて行く青編買の商人などもあつた。で、馬車はもう一度其處の角に来て、二三分ほど待つて出かけた。その間を、御者は店に腰をかけて、女達を相手にして戯談を言つたり、蜜柑を買つて食つたりした。おきよの小づくりの姿はいつも其處に見えた。

おきよが来てから一月二月はちき經つて行つた。来た時には、これから遠い山に雪が来ようとする頃で、寒いく／＼風がさびしい關東平野の田舎町に吹き荒れてゐたが、段々押つまつて、年が暮れて、正月が来て、やがて垣添の路には、梅が白く浮出すやうに咲いた。その時分には、おきよにも町の様子やら、町に住んでゐる人達のさまやら、さういふところに遊びに来る男達の種類やらも大分飲込めて来てゐた。廉い祝儀、シミツたれな小使錢、僅かばかりの枕金、さういふものゝ絞り方なども飲み込めて来た。町の金のある旦那連は、多くは堅氣で、他では遊んでも土地ではそんなそぶりも見せないといふことや、遊ぶのは多くは金もあまりない小商人、でなければ町の息子連、でなければ近在の百姓の町に出かけて来たものなどであるといふこともわかつて来てゐた。お鶴にはその時分きまつた客が三人あつて、それ



が代りぐにやつて来たが、時には、運わるく一緒になつて、一人の客の歸る間、自分が相手をしてやつたりすることなどもないではなかつた。お鶴はその三人の客の中で、町から来る色の白い郵便局に出てる廿八九の男を一番深く思つてゐた。文なしでやつて来ても、三度に一度は自分で貢いで飲ませてやつたりして居た。

『今日も持つて来ないの？ じれつたい！』  
などとお鶴は言つた。

以前の客で、金がないので暫し遠ざかつてゐる男は、ちきその近くの停車場に切符きりを動めてゐた。家の傍にある吹井の處で、おきよが汚れたもの、洗濯などをしてゐると、傍へやつて来て、

『ヤア、ゐるかえ？ 昨夜、来たらう。郵便屋さんが。』  
などと訊いた。

『知らない。』

『知らないことがあるもんか。昨夜、一緒に騒いでゐたぢやないか。』

『嘘。』

『隠さなくつたつて好いよ。知つてるよ。』こんなことを言つて、暫し立つて見てゐて、やがて、停車場の方へ行つた。あとでその話をお鶴にすると、『すかない奴！ 甚介を起して居るんだよ、』などと言つて笑

つた。お鶴はその男と摩れ違つても、平氣で、知らん顔をして、停車場の方へ行つた。休憩した客の切符を買ふ爲めに、停車場に行く時にも、お鶴は平氣で出かけて行つた。『あいつがあそ

こにゐるから、わざと早く切らしてやつた、』などと言つた。

『お前さん、何うしたえ？ 此間の客は？』  
かうお鶴が訊くと、

『何うしたか。ちつとも来ない。』

『在のは？』

『あれも来ないねえ。』

『もつと、腕によりをかけなけれや、駄目だよ。お客なんて、シミツたれなもんだけども、こつちの出よう一つで、何うにでもなるよ。五十錢づつ費つたつて、三人に貰へば一圓五十錢になるぢやないか。田舎ぢや、品をよくしてゐては、藝者だつて賣れやしないよ。』

『さうね。』

『さうねぢやないよ。此間も、前の家に來てたつて言ふぢやないか。あんなすべたに取られぢや残念だよ。あのすべた、本當にしやうがないんだから。初めの中は、交際つて貰ひたいやうだから、交際つてやつたけれど、呆れぢやつたがね。ひどい奴よ、あのすべた。』シガアの残りを燻らしながら、お鶴は

前の家の若い酌婦を罵つた。

『でも、男女のこともつまらない。』

『あんなことを言つてゐるよ。これほど面白いものはないぢやないか。』

『それはさうだけでも……考へると、悲しくなつて来るもの。』

こんなことを言ふかと思ふと、おきよは、イヤにはしやいて、男を男とも思はないやうなこともあれば、浮世は其日暮し、浮いて遊んで暮さなければ詰らないといふやうな素振をすることもあつた。お鶴などがどんなに腕によりをかけても及びもつかないやうな金を、知らん顔をして男から絞り取ることもあつた。上品で、おとなしくて、座敷に出しては何うだらうかと危んだ亭主や上さんの心配も、單に杞憂に過ぎなかつた。

ある日、お鶴は上さんに言つた。

『何うして、何うして、手取にも何にも……。私なんか、とてもかなはない。やさしい顔をしてゐて、それで、男にかけちや上手なんだよ、お上さん。上方の者は旨いつて言ふが、實際あ、なんかしらん。随分、男のことも苦勞もして來たらしいよ。』

『でも、長く一とところにゐないのを見ると、何處か飽きつほいのかも知れないよ。この前ゐたところでも、半年と少ししきやゐらないんだつて言ふから。』

『國にゐた時には、何ういふことをして來たんだらうね。』

『さア。』

と言つて、上さんは考へた。

亭主の眼にも、今まで抱へた多くの女とは丸で違つた處が見えた。イヤにはしやいてゐるかと思ふと、何うしてまたあんなに沈んで了ふだらうと思はれるやうなことがあつた。そしてその時々につれて、顔の表情が著しく變つた。關東の女に見るやうな、怒つたり、ふてたりするやうなことの代り、しよげて、半日口もきかずに物を思つてゐるやうなことは度々あつた。さういふ時に、『何うかしたかえ？』と訊くと、莞爾笑つては見せるが、何も言はずに、靜かにすうと向うの方へ行つて了つた。をりく、掃除の手をやめては溜息などをついた。

三

『だつて、お前さん、無駄ぢやない？』

『でも、仕方がないよ。好きな男のためだもの。』

『でも、深入したつてしやうがないわよ。』

『それは、さうだけでも、かういふ稼業をしてゐては、ちつとは楽しみがなくつちや——』

『男のことで深入したつて、苦みはあるけども、楽しみなんかありやしない。』

『そんなことはないよ。お前さんには、わからないんだよ。』  
かうお鶴は笑つた。

『で、何うする積りなの？』

『何うせ、末は夫婦さね——』

『のんきなことを言つてるよ。』

『だつて、さう思つてゐなくつちや、貢いだり何かする氣にはなれないよ。稼業だと思つてゐれば、金をする氣にもなるけれども、心から思へや、男だつて、可愛いもの。』

『末は夫婦ね——』

『結構ね、』と言ふのを止して、おきよは神経性に笑つて見せた。

時には、おきよは『だつて、男のことなんか詰らない。それよりもね、お上さん、前のお猿さんでも見ての方が餘程面白いと思ふわ。だから、よく行つて見るのよ。私お猿さんのんきて好いわ。さつきも行つて見たら、犬と一緒に遊んでゐるんですよ。犬と猿つて言ふから、仲がわるいもんとばかり思つてゐたら、あそこのは、さうでないのよ。よく慣れてゐるの。見てゐて可笑しくなつちやつた。』  
んなことを言つて、よく汽車賣の店の前に立つて、長い間猿を見てゐた。

そればかりではなかつた。おきよは、時には、甘薯だの、鹽煎餅だのを持って行つて、それを猿にやつた。と、此頃では、猿はそれを知つてゐて、遠くにおきよの姿が見えると、キヤツ／＼と言つて跳り上つて見せた。と、汽車賣の亭主は、『矢張り畜生にも別品さんはわかるもんだね。おきよさんが來ると、容子が違はア、』などと言つて笑つた。

後には、『おきよさん、そんなにほんやりしてゐないで、また、猿でも見てお出でよ、』などとお鶴はからかつた。

其時分には、おきよの許に通つて來る客ももう大勢出來てゐた。あんなに上品ぶつて何うしてお客が出來るだらうと、始めは思つてゐたのに、却つて、お鶴よりもおきよの方を客が大騒ぎするのを亭主も上さんも見た。

日が暮れて灯がつく時分、湯から歸つた綺麗な顔をして、おきよが店先に坐つて居ると、男はいつも大和格子の隙間からソツと覗いて行つた。

『誰。』

かう言つて、立つて行つて、おきよは靜かに大和障子を開けた。

『貴方、好いちやないの。』

『また、此次ぎに……』

『まあ、そんなことを言はないでさ——』かう言つて、おきよは男を押すやうにして、無理に障子の中に入れた。

一人は近在の百姓の息子で、二十九位の肥つた荒くれた男であつた。一人は一里ほど離れた町の小商人で、家には女房も子供もゐた。一人はこの町の外れに住んでゐる四十男であつた。

と、ある夜、お鶴の客が町で大きな荒物屋をしてゐる梅田といふ家の二番息子を伴れて遊びにやつて来た。藝者なども聘んで、奥の座敷で大騒ぎをした。

その夜、初めておきよはその息子の席に出たが、不思議にも、それから續いてその息子はやつて来た。

『あの手堅い荒物屋で、大事な二番息子に、さういふことをさせては、』と亭主も上さんも思はぬではなかつたけれど、商賣の方から言つては、それは歓迎しない譯に行かなかつた。

『おきよさんも、満更ぢやないんだよ。』こんなことをお鶴は上さんに言つた。  
餘り度々息子が来るので、

『お前、あまり深入らせてお呉れてないよ。それはね、しつかりした家だから、いざと言へば困りやしないけれど、あそこは、家でも出入してゐる大事な家なんだから、ひどいことをしちや困るんだから、……好い加減にしておいておくれよ。』

『え、え、大丈夫ですよ。』

『少しは構はないけども——』

『大丈夫ですよ。』

かう言つてゐるけれども、おきよの素振は今までとはいくらか違つて來てゐるのを上さんも亭主も見つた。客が運わるく落合ふ時などには、おきよはその息子をそつと別の室に忍ばせて置いたりした。

息子は今年二十七で、初めて女の熱い情を知つたといふ風であつた。いつも餉臺を前にして黙つて坐つてゐた。酒を飲んでも、酔ふでもなく騒ぐでもなく唄ふでもなく、むしろきまりがわるいやうな顔やら態度やらをあたりに見せてゐた。

一夜お鶴が行つて見ると、おきよばかり酒を飲んでゐた。

おきよはかなり酔つてゐた。

『世の中はつまらないわね。』

『何うしてそんなことを言ふのさ？』

かうお鶴が言ふと、

『お前さんなんかにはわからないよ。ね、貴方、存ちやん。私、少し飲んでも好う御座んすね。ちつとは、酒でも飲まなければ、とても生きてゐられんですもの。』二盃ぐつと飲んで、『お鶴さん、今日は、存ちやんにね、私の話をするつて言ふ約束をしたのよ。存ちやんになら、私、何んなことでも話したつ